

住吉宮町遺跡

(第17次・第18次調査)

—阪神・淡路大震災復興に伴う発掘調査—

1998

神戸市教育委員会

住吉宮町遺跡

(第17次・第18次調査)

—阪神・淡路大震災復興に伴う発掘調査—

1998

神戸市教育委員会

序 文

前に瀬戸内海、後ろに六甲山を望む神戸市は、国際貿易港や異人館のある街として古くから愛されております。また一方では、平清盛ゆかりの福原京や大輪田泊、源氏物語で知られる須磨浦、多くの平安歌人が歌に詠んだ布引の滝など文化的にも優れた環境をもっております。こうした私たちの目にする文化の他にも、地下に埋もれた埋蔵文化財の調査により、神戸市のみならず我が国の歴史的発展を具体的に解明していく上で重要な遺跡や資料が、相次いで発見されています。

平成7年1月17日未明の兵庫県南部地震は、神戸市にも甚大なる被害を与えました。多くの大切な命を失い、地震による家屋の倒壊、火災による家屋の焼失という過去に例のないほどのことでした。文化財においても、倒壊したり、焼失したりと貴重な国民の財産が大きな痛手を受けました。地下にある埋蔵文化財には直接的な被害は少なかったようですが、震災から早急に立ち直り、住宅を建てて早く元の市民生活ができるように、埋蔵文化財の調査も今まで以上に沢山の調査を遅れることなく進めることになりました。

今回の発掘調査は、民間の集合住宅建設に先だって行われましたが、調査にあたっては兵庫県教育委員会の多大なご支援をいただきました。

震災から3年が経過した今日、復興も軌道に乗りまして、かつての神戸がよみがえりつつあります。

今後とも市民共有の文化財を保護し、後世に伝えていくように努力していきたいと思えます。ここにこの発掘調査で明らかになりました成果を報告書としてまとめることができました。広く市民のみなさまにご活用いただければ、幸いに存じます。

発掘調査および本書の刊行にあたり多くの方々のご協力を得ました。末筆になりましたが、厚く御礼申し上げます。

平成10年1月19日

神戸市教育長 鞍本昌男

例 言

- 1) 本書は阪神・淡路大震災の復興に関して行われた共同住宅建設等に伴う住吉宮町遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2) 本調査は国庫補助を受けている。
- 3) 本書には、平成7年度に実施した1遺跡2地点を収録した。編の構成は各地点毎に編をおこし、それに序編を加えた。

序 編

第1編 住吉宮町遺跡(第17次調査)・・・神戸市東灘区住吉宮町7丁目4-13

第2編 住吉宮町遺跡(第18次調査)・・・神戸市東灘区住吉宮町7丁目7-7

- 4) 調査は、地方自治法第252条の第17項の規定に基づき、阪神・淡路大震災復興支援のため兵庫県教育委員会に派遣され、同教育委員会より神戸市教育委員会に人的支援にあたった以下の者が担当した。

小野田 義 和 福島県教育委員会

秦 憲 二 福岡県教育委員会

- 5) 調査に際しては、以下の2名を補助員として充て調査にあたった。

西田 明子 磯辺 敦子

- 6) 本書に示した標高値および国土座標は国際航業に委託して計測したものである。なお、本書で使用している標高値(レベル)は、すべて東京湾平均海水準(T.P.)である。
- 7) 遺構写真は、それぞれの担当者が分担して行った。
- 8) 遺構写真のうち全景写真は国際航業に委託して撮影した。
- 9) 遺物写真は、楠本真紀子氏が撮影したものである。
- 10) 整理・報告書作成作業は、現地事務所を中心にして行われた。遺物の実測・トレース・判組は担当者と補助員がそれにあっている。
- 11) 本書の執筆は、各担当者が分担して行った。
- 12) 調査及び報告書作成にあたっては、次の方々及び団体にご協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。(敬称略・順不同)

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

工楽善通(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長)

浅岡俊夫、古川久雄、萩原美香(六甲山麓遺跡調査会)

兵庫県東灘警察署

本文目次

序 編

第1章	調査経緯	1
第1節	阪神・淡路大震災と埋蔵文化財	1
第2節	自然環境	3
第3節	歴史環境	5

第1編 住吉宮町遺跡（第17次調査） 15

第1章	調査経緯	16
第1節	調査にいたる経緯	16
第2節	調査の方法	16
第3節	基本層位	17
第2章	第1・2・3遺構面の遺構と遺物	19
第1節	第1遺構面の遺構と遺物	19
第2節	第2遺構面の遺構と遺物	21
第3節	第3遺構面の遺構と遺物	23
第3章	第4遺構面の遺構と遺物	24
第1節	奈良時代の遺構と遺物	25
	1. 概 要	25
	2. 集石遺構	25
	3. 溝 跡	26
	4. 遺 物	29
第2節	第IV層の遺物	31
第3節	古墳時代後期から飛鳥時代の遺構と遺物	34
	1. 概 要	34
	2. 掘立柱建物跡	34
	3. その他の柱穴遺構と遺物	38
	4. 竪穴状遺構	40
	5. 竪穴住居跡	40
	6. 土 坑	49
第4章	古墳時代の遺構と遺物	52
第1節	古 墳	52
第5章	その他の遺物	64
第1節	第V層出土遺物	64

第2節	古墳時代遺構外出土の遺物	66
第3節	第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物	69
第4節	戦争遺物	69
第6章	ま と め	72

挿 図 目 次

第1図	神戸市の位置と行政区分	2
第2図	住吉周辺の変遷	4
第3図	周辺主要遺跡分布図	6
第4図	住吉宮町遺跡調査地点（本住吉神社より西）	8
第5図	住吉宮町遺跡調査地点（本住吉神社より東）	9
第6図	基本土層図	17
第7図	調査区南壁東西土層断面	18
第8図	第1遺構面遺構全図	20
第9図	第2遺構面遺構全図	20
第10図	第Ⅱ層・第2遺構面出土遺物	22
第11図	第3遺構面遺構全図	23
第12図	第Ⅲ層・第3遺構面出土遺物	24
第13図	第4遺構面遺構全図	26
第14図	第4遺構面・遺構断面	27
第15図	1号集石・4号溝跡	28
第16図	1号集石・4号溝跡出土遺物	30
第17図	1号集石遺構出土遺物	32
第18図	1号集石遺構・Ⅳ層出土遺物	33
第19図	第4遺構面下面検出遺構	35
第20図	1・2号建物跡	36
第21図	3～7号建物跡	37
第22図	掘立柱建物跡・柱穴列・竪穴状遺構出土遺物	39
第23図	1・2・3号住居跡	41
第24図	4号住居跡	42
第25図	5・13・7号住居跡	44
第26図	6・11・12号住居跡	46
第27図	8・9・10・14・15号住居跡	48
第28図	16号住居跡・1号土坑	50
第29図	竪穴住居跡出土遺物	51
第30図	第5遺構面遺構配置図・地形図	53

第31図	1号墳実測図	54
第32図	2号墳実測図	55
第33図	3号墳実測図	57
第34図	3号墳主体部実測図	58
第35図	4・5号墳実測図・古墳出土遺物実測図	60
第36図	6号墳実測図	61
第37図	7・8号墳実測図	63
第38図	V層出土遺物	64
第39図	鉄製品・石製品	65
第40図	古墳時代の遺物①	67
第41図	古墳時代の遺物②	68
第42図	その他の遺物	70
第43図	攪乱中出土戦争遺物	70

表 目 次

第1表	住吉宮町遺跡周辺主要遺跡	7
第2表	遺跡一覧	10
第3表	住吉宮町遺跡調査一覧	11

図 版 目 次

遺物図版中の数字は 挿図番号－遺物番号 を示す。(例 40－15 第40図の15の遺物)

図版1	住吉宮町遺跡17次、18次調査 航空写真
図版2	上 調査状況(北東から)
	下 調査状況(南東から)
図版3	上 第1遺構面全景(南から)
	下 第2遺構面全景(南から)
図版4	上 第3遺構面全景(南から)
	下 1号溝跡南側遺構(西から)
図版5	上 1号溝跡東側遺構土層断面(南から)
	下 1号溝跡南側遺物出土状況(東から)
図版6	上 1号集石遺構全景(南から)
	下 1号集石遺構北側部分と断面(北から)
図版7	上 1号集石遺構・4号溝跡調査区南壁断面C－C' (北から)
	下 1号集石遺構・4号溝跡調査区南壁全掘C－C' (北から)
図版8	上 4号溝跡北側土層断面A－A' (南から)
	中 4号溝跡中側土層断面B－B' (南から)

- 下左 1号集石遺構遺物出土状況、円面硯（南西から）
 下右 1号集石遺構遺物出土状況 須恵器甕（南西から）
- 図版9 上 4号溝跡全景（南から）
 下 4号溝跡・柱列・掘立柱建物跡（南から）
- 図版10 第4遺構面全景（航空写真・右側が北）
- 図版11 上 1号建物跡（西から）
 中左 P226土層断面
 中右 P227土層断面
 下左 P228土層断面
 下右 P174土層断面
- 図版12 1段左 2号建物跡 P161断面
 1段右 2号建物跡 P162断面
 2段左 2号建物跡 P165断面
 2段右 2号建物跡 P167断面
 3段左 3号建物跡 P191断面
 3段右 3号建物跡 P192断面
 4段左 3号建物跡 P255断面
 4段右 3号建物跡 P256断面
- 図版13 上左 4号建物跡 P152断面
 上右 4号建物跡 P153断面
 中左 4号建物跡 P171断面
 中右 7号建物跡 P170断面
 下 竪穴状遺構（南から）
- 図版14 上 3号竪穴住居跡全景（南から）
 下 3号竪穴住居跡かまど全景（南から）
- 図版15 上 4号竪穴住居跡全景（南から）
 下 4号竪穴住居跡土層断面（西から）
- 図版16 上 4号竪穴住居跡かまど全景（南から）
 下 4号竪穴住居跡かまど土層断面（西から）
- 図版17 上 5・13号竪穴住居跡全景（西から）
 下 7号竪穴住居跡全景（東から）
- 図版18 上 6号竪穴住居跡全景（北から）
 下 8・9号竪穴住居跡全景（西から）
- 図版19 上 11号竪穴住居跡かまど全景（南から）
 下 12号竪穴住居跡全景（南から）
- 図版20 上 15号竪穴住居跡全景（南から）
 下 15号竪穴住居跡かまど土層断面（南から）
- 図版21 上 16号竪穴住居跡全景（南から）
 下 1号土坑全景（南から）
- 図版22 第5遺構面全景（航空写真・右側が北）
- 図版23 上 第5遺構面全景（北側上方から）
 下 第5遺構面全景（東側上方から）
- 図版24 上 1号墳東側周溝（南から）
 下 1号墳南東コーナー（東から）
- 図版25 上 2号墳全景（南上から）
 下 2号墳全景（南西から）

図版26	上	2号墳南側周溝土層断面（西から）
	下	2号墳南東コーナー（南から）
図版27	上	3号墳全景（北東から）
	下	3号墳全景（北東から）
図版28	上	3号墳主体部全景（東から）
	下	3号墳主体部全景、蓋石除去後（東から）
図版29	上	3号墳東西断面（南から）
	下	3号墳南北断面（東から）
図版30	上	4号墳周溝土層断面（北から）
	下	5号墳周溝土層断面（東から）
図版31	上	6号墳全景（南から）
	下	6号墳東側周溝（北から）
図版32	上	6号墳南側断面（南から・南東コーナー付近）
	中	6号墳南側周溝土層断面全景（東から）
	下	6号墳東側周溝断面（北から）
図版33	上	6号墳南側墳丘・周溝（東から）
	下	7号墳周溝土層断面（北から）
図版34	上	8号墳全景（西から）
	下	8号墳土層断面（北から）
図版35	上	8号墳墳丘南北土層断面（東から）
	下	8号墳主体部遺物出土状況（北から）
図版36		1号溝出土遺物
図版37		1号溝出土遺物
図版38		1号溝出土遺物
図版39		第Ⅱ層出土遺物
図版40		1号集石遺構・4号溝出土遺物
図版41		1号集石遺構・4号溝出土遺物
図版42		1号集石遺構・4号溝出土遺物
図版43		第Ⅳ層出土遺物
図版44		遺構内出土遺物（竪穴住居跡・P208・竪穴状遺構）
図版45		古墳出土遺物
図版46	上左	凹石
	上右	3号墳北側出土遺物
	下	第Ⅱ層・第2遺構面出土遺物
図版47	上下	第Ⅱ・Ⅲ層出土遺物
図版48	上下	1号集石遺構・4号溝出土遺物
図版49	上下	1号集石遺構・4号溝出土遺物
図版50	上	第Ⅳ層出土遺物

図版50	下	掘立柱建物跡出土遺物	
図版51	上	掘立柱建物跡・柱穴列・竪穴状遺構出土遺物	
	下	竪穴住居跡出土遺物	
図版52	上	竪穴住居跡出土遺物	
	下	古墳出土遺物・円筒埴輪	
図版53	上	形象埴輪	
	下	第Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ層出土遺物	
図版54		戦争遺物（上左 焼夷弾、上右 擲弾筒、下 軽機関銃）	

第2編	住吉宮町遺跡（第18次調査）	75
第1章	調査経緯	76
第1節	調査経緯	76
第2節	調査方法	76
第2章	古墳時代の遺構・遺物	78
第1節	基本土層	78
第2節	古墳	78
第3節	まとめ	78

挿図目次

第1図	18次調査位置図	76
第2図	遺構平面図・出土遺物	77

図版目次

図版1	上 調査前全景（南から）	
	下 調査区西壁土層断面（東から）	
図版2	上 調査区全景（西から）	
	下 調査区全景（南から）	

参考文献・資料・報告書	80
--------------------	----

報告書抄録	82
--------------	----

序 編

序 編

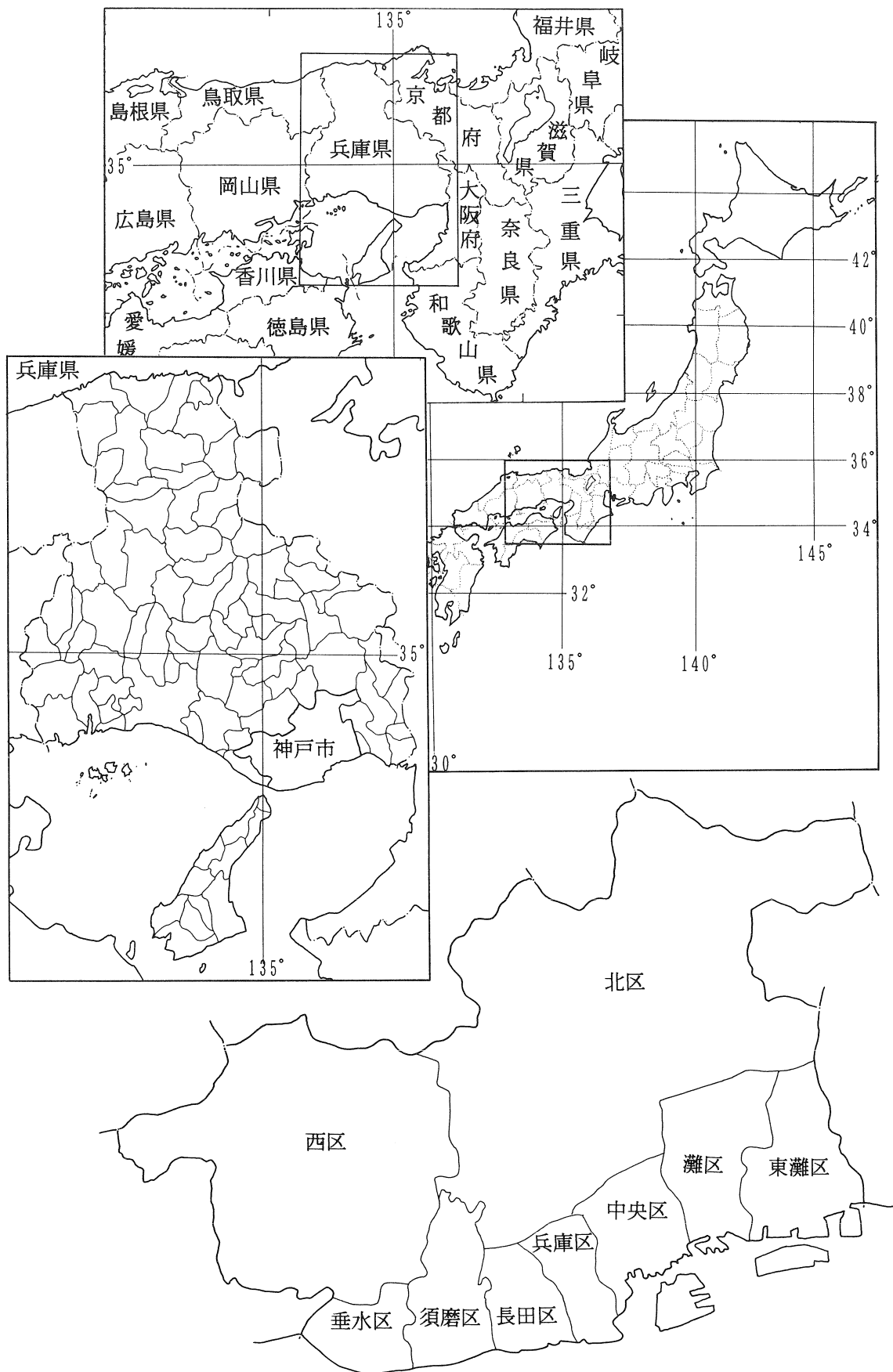
第1章 調査経緯

第1節 阪神・淡路大震災と埋蔵文化財

本節については、平成9年3月31日発行の平成6年度神戸市埋蔵文化財年報に、「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財」という表題で、震災後の埋蔵文化財に関する記録が詳細に所収されている。本書においては、それをふまえて、震災の発生から半年間の状況を追ってみる。1995年1月17日午前5時46分、淡路島北東部を震源とするマグニチュード7.2の地震は神戸市をはじめとして阪神、淡路地区に未曾有の被害をもたらした。6000名を超える死者、30万人を越す人々が厳しい寒さの中で避難所生活を余儀なくされた。この混乱した状況の中、被災市民への援護をするとともに、迅速なる復旧・復興に対応するため埋蔵文化財包蔵地上における被災状況の把握に努め、兵庫県教育委員会、文化庁と連絡を取り対応策を協議した。

- 1月25日～29日 埋蔵文化財包蔵地の被災状況の調査。東灘区から須磨区の包蔵地 207カ所の内98カ所を調査し、被災面積にして234.2haにのぼることが判明。
- 2月7日～8日 被災状況の調査資料を基に、国・県・市合同で、東灘区から須磨区の13カ所の被災包蔵地調査。
- 2月23日 「阪神・淡路大震災に伴う復旧工事に係る埋蔵文化財の当面の取扱いについて（通知）」（文化庁）震災の復旧・復興に伴う埋蔵文化財の取り扱いについては、5月末日までに着工されるライフラインの復旧等の緊急を要する復旧事業は、届出・通知を不要とする。
- 3月29日 「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針（通知）」（文化庁）6月1日以降平成10年5月31日までは、復旧・復興事業により遺構が損壊される場合に限り発掘調査を実施する等の弾力的な措置を執る。
- 4月28日 「阪神・淡路大震災の復旧・復興に伴う埋蔵文化財の取扱い適用要領について（通知）」（兵庫県）復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の保護との整合を図ることを目的とし、個人住宅・店舗、小規模または簡易な集合住宅・事業所、生活関連公共施設、従前と規模・構造が大きく変わらない建物等の発掘調査を原則的に緩和する。発掘調査に関する費用は、公費による助成枠が拡大され、従来の個人住宅の他に中小企業者まで対象が拡大。
- 6月1日 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に2府15県より支援職員25名配属（2月2日に兵庫県から全国知事会を通じての埋蔵文化財専門職員の派遣要請による）

本書で取り上げる住吉宮町遺跡は、包蔵地面積22万㎡のうち約50%にあたる11万㎡が被災した面積である。



第1図 神戸市の位置と行政区分

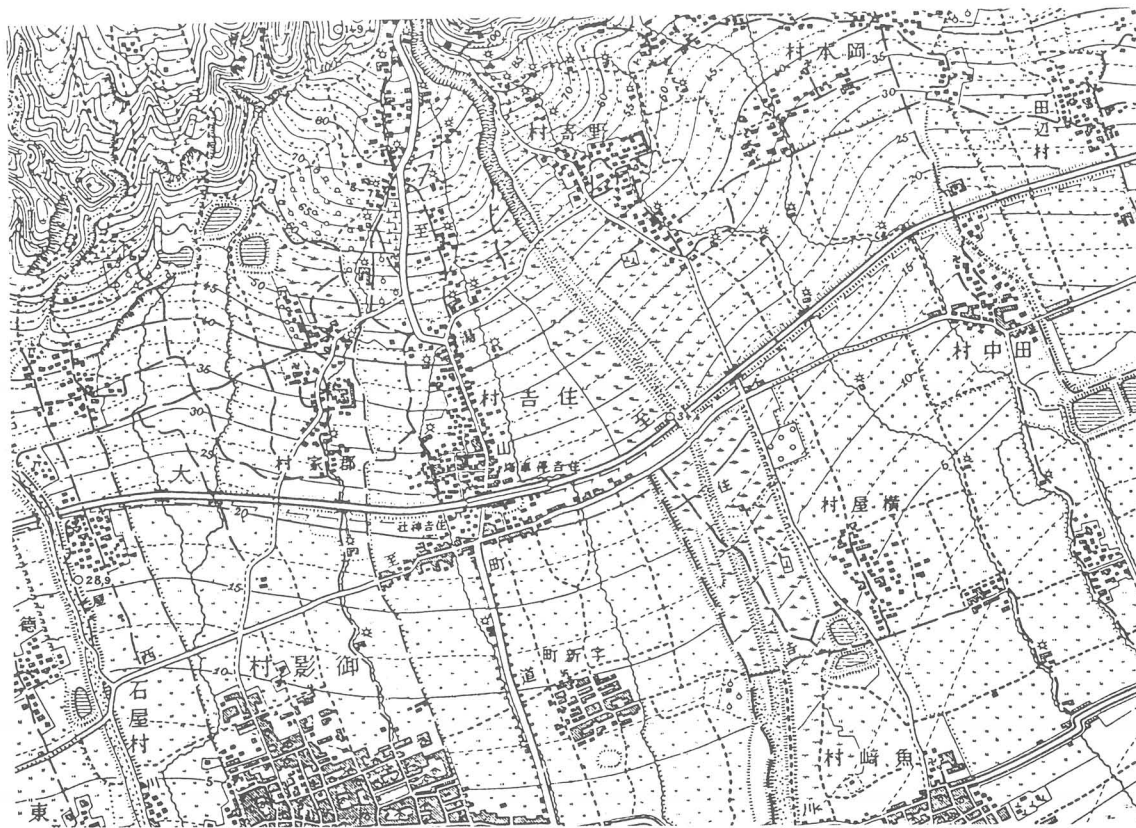
第2節 自然環境

住吉宮町遺跡は、六甲山麓から南に流れる住吉川と石屋川によって形成された複合扇状地の末端に近い緩傾斜地（現地表高20.0～25.0m）に立地している。北に連なる六甲山地は東西約30km、南北7kmの規模で最頂部の標高も約900mである。山腹は断層のため急峻であるが、複数の断層によって形成されていることが知られている。こうした断層には破碎帯を多く伴っており、山崩れなどの誘因となっている。

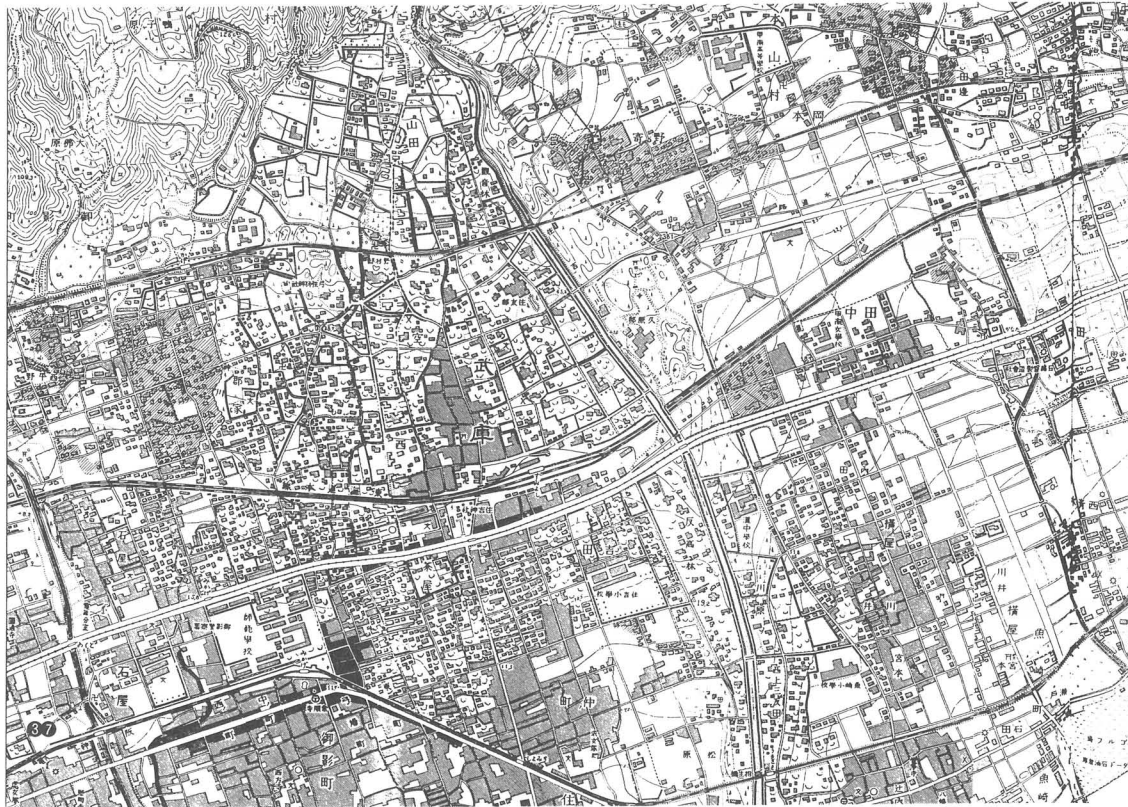
六甲山地の地質は主に風化花崗岩で構成されている。K-Ar法による花崗岩の年代は約7300万年前の値を示す。現在我々が見ている六甲山地の前身は約120万年前にあったと考えられている。このことは淡路島を境として、大阪湾側と播磨灘側の地層が異なっていることで、その間を分けている高まりが想定されることに由来し、山上の地層からは現在の大阪湾と同様にこの時期の六甲山地もまだ海底にあった痕跡が認められている。この海底にあった六甲山の前身が断層運動によって分離される。今から50～60万年前からは「六甲変動」と呼ばれる現在の六甲山地を形成する隆起が起こったという。この隆起運動と大阪湾の沈降運動の結果、現在までの約100万年の間に1000m近い高低差を生じさせ、また、40kmに及ぶ山塊を形成させた。この隆起運動により六甲山地とそれに伴う断層が形成されていく。断層において特によく知られているものに、東灘区の五助橋断層と兵庫区から中央区にかけての諏訪山断層がある。そのうち五助橋断層は、六甲山を2つに分断する断層で、長さも10kmを測る。この断層は断層破碎帯の幅も広く、現在の住吉川はこれに沿って浸食された断層谷である。この五助橋断層を源に持つ住吉川は、六甲山地の隆起と共に現在の高さまで扇状地を形成しながら上昇していったものと考えられている。従って五助橋断層からは、礫を含む土砂が多量に流れ出ており、急速に土砂の堆積が進んでいった形跡が窺える。こうした場所では、集中豪雨などにもなう土石流が発生しやすい。このような土石流や洪水の痕跡は、発掘調査などで確認されている。

最も古い洪水の記録は慶長13（1608）年の住吉川の洪水の記録が初出である。江戸時代の六甲山の南麓では、40回を超える洪水、堤切れ、水や土砂の田畑への流入などの水害の記録がある。こうした洪水を起こしやすい六甲山の様子は、全くのハゲ山であったことを宝暦12（1762）年の幕府提出文書の写しが伝えている。また、明治初期に海上より六甲山を見た牧野富太郎は「・・・はじめは雪が積もっているのかと思った。」と記述しているような何もない山であったようである。現在のような緑の山になったのは、明治25年に発生した土砂災害が契機になって、明治28（1895）年に植林や砂防ダムの工事が開始され、29・30年の河川法などの法制度の整備を経て、明治35（1902）年に始まる砂防植林事業の結果である。

神戸市域の気候は、比較的雨の少ない瀬戸内気候帯に属しているが、六甲山地によって南麓部分と北側ではだいぶ異なる気候状況を示す。南側の地域は山地が冬の季節風をおおむね遮断し、南面する斜面は日照も良く年間を通じて温暖である。山地の北側の有馬や道場地区は、標高200m前後と高く冬季は季節風などで冷涼である反面、夏場は盆地的高温になる。南麓は年間降水量1200～1400mmと全国平均降水量の1800mmと比べて少ない。六甲山の屏風状の形状は、南海上からの湿度の高い風を急激に上昇気流に変化させしばしば豪雨をもたらす。六甲南麓の年平均最高気温は19.7℃、年平均最低気温は11.7℃と温暖である。



①1885年（明治18年）測量 1/20000 大日本帝国参謀本部陸軍部測量局 仮製地形図



②1932年（昭和7年）修正測量図 1/20000 「神戸都市図」1995年 柏書房（株）より

第2図 住吉周辺の変遷

第3節 歴史環境

住吉宮町遺跡はJR住吉駅周辺に立地している。この地域は早くから市街化が進み、埋蔵文化財包蔵地であることはまったく知られていなかった。昭和60年に住吉宮町7丁目でマンション建設の際に遺物が出土し、遺跡の所在が明らかになった。その後、マンション建設や駅舎ビルの建築などに伴い16次の調査が実施され、弥生時代中期・終末期の竪穴住居や古墳時代後期の古墳群、奈良・平安時代、中世の集落等が確認されている。こうした都市開発等による発見・調査が急増しており、個々の面積は狭いものの徐々に、この地域における歴史解明の資料が増加しつつある。

住吉宮町の周辺地域からは縄文時代から遺跡が確認されている。隣接する芦屋市域の山芦屋遺跡では縄文時代早・前・後期の土器が出土している。また、同市の朝日ヶ丘遺跡からは前期の土器が出土している。神戸市域では、中央区の宇治川南遺跡では前期から弥生前期まで、同区雲井遺跡では前期から弥生中期まで継続している。灘区の篠原遺跡は東北地方にみられる遮光器土偶や注口土器が西日本系の土器と共伴して出土しており摂津地方の縄文晩期の標識遺跡として知られている。東灘区の本庄町遺跡と本山遺跡では晩期の土器片が出土しているが、いずれも少量の土器片の出土であり遺跡の全容を解明するものに至らない。

弥生時代になると発見例が増加する。前期前半のものでは臨海部の微高地上に立地する北青木遺跡、本庄町遺跡では弥生時代前期前半の水田遺構が検出されている。扇状地の末端部に立地するものとしては本山遺跡などが知られている。本山遺跡からは偏平紐式四区袈裟襷文銅鐸が出土している。

弥生時代中期になると更に発見例が増加する。それに伴って遺跡の立地にも変化が認められる。臨海部では遺跡の継続が見られず、標高10m以上の扇状地上や台地上に現れる。本山遺跡や、森北町遺跡、住吉宮町遺跡がこれにあたる。さらには標高100m以上に立地する高地性集落が出現する。保久良神社遺跡は中期後半の「磐境」と考えられている。本遺跡から2km東の芦屋市会下山遺跡までの間、15の弥生高地性集落と銅鐸・銅戈の出土地が連続している。14個の銅鐸と7本の銅戈を出土した桜ヶ丘遺跡はこの西4kmに位置している。

弥生時代後期になると郡家遺跡や森北町遺跡などにおいて、円形周溝墓あるいは方形周溝墓と考えられる遺構や、竪穴住居跡が確認されている。岡本北遺跡においても竪穴住居跡が確認されている。また低地の深江北町遺跡においては直径7～8mの墳丘墓が11基確認されている。

古墳時代では、へボソ塚古墳(64m)が前期中葉に推定され、この地区では最も古い様相を示している。その他の前期古墳としては西求女塚古墳(95m)・処女塚古墳(70m・前方後方墳)・東求女塚古墳(前方後円墳)があげられる。このうち西求女塚古墳は平成6年にも調査が行われ、前方後方墳であることが確認された。この古墳は「慶長の大地震」によって墳丘盛土が地滑りをおこしていることが判明している。中期になると古墳の大型化が進み垂水区の五色塚古墳(194m)がその代表にあげられるであろう。後期では住吉宮町遺跡、岡本梅林群集墳や生駒古墳など多くの群集墳が造られている。都市化が進み、地上に出ていた墳丘は比較的早い時期から消滅している。集落では、長田区松野遺跡は柵や溝で区画された掘立柱建物跡群が確認されている。歴史時代では近隣の郡家遺跡が菟原郡衙に比定されており、古代の山陽道はこのあたりを通過していると考えられている。



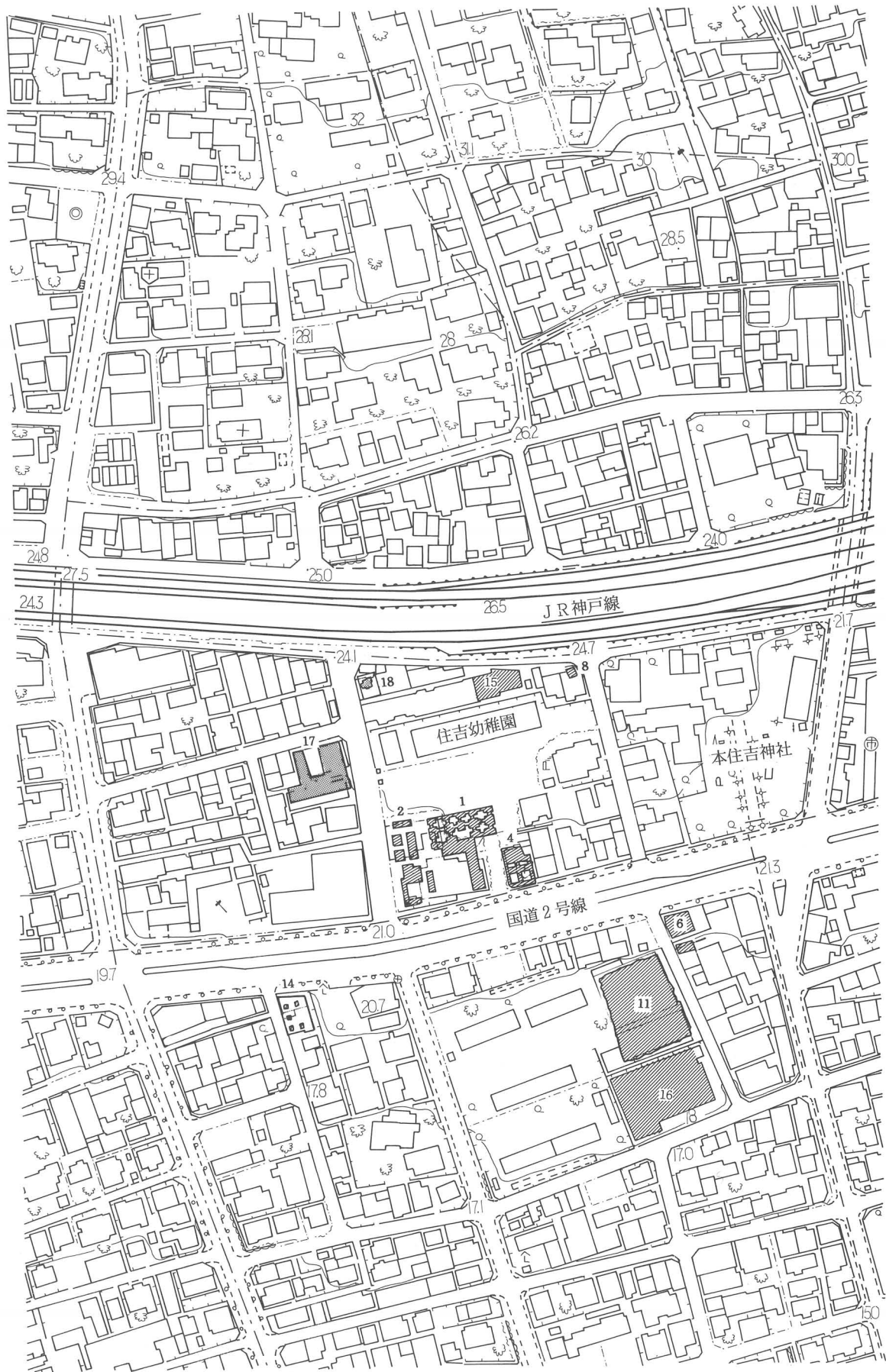
第3図 周辺主要遺跡分布図

1/25000

第1表 住吉宮町遺跡周辺主要遺跡

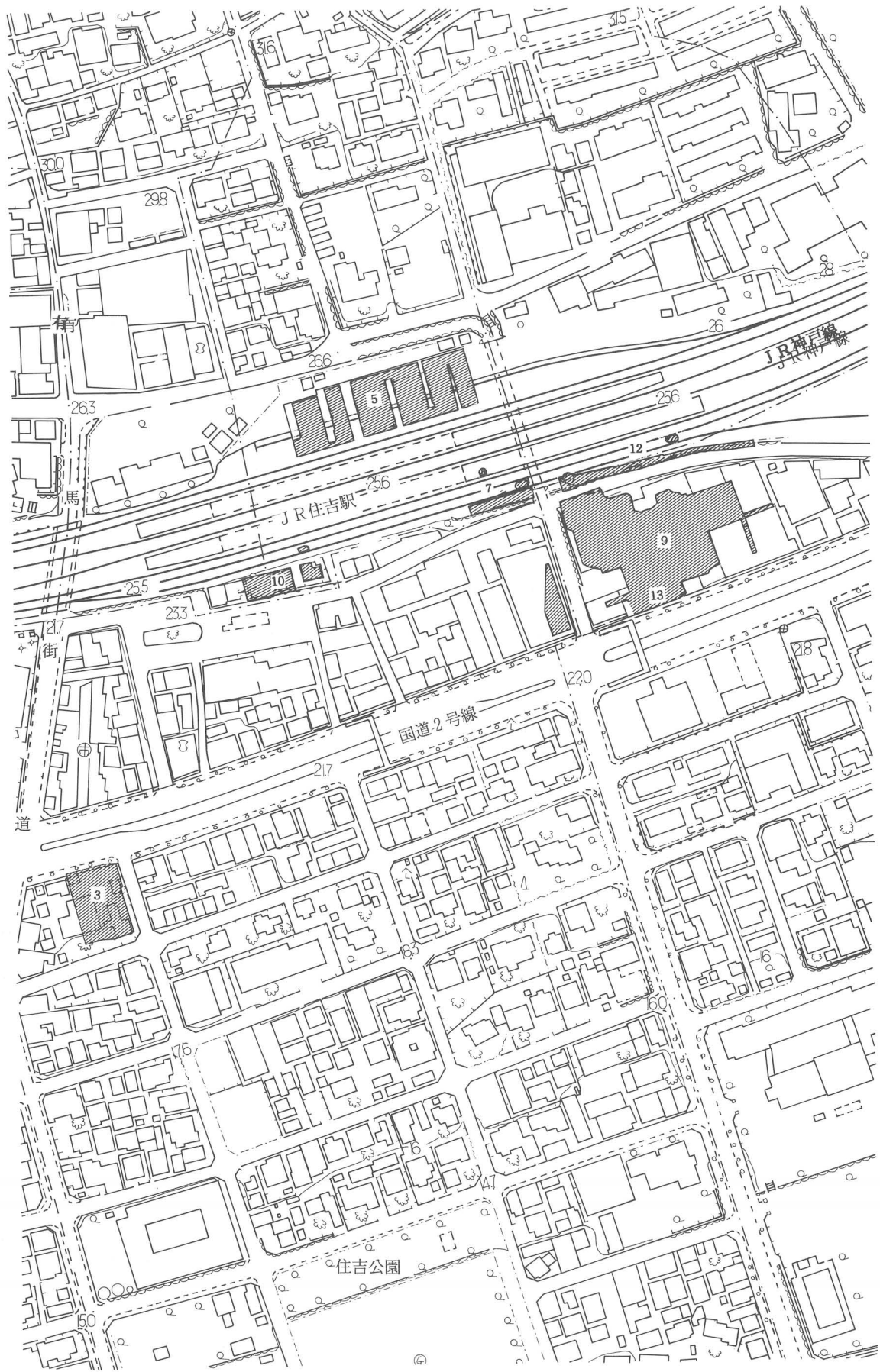
東 灘 区				灘 区			
NO	遺 跡 名	所 在 地	時 代	NO	遺 跡 名	所 在 地	時 代
1	渦ヶ森銅鐸	渦森台	弥生	3	桜ヶ丘銅鐸	高羽	弥生
2	荒神山	住吉台	弥生	4	申新田	高羽	縄文
3	赤塚山	住吉山手	弥生	5	滝ノ奥	高羽	旧石器～
4	伝 承	御影山手	古墳	6	十善寺古墳群	一王山町	古墳
5	郡 家	御影・住吉	弥生～平安	7	桜ヶ丘B地点	桜ヶ丘町	弥生
7	伝 承	岡 本	古墳	9	散布地	高羽	
8	伝 承	西岡本	古墳	11	伝 承	楠丘町	古墳
9	伝 承	住吉山手	古墳	12	伝 承	楠丘町	古墳
10	坊ヶ塚	住吉本町	古墳	20	伝 承	気田町	古墳
11	処女塚古墳	御影塚町	弥生・古墳	30	徳井町	徳井町2丁目	中世
12	東求女塚古墳	住吉宮町	弥生・古墳	32	桜口町	桜口町4丁目	中世
14	金鳥山	本山町	弥生				
15	岡本梅林古墳	岡 本	古墳				
16	散布地	岡 本					
17	八幡谷古墳	本山町	古墳				
18	保久良神社	本山町	弥生				
21	扁保曾塚	岡 本	古墳				
22	散布地	本山北町					
36	本 山	本山中町	弥生・中世				
37	岡 本	岡本3丁目					
39	住吉宮町	住吉宮町	弥生～中世				
43	西岡本	西岡本6丁目	古墳・中世				
44	西平野	御影町西平野	弥生・中世				
45	魚崎中町	魚崎中町	古墳・中世				
46	岡本北	岡本9丁目	弥生・中世				
47	甲南町	甲南町4丁目	中世				
48	御影山手	御影山手	中世				
49	本山北	岡本1丁目	弥生～中世				

この表は神戸市埋蔵文化財分布図（平成7年3月）より抜粋して作成し、第3図周辺主要遺跡分布図に対応している。そのためこの表中では、欠番が生じている。



第4図 住吉宮町遺跡調査地点（本住吉神社より西）

1/2500



第5図 住吉宮町遺跡調査地点 (本住吉神社より東)

1/2500

第2表 遺跡一覧

旧石器	縄文時代	弥生時代	古墳時代	歴史時代
	早 前 中 後 晩	前 中 後	前 中 後	飛鳥・奈良・平安・中世
<ul style="list-style-type: none"> • 兵庫区会下山 ————— 中央区生田 • 西区新方 • 灘区滝ノ奥 ————— 兵庫区湊川 • 垂水区名谷 ————— 芦屋市会下山 ————— 芦屋市山芦屋 • ————— 芦屋市朝日ヶ丘 ————— 中央区日暮 ————— 中央区宇治川南 須磨区境川 — 東灘区金鳥山遺跡 ————— 中央区雲井 ————— 灘区篠原 兵庫区楠荒田町 ————— 東灘区北青木 東灘区深江北町 ————— 東灘区森北町 ————— 東灘区本山 ————— 東灘区保久良神社 ————— 灘区伯母山 ————— 灘区桜ヶ丘 須磨区戎町 ————— 東灘区へボソ塚古墳 ————— 灘区西求女塚古墳 ————— 東灘区処女塚古墳 ————— 東灘区東求女塚古墳 ————— 垂水区五色塚古墳 ————— 東灘区住吉東古墳 長田区松野 西区吉田南 西区神出窯跡群 長田区神楽 東灘区郡家 東灘区住吉宮町 				

住吉宮町遺跡調査一覧

次	年	所在地	調査内容
1	1985	住吉宮町7丁目	古墳時代後期の古墳3基・溝・土坑・ピット 鉄刀1・円筒埴輪・須恵器・土師器・甗・土錘 鎌倉時代の土坑、瓦器碗・白磁碗・羽釜・須恵器
2	1985	住吉宮町7丁目	古墳時代前期初頭の土坑、庄内式期の甗・壺・鉢 後期初頭の古墳8基、須恵器・円筒埴輪 後期末の河道・ピット、土師器・須恵器・円筒埴輪 ・飯蛸壺・土錘
3	1985	住吉宮町3丁目	古墳時代の溝跡、須恵器・製塩土器 中世の土坑、須恵器・土師器・瓦器・青磁碗・白磁碗 近世の石組み暗渠・ピット、陶器鉢
4	1986	住吉宮町7丁目	古墳時代前期初頭の土坑、庄内式期の甗 古墳時代後期初頭の箱式石棺3基 須恵器・土師器小型丸底壺、 古墳時代後期末～奈良時代の溝跡 須恵器・土師器・円筒埴輪 土錘・蛸壺・水晶製切子玉
5	1987	住吉宮町1丁目 坊ヶ塚遺跡	弥生時代末以前の3面以上、 後期末の方形周溝墓3基 古墳時代前期の竪穴住居跡・木棺墓・土坑墓、 後期の方墳9基・河原石積石室2基・水田 平安時代後期～鎌倉時代の掘立柱建物跡2棟など
6	1987	住吉宮町6丁目14	古墳時代・中～近世の土坑など、弥生～中世の遺物
7	1987	住吉宮町4丁目 住吉宮町5丁目	弥生時代中期～古墳時代後期の水田、 弥生時代末の方形周溝墓3基、弥生土器 古墳時代後期の古墳2基・土器棺1基、 土師器・須恵器・円筒埴輪・鉄鏃・鎌 平安～鎌倉時代の遺物・・緑釉陶器・土鍋・瓦器・白磁

次	年	所在地	調査内容
8	1987	住吉宮町7丁目	鎌倉時代のピット、須恵器・土師器・羽釜・瓦器
9	1988	住吉東町8丁目	弥生時代後期末の周溝墓1基、溝跡、庄内式期の甕 古墳時代後期の竪穴住居跡10棟 方墳3基・帆立貝式前方後円墳1基（住吉東古墳 全長24m） 弥生時代末～古墳時代初頭の土器、須恵器（坏・高坏・甕） 製塩土器、石製模造品（滑石製双孔 円盤・白玉・管玉・紡錘車・剣型石 製品・瑪瑙製勾玉）土師器、鉄鏃 埴輪（円筒・朝顔形・人物・馬形） 奈良時代～平安時代の掘立柱建物跡9棟
10	1988	住吉宮町4丁目	弥生時代の土坑、弥生後期の土器片 古墳時代、第7次調査時検出の2基の古墳の一部確認 奈良時代の水田、溝跡 須恵器 中世の水田、天目茶碗
11	1988	住吉宮町6丁目	弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴住居跡6棟、 土器（第Ⅱ、Ⅲ様式、庄内式併行式）、石器（石鏃・石錐・ 刃器・太型蛤刃石斧・砥石）・管玉 古墳時代の竪穴住居跡4棟、庄内式～布留式併行式期・6C、後半 平安時代前期の掘立柱建物跡3棟、地鎮遺構2基、 平安時代後期の掘立柱建物跡2棟、 東播系須恵器・灰釉陶器碗・黒色土器・羽釜・白磁碗 室町時代の採石跡・地震跡、備前焼のすり鉢
12	1989	住吉宮町4丁目	弥生時代の遺物包含層、 古墳時代後期の古墳3基・土坑1基・流路 奈良時代の集石遺構 鎌倉時代の石垣・溝 江戸時代の土石流痕・集石土坑

次	年	所在地	調査内容
13	1989	住吉東町5丁目	<p>第9次調査で地下保存をした地点（北地区）と第9次調査地に南隣した地点（南地区）の調査</p> <p>北地区・・住吉東古墳の周溝、4号墳墳丘</p> <p>南地区</p> <p>古墳時代・・古墳2基、竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡1棟 土坑1基</p> <p>奈良時代・・掘立柱建物跡2棟、柵1条、溝5条、土坑2基 小穴20基</p>
14	1990	住吉宮町6丁目	<p>弥生時代後期～中世の遺物包含層</p> <p>古墳時代後期の土坑</p> <p>奈良時代の柱跡（建物跡）</p>
15	1993	住吉宮町7丁目	<p>中世の遺物包含層・土石流跡</p>
16	1993	住吉宮町6丁目	<p>古墳時代後期の自然流路</p> <p>平安時代の掘立柱建物跡</p> <p>中世末～近世初の採石跡</p>

第 1 編 住吉宮町遺跡第 17 次調査

第1編 住吉宮町遺跡第17次調査

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

17次調査地点は、神戸市東灘区住吉宮町7丁目4番13号の地内である。国道2号線とJR神戸線の間にはさまれ、東に市立住吉幼稚園、北・西には住宅、南に水道工事事業が存在している。調査地の周囲の住宅の多くが震災で倒壊したため、取り壊され現況では更地になっていた。当地においては家電製品販売店の社員寮が建てられていたが、震災でやはり大きな被害を受け、取り壊されるに至った。その後、住宅供給の早急な必要性の観点から、民間デベロッパーが当地を買い取り中層の共同住宅を建設することになった。神戸市教育委員会では、当該地が周知の住吉宮町遺跡の中にあたることと建設計画によれば、現地表面より深さ3.5mまで掘削が及ぶことから、試掘確認調査を行った。その結果、遺構及び遺物が確認され全面調査を実施することになった。

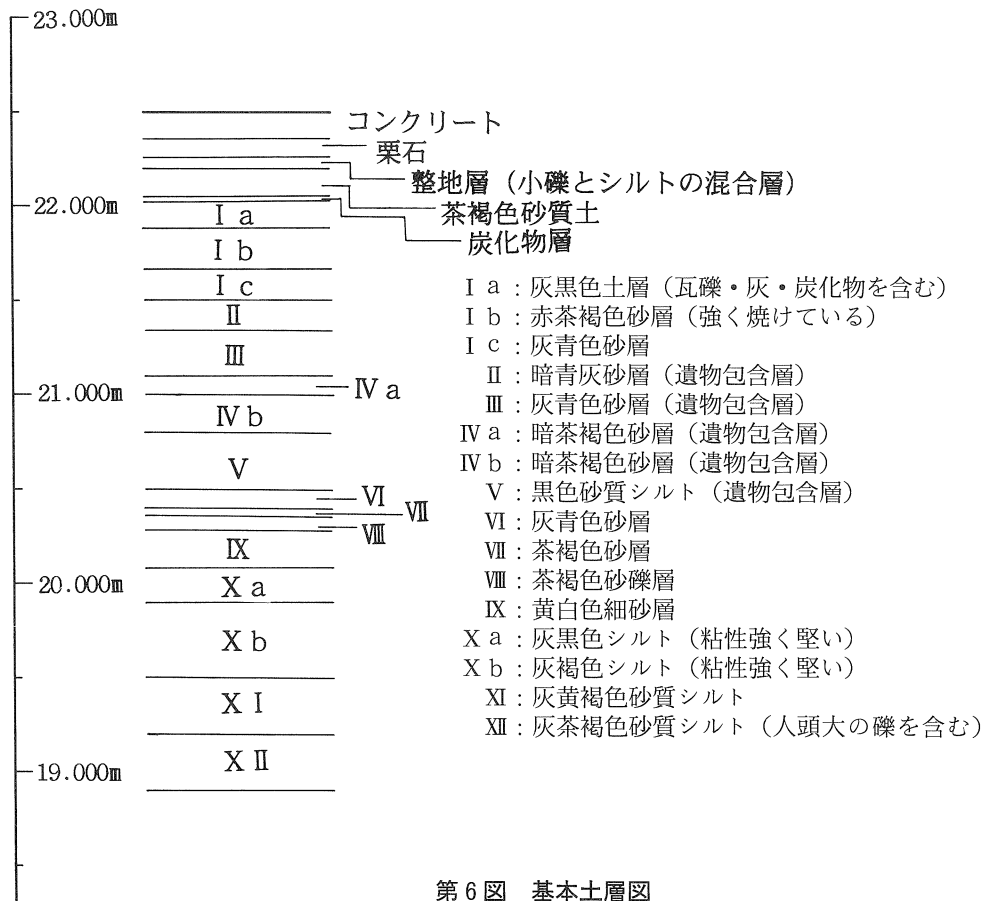
調査は、神戸市教育委員会から兵庫県教育委員会に対し支援要請が出され、兵庫県教育委員会から2名の調査員を充て、9月7日より実施することになった。表土掘削は、社員寮の鉄筋コンクリート基礎をクラッシャーを使用して破壊・撤去することから開始した。近隣の住宅に騒音の理解を求めるとともに、できるだけ騒音被害が及ばないように慎重な工事が進められた。遺構面は度重なる洪水の影響で中世から古墳時代にかけての10面に分けて調査が進められたが、便宜上6面に集束させた。10月24日には7世紀の竪穴住居跡・掘立柱建物跡の面で第1回目の航空写真の撮影、11月10日には古墳面の航空写真の撮影をおこなった。11月15日には奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長の工楽善通氏が来跡され、奈良時代の遺構についてご教示を頂いた。11月24日にすべての現地調査を終了し、引き渡しをおこなった。調査期間中遺物の水洗いとネーミング・復元などの整理作業は順次現地で行い、できなかった作業については後日行った。

第2節 調査の方法

調査は、試掘調査の結果を元に、鉄筋コンクリート基礎の撤去、表土掘削を重機によって行った。攪乱部分の除去の後に遺構検出作業を開始した。人力掘削で出る廃土は敷地内に置くスペースがないため、一時調査区内の攪乱部分に仮置きし、一定量が溜った段階でベルトコンベアーを使用して、調査区外の道路に横付けしたトラックで運び出した。

調査区内の測点の設置については、国土座標を用いている。調査区内では切りの良い数値に測量杭を設定し(X=-142135.0、Y=84960.0)、そこから10m方眼に杭を打設し、実測の便を図った。

遺構の実測については基本的には1/20で実測を行い、必要と考えられる箇所については1/10で実測を行った。遺構の写真は35mm一眼レフカメラを使用し、白黒写真とカラー写真を同コマ撮影している。なおカラーネガ写真については適宜撮影を行っている。



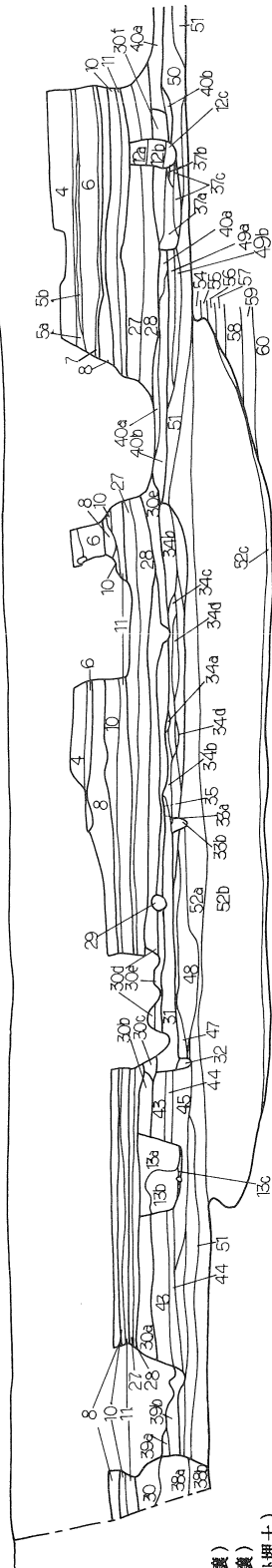
第 3 節 基本層位(第 6 図・第 7 図・図版 7)

まず最初に基本土層 (第 6 図) について示し、後段に調査区の南壁土層断面 (第 7 図) について記述する。南壁の土層断面図を利用したことについては、他の壁面が攪乱によって大部分が失われていることによっている。調査地は、近代から現代にかけての建物の基礎のためかなりの割合で、遺構の破壊があるものと予想していたが、震災前の建物の基礎はベタ基礎ではなかったために部分的な破壊にとどまっていた。またこの場所には、太平洋戦争中の昭和20年の神戸空襲までは住吉村役場が建っており、部分的にその当時の基礎を確認している。

本調査地における基本層序は第 6 図に示した通りである。全般に六甲山地から流出した砂の堆積が主体を占めている。そのため堆積が一樣ではないことと、建物の基礎で壊されたことで連続した土層を確認することが困難な状況であったため遺構の検出によって便宜的に分層を行った場合もある。土層の状況については、第 I a 層の灰黒色土は、焼土や瓦、炭化物・茶碗片・ガラス瓶が多量に含まれている。この土層は、神戸空襲で焼け出された瓦礫を整地した層である。第 I b 層は強く焼けた形跡が認められる。空襲で土が焼けたものである。第 I c 層の灰青色砂層は遺物を含まず、土壌化も進んでいない。下層から近代の磁器が出土していることと、上層の空襲の痕跡のある間にあり、昭和13年の阪神大水害時

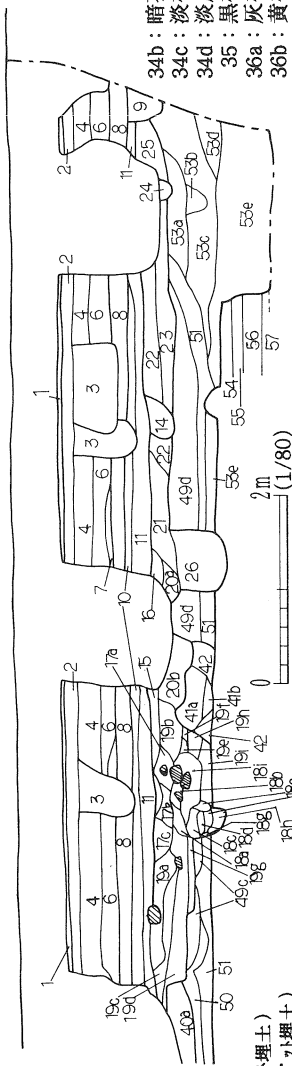
E—HL=23.000m

- 1 : 淡茶赤褐色砂質土
- 2 : 住吉村役場整地層
- 3 : 淡褐色砂質土
- 4 : 淡茶褐色土
- 5a : 茶灰色砂質土
- 5b : 黄褐色砂質土
- 6 : 灰色砂質土
- 7 : 淡茶黄褐色砂質土
- 8 : 灰色砂質土
- 9 : 茶褐色土 (ピット埋土)
- 10 : 淡灰色砂質土 (水田土壌)
- 11 : 淡灰色砂質土 (水田土壌)
- 12a : 淡茶褐色砂質土 (ピット埋土)
- 12b : 淡茶褐色砂質土 (ピット埋土)
- 12c : 暗茶褐色砂質土 (ピット埋土)



- 42 : 淡灰黄褐色砂質土
- 43 : 灰褐色砂質土
- 44 : 灰褐色砂質土
- 45 : 淡黄褐色砂質土
- 46 : 淡灰褐色砂質土
- 47 : 灰色砂質土
- 48 : 淡灰黄褐色砂質土
- 49a : 淡灰黄褐色砂質土
- 49b : 淡灰黄褐色粗砂質土
- 49c : 灰黄褐色砂質土
- 49d : 淡灰褐色砂質土
- 50 : 淡灰明褐色砂質土
- 51 : 淡灰褐色砂質土 (5号填周溝)
- 52a : 淡灰褐色砂質土
- 52b : 明黄色砂質土
- 52c : 黑色土
- 53a : 淡灰赤褐色砂質土
- 53b : 黄褐色砂質土
- 53c : 淡黄褐色砂質土
- 53d : 暗灰黄色粗砂土
- 53e : 暗灰黄色粗砂土 (7号填周溝)
- 54 : 明黄色砂質土
- 55 : 灰黑色土
- 56 : 暗褐色土
- 57 : 暗褐色粗砂土
- 58 : 暗黄灰白色粗砂土
- 59 : 暗褐色土
- 60 : 暗褐色土

W



- 20a : 暗褐色砂質土
- 20b : 淡灰褐色砂質土
- 21 : 淡茶褐色砂質土
- 22 : 暗茶褐色砂質土
- 23 : 暗茶褐色砂質土
- 24 : 暗茶褐色砂質土
- 25 : 暗茶褐色砂質土
- 26 : 暗茶褐色砂質土
- 27 : 暗茶褐色砂質土
- 28 : 暗茶褐色砂質土
- 29 : 暗茶褐色砂質土
- 30a : 暗褐色砂質土
- 30b : 淡灰褐色砂質土
- 30c : 淡茶褐色砂質土
- 30d : 淡茶褐色砂質土
- 30e : 淡茶褐色砂質土
- 30f : 暗茶褐色砂質土
- 31 : 暗茶褐色砂質土
- 32 : 暗茶褐色砂質土
- 33a : 淡灰褐色砂質土
- 33b : 淡黄褐色砂質土
- 34a : 淡灰褐色砂質土

- 13a : 暗褐色砂質土 (ピット埋土)
- 13b : 淡灰褐色砂質土 (ピット埋土)
- 13c : 淡灰褐色砂質土 (ピット埋土)
- 14 : 淡黄褐色砂質土 (ピット埋土)
- 15 : 淡灰赤褐色砂質土
- 16 : 淡灰黄褐色砂質土
- 17a : 淡灰黄褐色砂質土
- 17b : 淡灰褐色砂質土
- 17c : 淡灰褐色砂質土
- 18a : 灰褐色砂質土
- 18b : 赤褐色砂質土
- 18c : 赤褐色砂質土
- 18d : 淡灰褐色砂質土
- 18e : 淡灰褐色砂質土
- 18f : 淡灰褐色砂質土
- 19a : 黄褐色砂質土
- 19b : 淡灰褐色砂質土
- 19c : 淡灰褐色砂質土
- 19d : 赤褐色砂質土
- 19e : 淡灰褐色砂質土
- 19f : 淡灰褐色砂質土
- 19g : 茶褐色砂質土
- 19h : 淡灰褐色砂質土
- 19i : 淡灰褐色砂質土

第7図 調査区南壁東西土層断面

に堆積した砂の層と考えられる。Ⅱ層からⅢ層はやや土壌化が進んでおり中世から近世の耕作土壌と考えられる。Ⅱ層中からは第1遺構面が検出されている。第Ⅲ層の上面からは第2遺構面、下層からは第3遺構面が検出されている。第Ⅳa層の暗茶褐色砂層は酸化した鉄分が砂に付着した様子が窺える。第4遺構面上面は調査区の西側部分でのみ確認された。第Ⅳb層は第Ⅳa層の暗茶褐色砂層と同質のものであるが、遺構面が明確に分けることができるため、第4遺構面下面としている。第Ⅴ層は、上層の砂層とは異質な黒色の砂質シルトで粘性が見られる。この上面から弥生から古墳時代初頭にかけての土器が出土している。第Ⅴ層上面は第5遺構面、古墳の掘り込み面である。第Ⅵ層は湧水層、以下ⅩⅡ層まで掘り下げ、建築計画の高さまで遺構と遺物の存在について、部分的に確認したが、まったく確認できなかった。

第7図では調査区南壁の東西土層断面を示した。遺構が複雑に切りあっていてかなり判断がしにくい。中世のピットについては11層上面、30a層上面の2面で確認できる。奈良から平安時代の遺構面は11層下面で確認された4号溝跡、1号集石である。古墳時代の竪穴住居跡は43層上面である。31と32層は竪穴住居跡の埋土、33b層は別な竪穴住居跡の壁溝埋土と考えられる。掘立柱建物跡の掘り形は21層下面で確認された2号竪穴住居跡のP 202が壁面で確認できた。古墳は54層上面で確認されている。52b層は5号墳周溝、53e層は7号墳周溝がかかっている。54層は灰黒色砂質土で粘質がある土質である。調査区全面で確認できる。

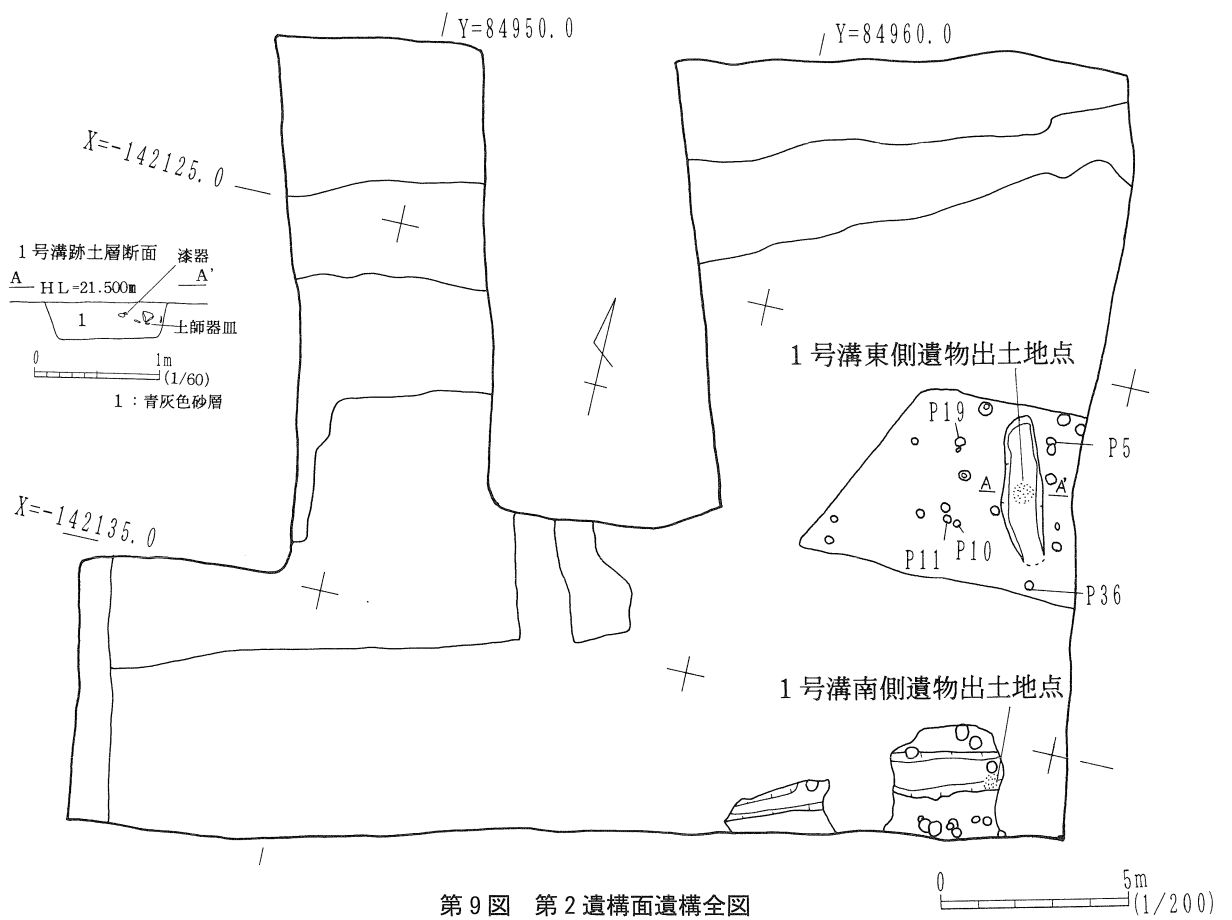
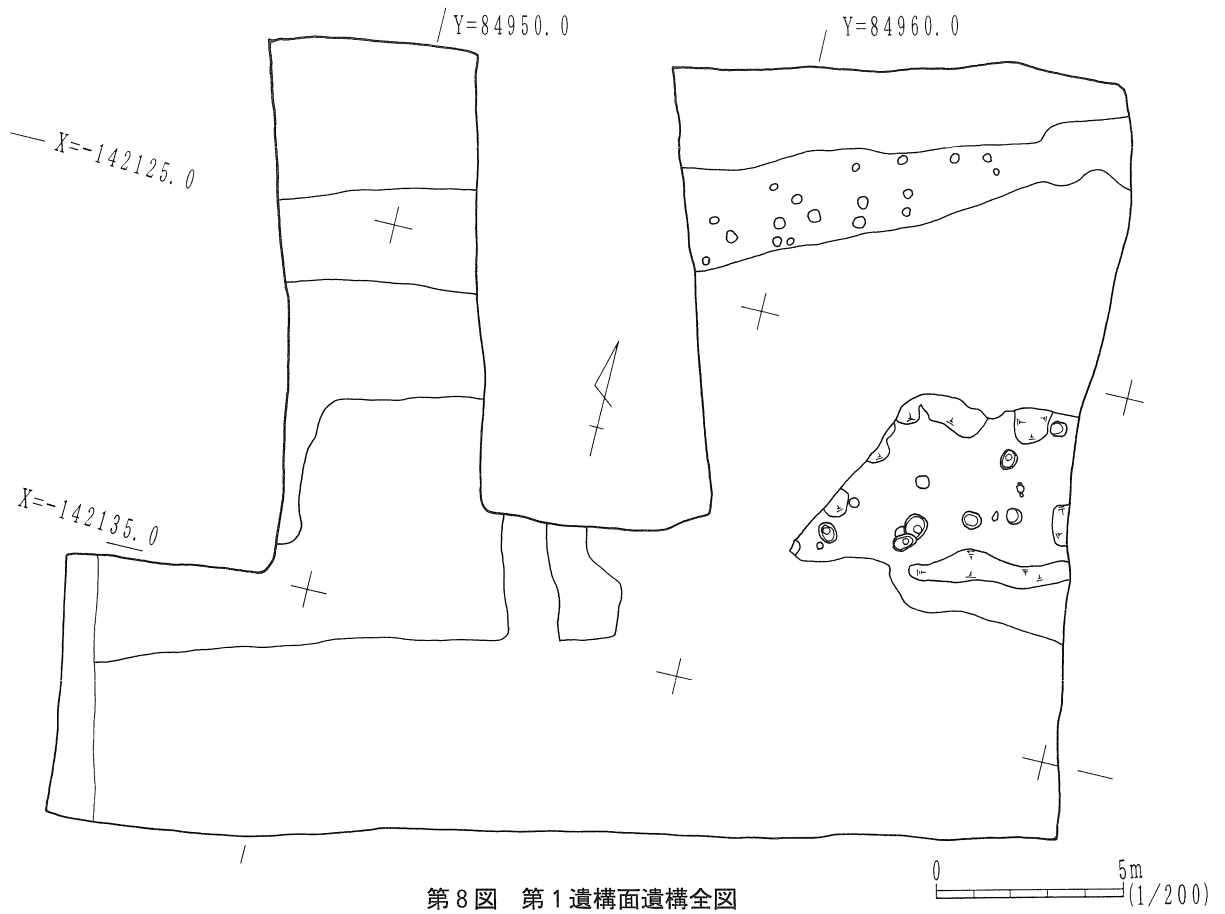
第2章 第1・2・3遺構面の遺構と遺物

第1～3遺構面は、洪水によって堆積した比較的粗い砂の層が、酸化のため茶褐色を呈している第Ⅱ層中で検出された。土層断面だけでは分層することはできなかったが、遺構検出作業を継続することにより複数面の遺構面が存在することが明らかになった。調査区の大半を攪乱によって失われているが、調査が可能だった部分に限って言えば、出土した遺物から12世紀～15世紀に渡って継続的に集落が営まれた状況が考えられる。

第1節 第1遺構面の遺構と遺物

遺構 (第8図・図版3) 第1遺構面は、前述したように、調査区の大半を建物の基礎による攪乱のために失われている。残っている部分は全体の1/4程度である。調査区の西半分は、褐色の砂層で覆われているだけで、遺構は確認できなかった。調査区の東半分においては同一面で明確な柱穴が30基程度確認できたが、攪乱で失われている部分が多く、建物跡として考えられるのは中央東側で検出した3×2間以上の建物跡が存在する事がわかる程度である。この建物跡の柱穴のなかには根固め石を持つものも確認されている。

遺物 遺物の出土は見られなかった。



第2節 第2遺構面の遺構と遺物

遺構（第9図・図版3・4・5） 第1遺構面と同様に調査区の大半を攪乱によって失われているため、第1遺構面とほぼ同じ部分で遺構を検出した。第1遺構面と同様に砂層中の検出のため上面からの掘り込みを見逃している、この遺構面で捉えられたものもあると思われる。検出できた遺構は柱穴と溝跡である。

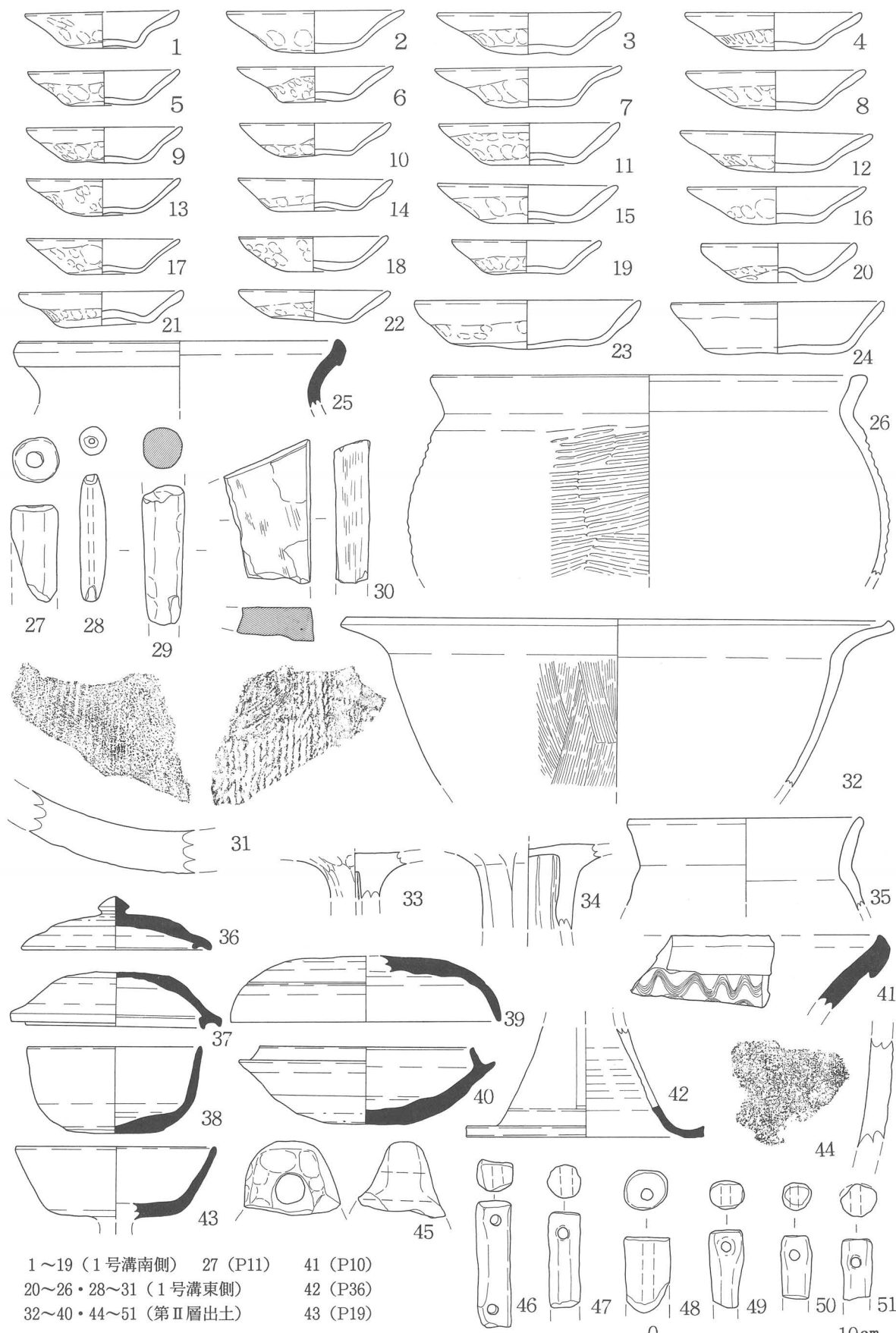
柱穴は36基確認された。攪乱が多く、建物跡として認識するには至らなかった。一部の柱穴の中から遺物の出土を見たものもある。

溝跡は2条検出された。調査区南端で東西に走る1条と、調査区東端を南北に走る1条である。L字形に接続すると考えられるが攪乱のため判断できない。ここではL字形に接続する区画溝と捉えておき、それぞれ1号溝東側部分、1号溝南側部分としておきたい。残存している溝の幅は80cm～130cmである。長さは、南側部分の残存長約7m、東側部分は約4mである。

遺物（第10図・図版36～39） 柱穴中から出土した遺物は、第9図のP5・10・11・19・36からの出土である。そのうち図化できたものは第10図の27・41～43である。27は円筒形の土錘で中通しにするため中空になっている。41は須恵器甕の口縁部分である。42は長脚高坏で、透かし窓を境に割れた状況で出土している。43は長脚高坏の坏部である。基部に脚部との接合痕が認められる。41～43は遺構の時期と合わないため混入と思われる。

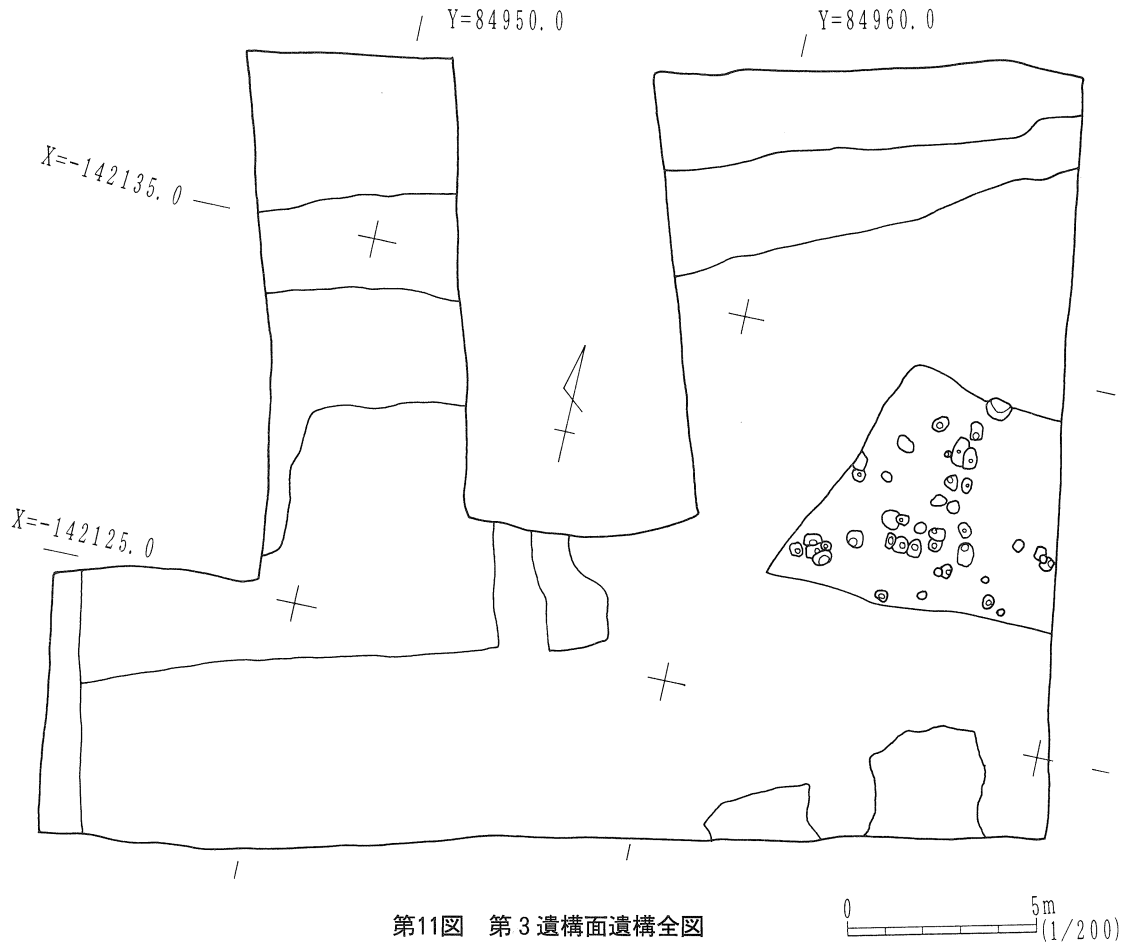
溝跡中からの出土遺物は1～19の土師器皿である。へそ皿と呼ばれる底面が凹んだ形状をもつものである。1号溝南側部分の東端から重なって出土している。口径は9cm前後、底径は4～5cmを測る。器高は2～2.5cmを測る。体部内面から口縁部を経て外面上半部はヨコナデ、外面下半にはユビオサエで調整を施している。1号溝跡東側からは20～26・28～31が出土している。20～23はへそ皿である。このうち23は口径12cm、底径8cm、器高は28mmを測る。24は土師器皿である。口径11.5cm、底径7cm、器高は28mmを測る。ほぼ中央部分から重なるようにして出土している。25は須恵器甕の口縁部分、26は外面に粗いタタキを施した土師器甕である。外面には煤が付着しており煮炊きに使用したものと考えられる。28は先端の狭まる土錘、29は三足土鍋の脚部分、30は粘板岩で砥石と考えられる。31は布目瓦である。この他に漆器碗の出土が見られたが、木質部がすでに失われており、黒漆をベースに緋色の草花文を施した痕跡が見られるのみであった。この漆器碗はへそ皿と重なるように出土していた。

第Ⅱ層中より出土した遺物は32～40・44～51がある。層位的には中世の層にあたるので流れ込みと見られる。32は土師器の鉢、復元口径は29cmを測る。体部はハケで調整している。33・34は土師器高坏の脚部から坏底部である。外面は丁寧にヘラケズリされており器壁は薄く、胎土は精良で赤茶色を呈する。34は10のカット面が見られる。35は土師器の小型壺の口縁部。36は須恵器蓋で口径10cm、器高3cmを測る。37は須恵器坏身で口径10cm、器高3cmを測る。38は須恵器碗で口径9.2cm、底径5cm、器高4.7cmを測る。焼成は悪く、灰白色を呈する。39は須恵器蓋、40は須恵器坏である。口径11cm、器高4cmを測る。44は製塩土器で内面に布目圧痕が見られる。45は飯蛸壺の上部。46～51は土錘で、48は中通しのもの、他は両端に穴を穿ったものである。



第10図 第II層・第2遺構面出土遺物

0 10cm (1/3)



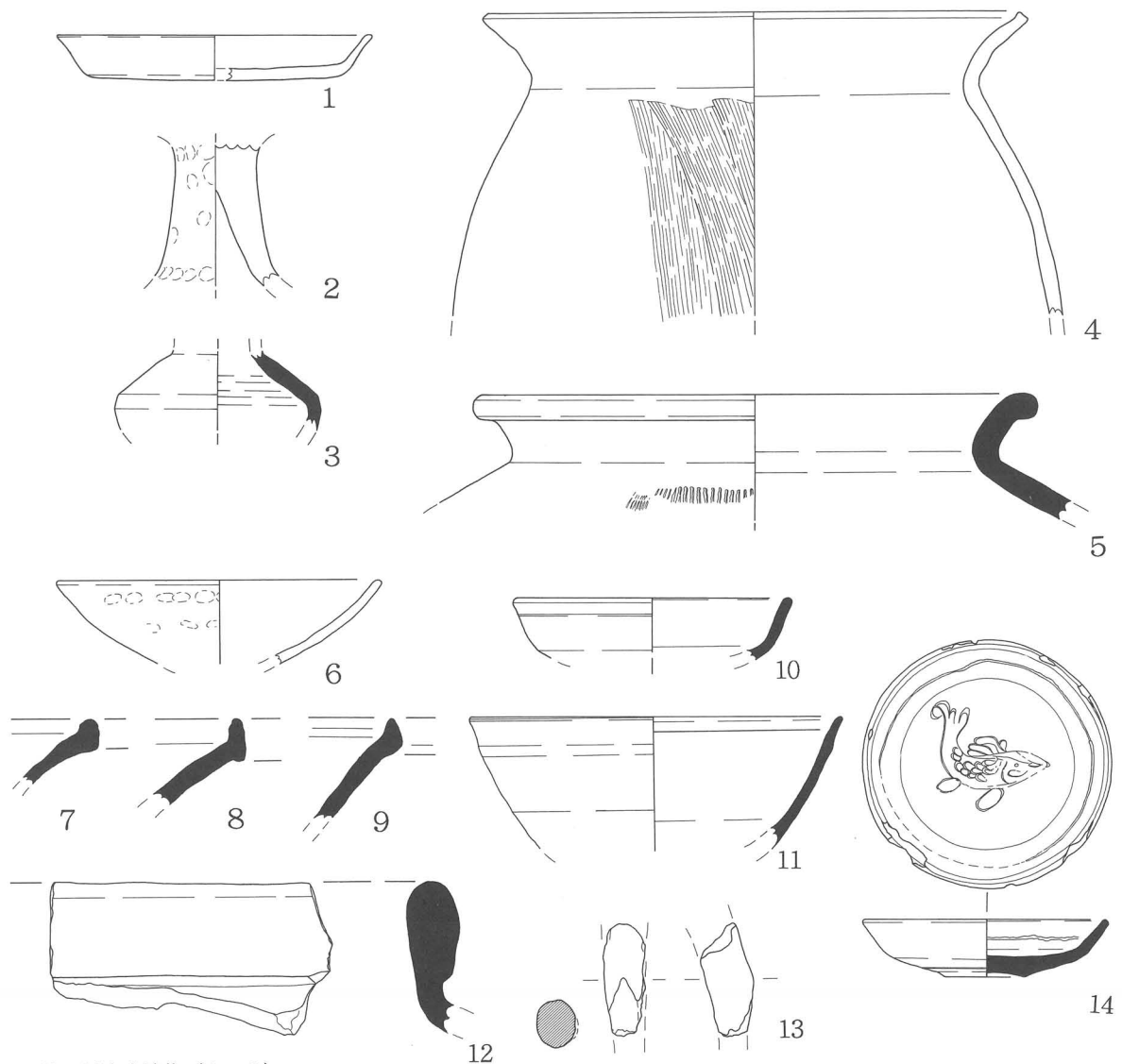
第11図 第3遺構面遺構全図

第3節 第3遺構面の遺構と遺物

遺構 (第11図、図版4) 第1・2遺構面と同様に調査区の大半を攪乱によって失われているため、ほぼ同じ部分で遺構を検出した。第1・2遺構面と同様に砂層中の検出のため上面からの掘り込を見逃していて、この遺構面で捉えられたものもあると思われる。検出できた遺構は柱穴である。

柱穴は41基検出された。部分的な検出のため、建物跡になることは認識できなかったが、一定の法則性があることは確認できた。北から南に並ぶグループと南西から北東に向かうグループである。

遺物 (第12図、図版39・47) 第3層と第3遺構面の検出面で出土した遺物を取り上げる。1は土師器皿である。底部はほぼ平らで外湾気味に立ち上がる。赤橙色を呈し、暗文は見られない。2は土師器高坏の脚部。3は須恵器壺の体部。4は土師器甕で外面体部をハケで調整している。5は須恵器甕である。口縁から体部肩にかけての部分で、口縁は丸く収まる。6は土師器高坏の坏部。7～9は東播系須恵器の捏鉢。10は青磁の小皿。11は青磁碗。12は備前焼の甕の口縁部。13は三足鍋の脚部であろう。14は青磁の小皿で魚文の陰刻が見られる。口径10.2cm、底径3.3cm、器高2.3cmを測る。同安窯系のものと考えられる。



第Ⅲ層出土遺物（1～5）
第3遺構面出土遺物（18～24）

第12図 第Ⅲ層・第3遺構面出土遺物

0 10cm (1/3)

第3章 第4遺構面と遺物

第4遺構面は、洪水によって堆積した黄橙色粗砂層を取り除いて検出される、安定した暗茶褐色砂層（第Ⅳ層）の上面である。第4遺構面は、コンクリート基礎の攪乱を受けながらも、調査区のほぼ全域に見ることができ、遺構は竪穴住居跡16基、掘立柱建物跡7棟、集石遺構1基、溝1条が検出された。多くの遺構が切り合っており、時期差があるものと思われるが、中でも集石遺構と溝は、掘立柱建物跡より確実に新しく、出土遺物もその他の遺構と明らかに異なるので、これらのみを第4遺構面上面の遺構とする。また、集石遺構と溝の下面から検出された竪穴住居跡と掘立柱建物跡の時期は、出土遺物か

ら見ると、古墳時代後期から飛鳥時代（6世紀後半～7世紀前半）で、1号集石遺構と4号溝跡は8世紀前半代の時期で奈良時代にあてはまる。時期差が大きく、遺構の性格も異なるので、第4遺構面は上面と下面に分けて記述する。

第1節 奈良時代の遺構と遺物

1. 概要

第4遺構面上面の遺構で確実なものは、1号集石遺構と4号溝のみである。前述したように、下面としている掘立柱建物跡の中には上面の時期に伴う可能性のあるものもあるが、確実なものとして確認できないので、ここでは割愛する。

第4遺構面上面は、コンクリート基礎の攪乱を受けていない場所にしか残っていない。そのため、集石遺構や溝が部分的にしか検出されず、当初は一連の大規模な遺構と認識することができなかった。また、集石遺構と溝の関係も把握が不十分であったので、調査終了直前に、調査区南側の壁の一部を拡張して確認した。

2. 集石遺構

1号集石遺構（第15図・図版6・7）

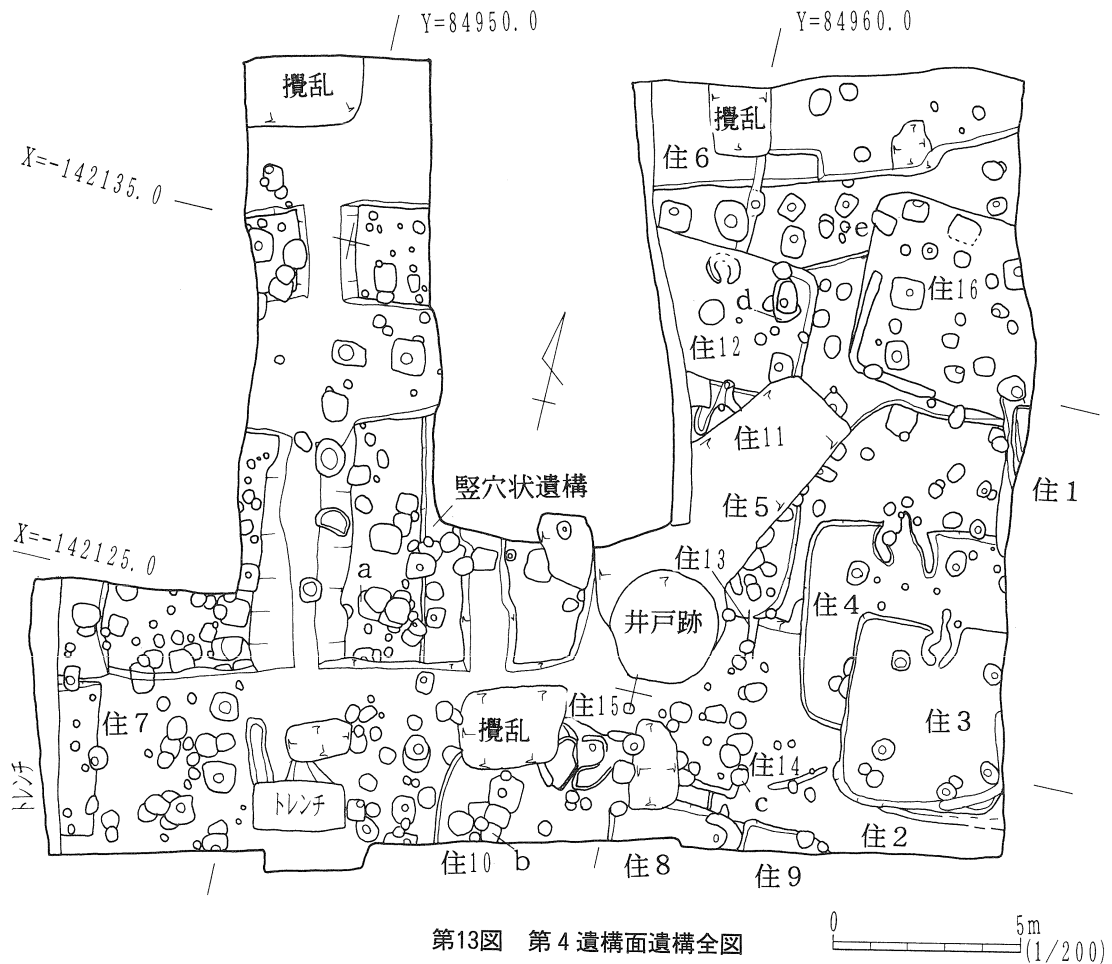
調査区中央からやや西側に位置する。コンクリート基礎による攪乱のため多くの部分が失われているが、本来は南北に直線的に延びており、調査区外にも続いているものと推定される。ここでは説明の便宜上、検出された集石遺構の北側を北区、南側を南区と呼ぶことにする。

非常に多くの人頭大の川原石が散乱している中で、面を揃えて列状に並ぶ部分がわずかに存在しており（D-D' 南半）、本来は数条の石列が平行に並ぶ帯状の石敷きであったと考えられる。

今次の調査で石列は4条確認されている。南区の最も東に位置する石列から東方には石がなく、集石遺構の東端はこの石列であろう。（B-B' 東より）

西側は北区と南区で状況が異なっている。北区では4号溝の西岸にも人為的に積まれたものと思われる集石が見られるが、南区では石が散らばってはいるものの、その量は少なく明確な列が残っていない。遺存状態は南区の方が悪く、西側の大部分が攪乱を受けているが、遺構面が存在しているところでも状況は同じで、石列が存在していたとは考えにくい。このことから、北区では西側に集石が続き、南区では遺構は存在せず、散乱する石は東側の石列の石が4号溝掘削時に壊され、崩落したものの一部と判断した。したがって、南区の石列の西端は4号溝に切られており、確認できない。しかし、4号溝に崩落している石の数からみて、4号溝は数条の石列を壊しているとするのは可能であろう。

石列の残存する部分では、石と石との隙間に小礫を入れていることと、上面の高さがほぼ等しいことから、単に石を集めただけでなく面を意識しているものと思われる。この集石遺構はほぼ南北方向に走っており、推定山陽道の国道2号線と直交している。また、本調査区は兎原郡衙の推定地である郡家遺跡に隣接しており、郡衙周辺の公的施設が存在している可能性は高い。このことから考えて、本遺構は石敷道路と考えたい。本遺構の北区に見られる4号溝西側の石敷は、道路のコーナー部分か、支道あるいは門への入り口などの可能性が考えられよう。



遺物は、石敷の残っている部分にはほとんどなく、列の乱れた部分から大量に出土した。大きな破片が多く、完形の須恵器の碗が2枚重なって出土したものもあり、出土時期に差がほとんどないことから、石敷道路と、後述する柵の廃絶時に一括廃棄されたものと考えられる。

3. 溝跡

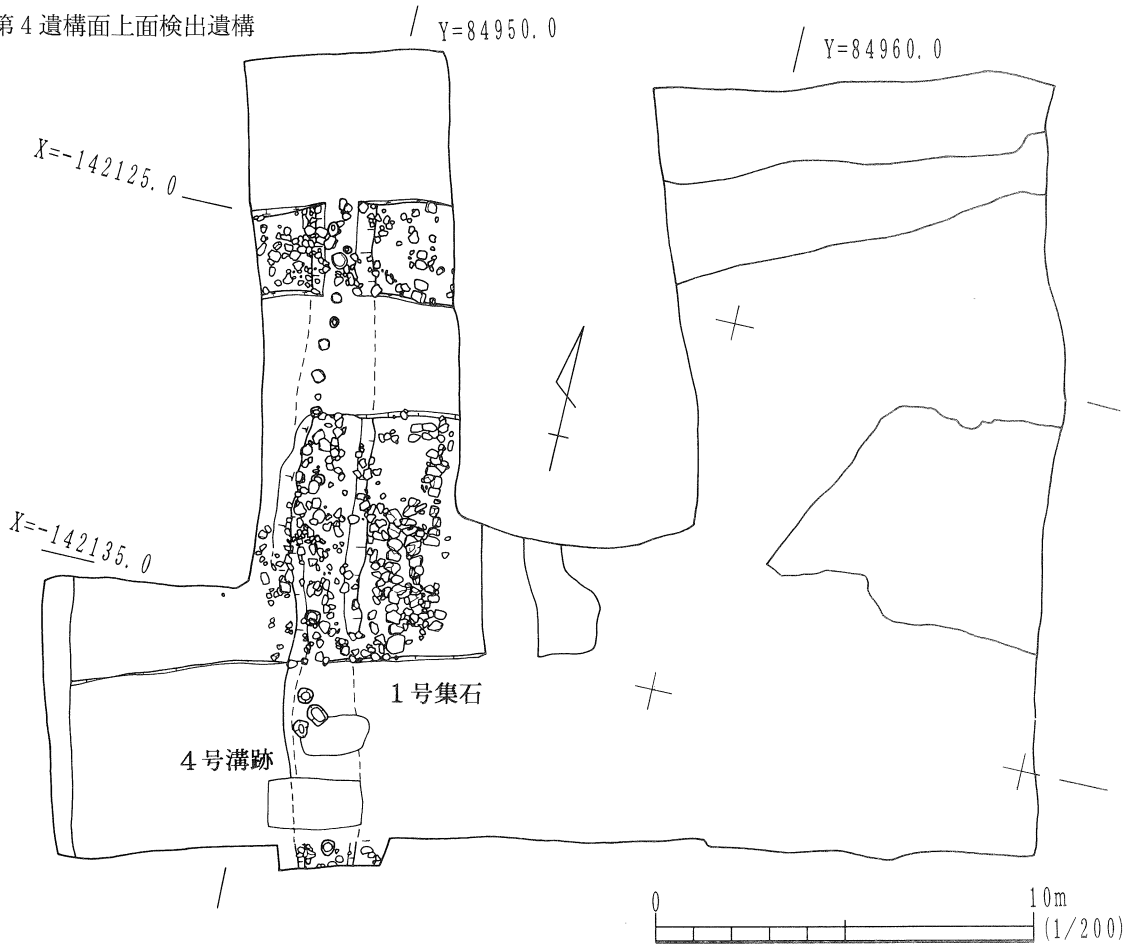
4号溝跡 (第15図・図版7～9)

本遺構は、1号集石遺構の西側を併走しており、やはりコンクリート基礎による攪乱により多くの部分が失われているが、1号集石遺構と同様に南北に直線的に延び、調査区外にも続いているものと推定される。

底面のやや西壁寄りには、ほぼ等間隔に柱穴列が並んでおり、攪乱の下にもわずかながら柱穴列が遺存していた。柱穴列はいびつではあるが、溝に沿ってほぼ直線的に並んでおり、柵跡と考えられる。柱穴列の柱の間隔は75～85cmである。

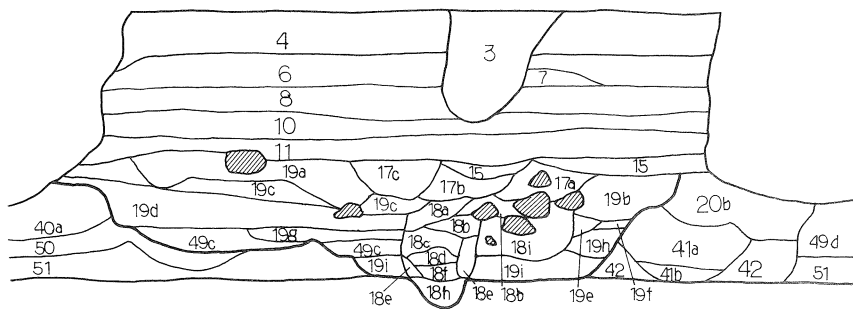
柱穴は4号溝の底面から検出されており、4号溝に切られているが、柱穴列が4号溝に沿っていることから、まったく時期の異なるものとは考えられない。4号溝内の土器の出土状況や1号集石遺構の石

第4遺構面上面検出遺構



第4溝跡土層断面

C HL=22.800m C'



- | | | |
|--------------------|----------------|----------------|
| 3 : 淡褐灰色砂質土 | 18c : 赤褐色砂質土 | 19g : 茶灰色砂質土 |
| 4 : 淡茶褐色土 | 18d : 淡灰赤褐色砂質土 | 19h : 淡灰赤褐色砂質土 |
| 6 : 灰色砂質土 | 18e : 淡灰褐色砂質土 | 19i : 淡褐色粘性砂質土 |
| 7 : 灰茶黄褐色砂質土 | 18f : 淡黄褐色砂質土 | 20b : 茶褐色砂質土 |
| 8 : 灰色砂質土 | 18g : 黄褐茶色砂質土 | 40a : 灰褐色砂質土 |
| 10 : 淡灰色砂質土 (水田土壤) | 18h : 淡灰茶褐色砂質土 | 41a : 淡褐灰色砂礫層 |
| 11 : 淡灰色砂質土 (水田土壤) | 18i : 灰褐色砂質土 | 41b : 淡灰褐色砂質土 |
| 15 : 淡灰赤褐色砂質土 | 19a : 褐灰色砂質土 | 42 : 淡灰黄褐色砂質土 |
| 17a : 淡灰黄褐色砂質土 | 19b : 淡灰褐色砂質土 | 49d : 灰黄色砂質土 |
| 17b : 淡褐灰色砂質土 | 19c : 赤褐灰色砂質土 | 50 : 淡灰褐色砂質土 |
| 17c : 淡褐灰色砂質土 | 19d : 淡茶灰色砂質土 | 51 : 褐灰明褐色砂質土 |
| 18a : 淡赤褐色砂質土 | 19e : 淡褐灰色砂質土 | |
| 18b : 赤褐灰色粘性砂質土 | 19f : 淡褐灰色砂質土 | |

0 1m (1/40)

第14図 第4遺構面・遺構断面



第15図 第1号集石・4号溝跡

0 2m (1/80)

の崩落状況からみて、4号溝は柵を構成する柱の抜き取りのために掘られたものと考えられる。溝の断面形は東側の立ち上がりが緩やかで、西側がやや急である。このことは、柱穴列が西壁寄りに位置することと無関係ではなく、東の石敷道路側から掘り込んで倒した状況を示すものであろう。西側の溝の掘り込みは、柵を設置する際の掘り込みで、布堀であると考えたい。

遺物は多く且つ大きな破片が目立つ。石敷道路から出土するものと時期差がほとんどないことから、柵の廃絶時に一括廃棄されたものと考えられる。

4. 遺物 (第16・17・18図 図版40～43・48・49)

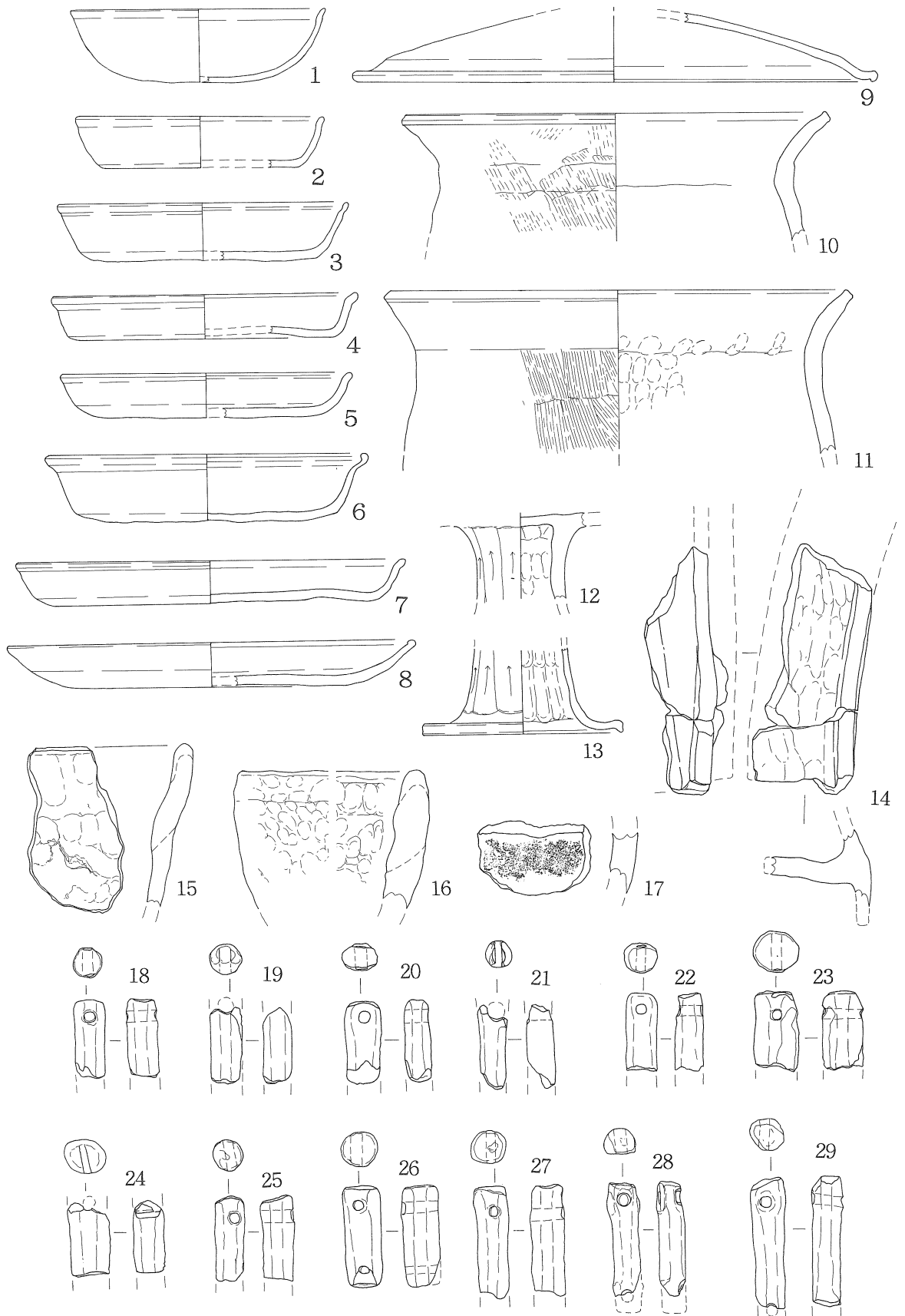
1号集石遺構と4号溝跡の出土遺物は、当初別々に取り上げたが、調査結果から廃絶時期が同じであることが確認されたので、1号集石遺構直上の遺物と4号溝の埋土中出土遺物を一括で記載する。

土師器 (第16図) 1は椀である。丸底で口縁端部は外反する。胎土は精良で赤茶色を呈する。2～6は坏で、口縁直下で外反するものと、外反した後、端部が屈曲するか、凹線が施されるかしている。器面に砂が多く付着し、また摩滅していたため、調整や暗文は観察できなかった。器壁は薄く、胎土は精良で赤茶色を呈する。口径14.5cm～16.7cm、器高2.3cm～3.5cmである。7・8は皿で、口径20.0cm～20.8cm、器高2.3cm～3.5cmである。7は端部が短く外反するもの、8は端部を折り返しているもので、やはり調整や暗文などは観察できなかった。胎土は精良で黄褐色を呈する。9は蓋で、口径26.4cm、器壁は薄く、胎土は精良で赤茶色を呈する。10・11は甕Aの口縁部で、10は「く」の字状に屈曲する口縁で口縁端は軽く跳ね上げている。外面はハケによる調整。胎土は黄白色である。12・13は高坏の脚部で、外面は丁寧へラケズリされており、12は9面、13は14面の多面体である。器壁は薄く、胎土は精良で赤茶色を呈する。14は置き竈の裾部で、前面と庇の内側に煤が付着し、底は庇の端部がやや長くなっており、この部分を地面に差し込んで固定したものと思われる。

製塩土器 15は器壁が薄く、口縁部は接合部で段を持って外反する。内面は指頭圧痕のみである。16は器壁が厚く口径が小さいもので、内面は指頭圧痕のみである。17は内面に布目圧痕が見られる。

土 錘 18～29は有孔土錘で細長いものと、太くて短いものの2種類あり、26は後者にあたり、23もそれに相当するものと思われる。

須恵器 (第17図) 1～11は杯B類蓋で、いずれも口縁部が短く屈曲する。小型で頂部が丸みを持ち、小さな宝珠つまみを持つものと、頂部が平坦気味で、擬宝珠つまみを持つものの2種類がある。前者は口径10.4cm～12.8cmで、後者は14.0cm～15.9cmである。12～16は杯B類で、高台の高さや傾きを除いた点で、個体差が大きい。12はやや小型で、胴部がやや内湾しながら立ち上がり、高台も底部外縁近くに付く。口径13.4cm、器高4.0cm、高台径7.6cmを測る。13は胴部の立ち上がりが急で直線的であり、身が深く、高台も底部外縁近くに付く。口径13.4cm、器高5.2cm、高台径9.2cmを測る。14・15はほぼ同じ規格で、口径13.6cm、器高4.1～4.4cm、高台径8.2～8.4cmである。16は器壁が薄く、立ち上がりの角度が高く、口径に比べて器高が低いもので、口径13.7cm、器高3.9cm、高台径は10.7cmを測る。17は口径が大きく、器高が低いもので、口径14.8cm、器高3.5cm、高台径は12.0cmを測る。18・19はなんらかの高台であるが、杯Bの高台径と比べて、17は小さすぎ、18は大きすぎるので壺か椀の底部と思われる。20は皿で口縁部が若干外傾する。口径16cm、底径12.6cm、器高2.6cmを測る。21は小型の杯で、底部にわずかに回転へラ切り痕が残る。器壁は厚く、口径9.3cm、器高3.7cmを測る。22は口縁部が外反する杯で、底部にわずかに回転へラ切り痕が残る。口径11.2cm、器高7.0cmを測る。23・24は壺か提瓶の口縁



第16图 1号集石·4号沟迹出土遺物

0 10cm (1/3)

部で、口縁部が丸みをもって内湾し、頸部中位に凹線が1本入る。25は壺Lの口縁部で、外反し端部を跳ね上げて面を作っており、頸部中位に沈線が2本入る。26～32は甕の口縁部である。26は湾曲しながら外反し、口縁部が肥厚して、断面形は玉縁状を呈する。27は口縁部が肥厚して、外面に面を作り、断面形は方形を呈する。口縁部はやや内湾する。28は口縁下部が肥厚して、面を形成し、頸部には2本の波状文をもつ。29は直線的に外反し口縁端部がやや肥厚するもので、頸部には沈線と波状文をもつ。30・31は直線的に外反し口縁端部がやや肥厚して、面を形成し、口縁端部が内傾して突出する頸部には沈線と波状文をもつ。35は円面硯の脚部で、方形透かしの下に突帯がつく。裾の端部はナデによって面を作っている。脚裾径は27.4cmと大型である。33は二段方形透かしが入り、透かしの間に沈線が2本入る高杯の脚である。34は低脚で方形透かしの上端が杯部に接している高杯である。36は高杯の脚の裾と思われる、端部の跳ね上げが大きい。37は外面にヘラ書きがあるもので、文字かヘラ記号かは不明であるが「H」状と見える。

須恵器・瓦（第18図） 1は壺Aで短く直立する口縁と、肩の張る球に近い体部を持ち、胴中位に把手と沈線が2本ある。復元口径は11.3cmを測る。2は小壺の胴部である。3～5は壺A蓋である。3・4は頂部がほぼ平坦で、口縁部と頂部は鋭角に屈曲している。3は口唇部が傾斜しており、4は口唇部が外に突出する。5は頂部と口縁部に丸みを持つもので、両者の境は稜を成す。大きさはほぼ同じで、口径12.0cm～13.6cmである。6・7は瓦片である。6は平瓦で、凸面は縦位の縄目タタキで、凹面は布目痕が不調整で残っている。側面は平滑でヘラケズリが施されている。厚さは1.7cmである。7は重弧文の軒平瓦である。瓦当面はヘラ書きによって重弧文が施されている。重弧文の2本の曲線のうち、上の曲線が凹面に接しており、全体に凹面に寄りがちである。顎はなく、凸面の瓦当部付近には縦位の縄目タタキが及んでいないため、やや肥圧して見える。凹面は布目痕が不調整で残っている。厚さは2.5cmを測る。

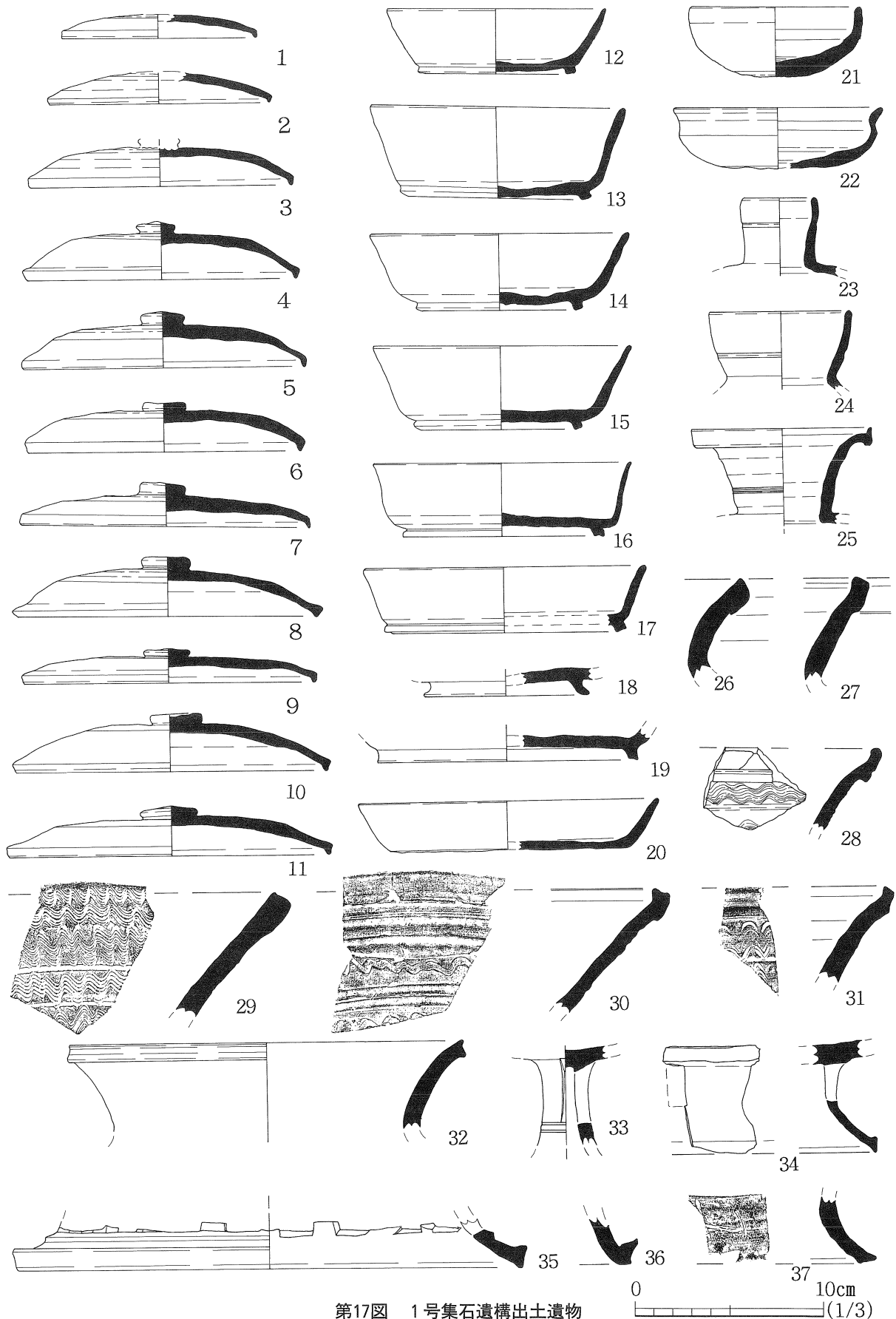
鉄器（第39図） 3・4は現状では用途不明の鉄片である。断面方形の棒状であることから、釘か鏃の茎部かと思われる。

第2節 第IV層の遺物

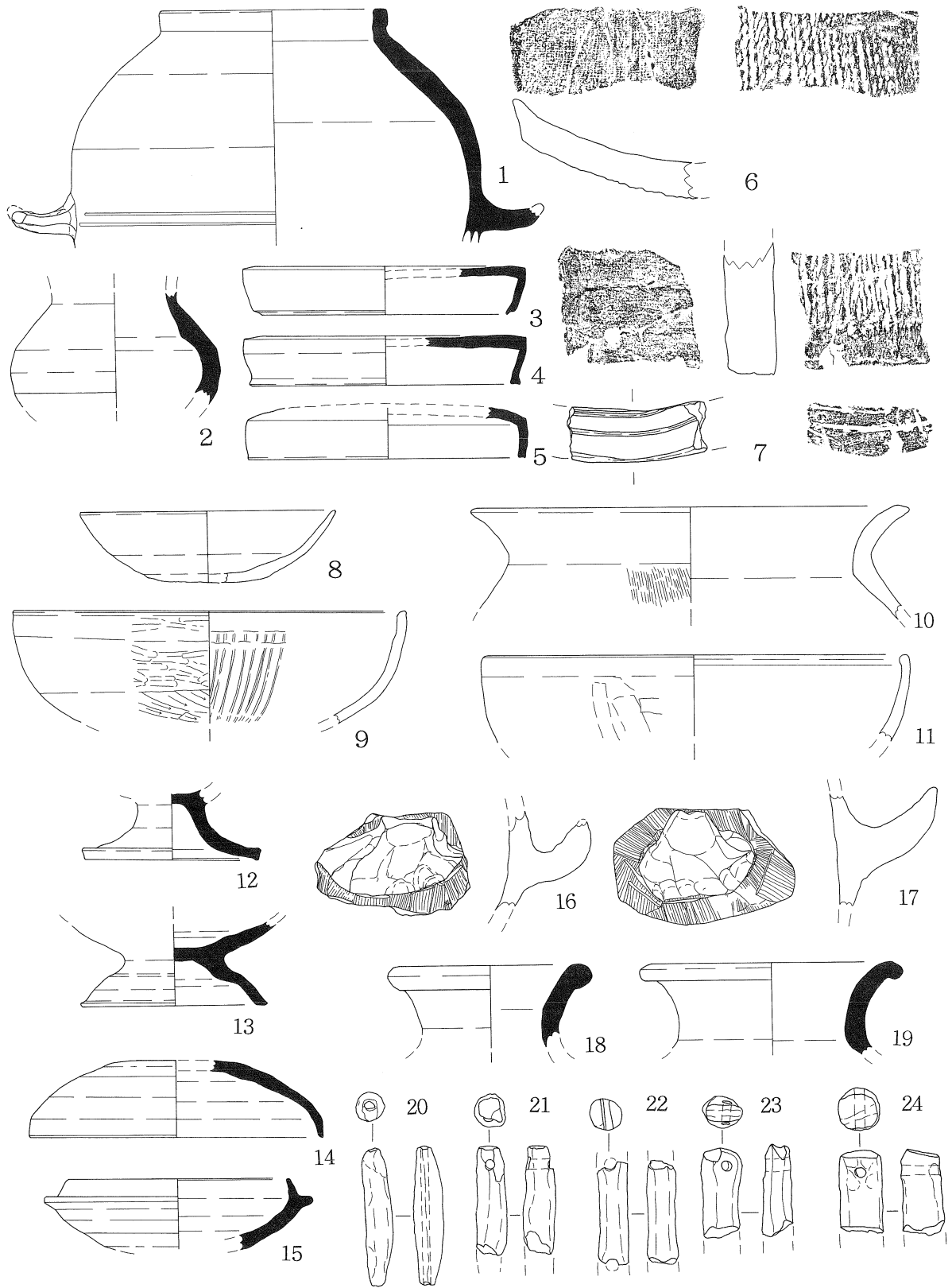
土師器（第18図・図版50） 8・9・11は杯である。8は小型のもので、調整は不明瞭。淡黄褐色を呈する。口径12.6cm、器高3.4cmを測る。9・11は外器面は丁寧なヘラミガキ、内器面には暗文が見られる。明茶褐色を呈し、胎土は精良である。10は甕の口縁部で「く」の字状に外反し、復元口径18.1cmを測る。16・17は把手で上方に反る。16は大きく上方に反り、胴部が大きく湾曲することから、丸胴の甕の把手の可能性がある。17は胴部が直線的であるので甕の把手であろう。

須恵器（第18図・図版50） 12は小型の高杯の脚部で、脚裾径9.0cmを測る。13は台付杯の脚部で、脚裾径9.2cmを測る。14は須恵器杯蓋で、口縁部が稜をもって屈曲する。ヘラケズリは頂部にわずかに残る。15は杯で、受け部が直線的に内傾する。復元口径11.0cmを測る。18・19は壺の口縁部である。18は端部が玉縁状を呈し、口径11.0cmを測る。19は大きく外反し、端部はやや下垂する。口径13.0cmを測る。

土 錘（第18図・図版50） 20は管状土錘、21～24は有孔土錘である。有孔土錘には細長いタイプの21・22と太くて短いタイプの23・24がある。

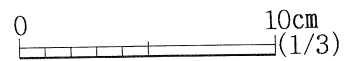


第17图 1号集石遺構出土遺物



1号集石遺構 (1~7)
IV層出土遺物 (8~24)

第18図 1号集石遺構・IV層出土遺物



鉄器(第39図) 1は鉄鏃の鏃身部で、長三角形の長頸鏃である。15は小型の鎌と思われる。湾曲は緩やかで、先端と基部を欠損しているうえに、錆膨れしているが、断面形は観察できる。刃部は幅2～4mm程である。

第3節 古墳時代後期から飛鳥時代の遺構と遺物

1. 概要

本節では第IV層下面で検出調査した掘立柱建物跡4棟と建物跡の一部と推定される柱列3棟、及び竪穴住居跡16棟について取り上げる。

2. 掘立柱建物跡(第19図・図版9・10)

1号掘立柱建物跡

遺構(第20図・図版11) 調査区中央に位置し、1号集石遺構と4号溝跡の下から検出された遺構である。建物の東北隅は調査区外に出ており、南東隅は攪乱を受けているため正確な規模は特定できないが、おそらくは3×4間の東西棟の建物と思われる。長辺6.0m、短辺で4.5mを測る。柱穴は隅丸方形で、残りの良いもので遺構検出面からの深さは40cmを測る。柱の距離は芯々間で1.28m～1.60mを測る。主軸方向はN-103°-Eである。

遺物(第22図・図版50) 各柱穴からの遺物の出土が見られたが、図化できたものは2点ある。1は須恵器蓋で復元口径14.0cm、器高3.7cmで、口縁端部がやや屈曲する。3は須恵器高杯の脚で、底径は12.0cmを測る。16は水晶製六角柱である。上下端は欠損しているものと思われる。不整形ながらも断面六角形である。P224の出土だが、整地面内に埋納されていたものが出土した可能性もある。

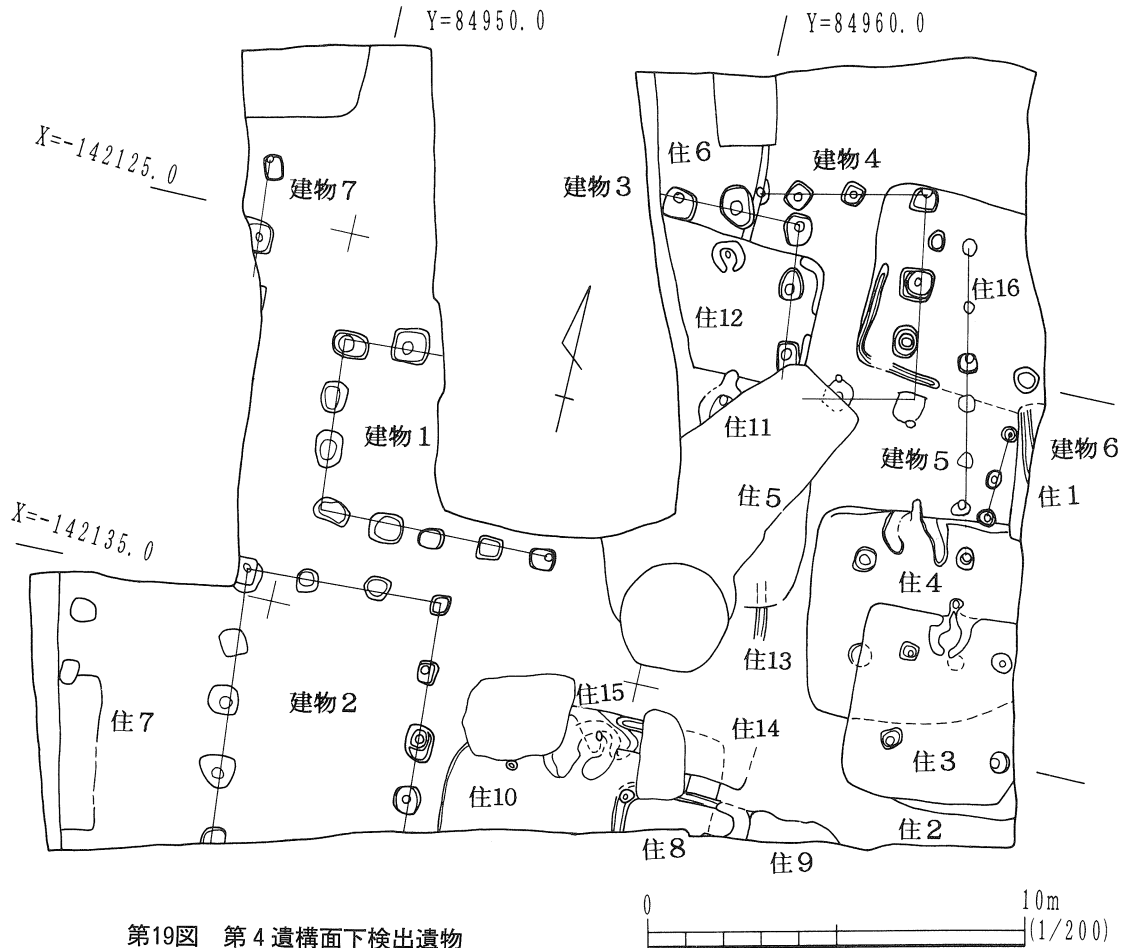
2号掘立柱建物跡

遺構(第20図・図版12) 調査区中央に位置し、1号集石遺構と4号溝跡の下から検出された遺構である。建物の南側は調査区外に延びるため正確な規模は不明である。3×4間以上の南北棟で、長辺7.3m以上、短辺5.2mを測る。柱穴は隅丸方形で、残りの良いもので遺構検出面からの深さは55cmを測る。柱の距離は芯々間で1.75m～2.0mを測る。主軸方向はN-4°-Eである。

遺物(第22図・図版50) 各柱穴からの遺物の出土が見られたが、図化できたものは4点ある。4は須恵器杯で、口径が小さく、身が深い。回転ヘラケズリが体部の半分まで及ぶ。5は広口壺の肩部である。6は須恵器高杯脚で、方形透かしが入る。7は有孔土錘である。

3号掘立柱建物跡

遺構(第21図・図版12) 調査区東側に位置する。建物の東北隅が検出されただけなので、正確な規模は特定できない。調査区内では南北方向に2間、東西方向に2間が検出されている。東柱がないことから総柱建物にはならないので、長方形プランの2×2間以上の規模であると推定される。現状では一辺5.3～5.5mを測る。柱穴は隅丸方形で、残りの良いもので遺構検出面からの深さは40cmを測る。柱の距離は芯々間で1.60～1.75mを測る。梁と桁の区別がつかないため主軸方向は不明であるが、東側の柱



第19図 第4遺構面下検出遺物

列は、国土座標の北より西に $7^{\circ} 30'$ 傾いている。

遺物（第22図・図版50） 各柱穴からの遺物の出土が見られたが、図化できたものはP256出土の1点だけである。8は須恵器の杯で、口径13cm、復元器高4cmを測る。

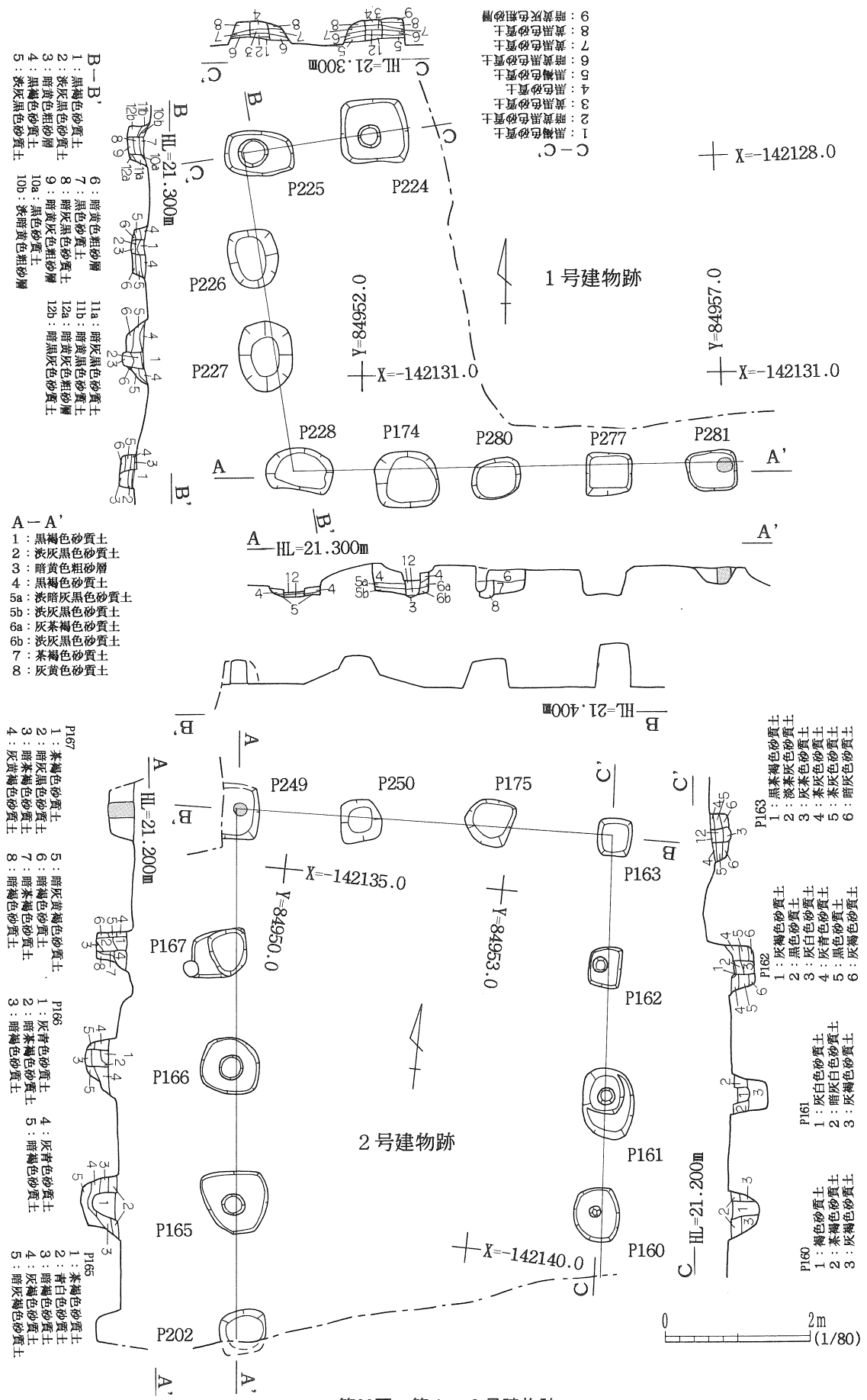
4号掘立柱建物跡

遺構（第21図・図版13） 調査区東側に位置する。建物の東北隅が検出されただけなので、正確な規模は特定できない。調査区内では南北方向に3間、東西方向に2間が検出されている。東柱がないことから総柱建物にはならないので、長方形プランの3（5.58m）×2間（3.80m）以上の規模であると推定される。柱穴は隅丸方形で、残りの良いもので遺構検出面からの深さは38cmを測る。柱の距離は芯々間で1.45～2.22mを測る。梁と桁の区別がつかないため主軸方向は不明である。

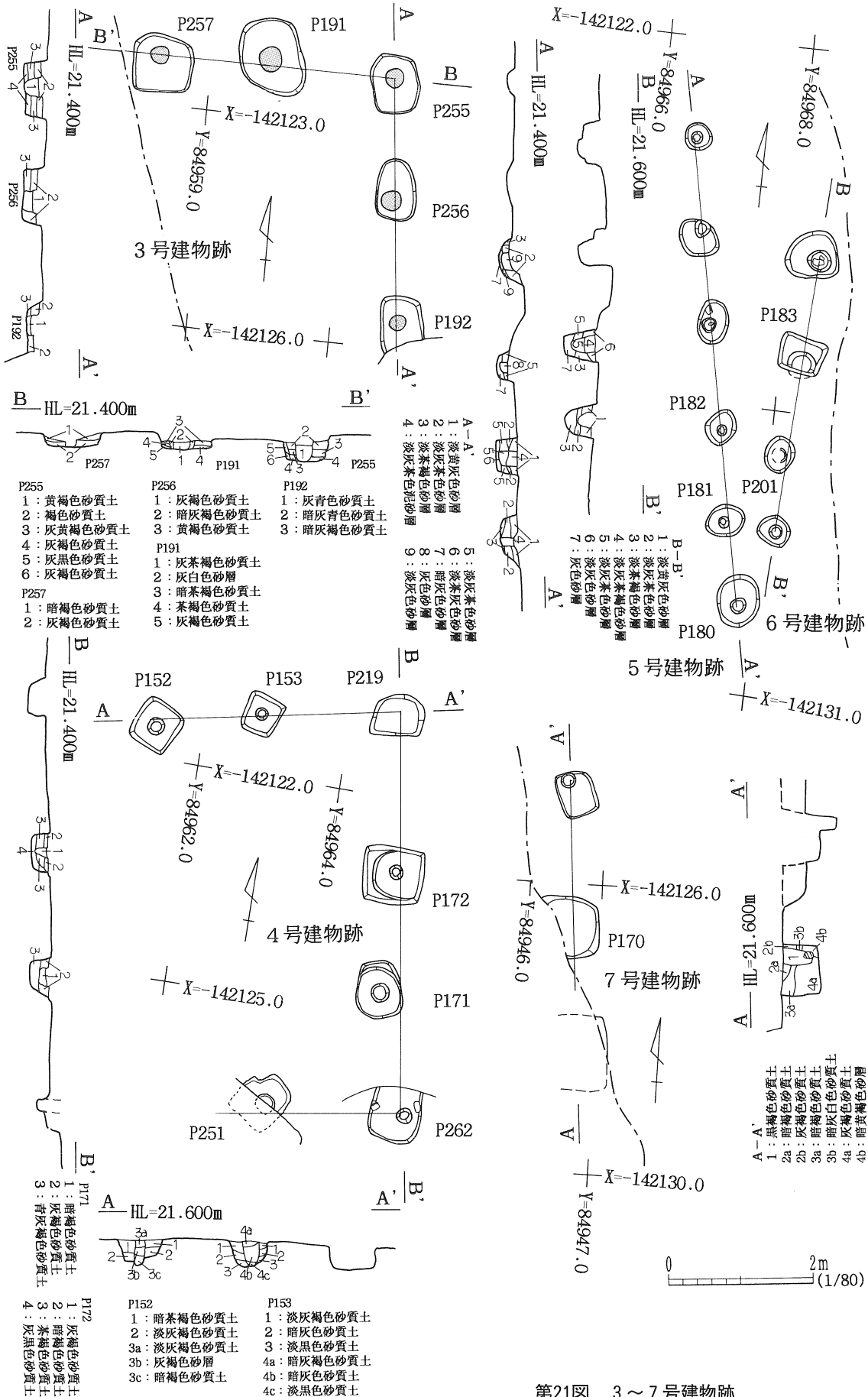
遺物 各柱穴からの遺物の出土が見られたが、図化に耐え得るものはなく、ここでは割愛する。

5号掘立柱建物跡

遺構（第21図） 調査区東側に位置する柱列で、掘立柱建物の桁あるいは柵であろうが、ここでは掘立柱建物跡として記述する。柱列の南北両端は攪乱を受けているため、正確な規模は特定できない。現状では5間（9.3m）が検出されている。柱穴は隅丸方形で残りの良いもので遺構検出面からの深さは



第20图 第1・2号建物跡



第21图 3~7号建物跡

40cmを測る。柱の距離は芯々間で1.20～1.38mを測る。柱列の方向はN-10° 30′ -Wである。

遺物 (第22図・図版50) 各柱穴からの遺物の出土が見られたが、図化できたものはP180出土の1点だけである。10は製塩土器片で、口縁端部が内湾するタイプと思われる。内面は布目痕が認められる。

6号掘立柱建物跡

遺構 (第21図) 調査区東側に位置する柱列で、5号掘立柱建物跡と同様に、掘立柱建物の桁あるいは柵であろうが、ここでは掘立柱建物跡として記述する。柱列の南端は攪乱を受けているため、正確な規模は特定できない。現状では3間(4.42m)が検出されている。柱穴は隅丸方形で残りの良いもので遺構検出面からの深さは45cmを測る。柱の距離は芯々間で1.15～1.48mを測る。軸線方向はN-4° -Eである。

遺物 (第22図・図版50) 各柱穴からの遺物の出土が見られたが、図化できたものはP183出土の2点だけである。9は須恵器杯である。口径12.1cm、器高3.8cmを測る。3号掘立柱建物跡のP256出土の須恵器杯と回転ヘラケズリの範囲がほぼ同じである。12は有孔土錘である。孔を穿った両端部分は、胴部に比べて扁平である。長さ7cm、直径1.8cmを測る。

7号掘立柱建物跡

遺構 (第21・36図・図版13) 調査区西北部に位置する柱列で、掘立柱建物の一部あるいは柵であろうが、ここでは掘立柱建物跡として記述する。柱列の北端は攪乱を受け、南端は更に調査区外に延びるため、正確な規模は特定できない。現状で1間(2.58m)が検出されている。柱穴は隅丸方形で残りの良いもので遺構検出面からの深さは55cmを測る。柱列の方向はN-7° -Eである。

遺物 各柱穴からの遺物の出土が見られたが、図化に耐え得るものはなく、ここでは割愛する。

3. その他の柱穴遺構と遺物 (第13・22図・図版50)

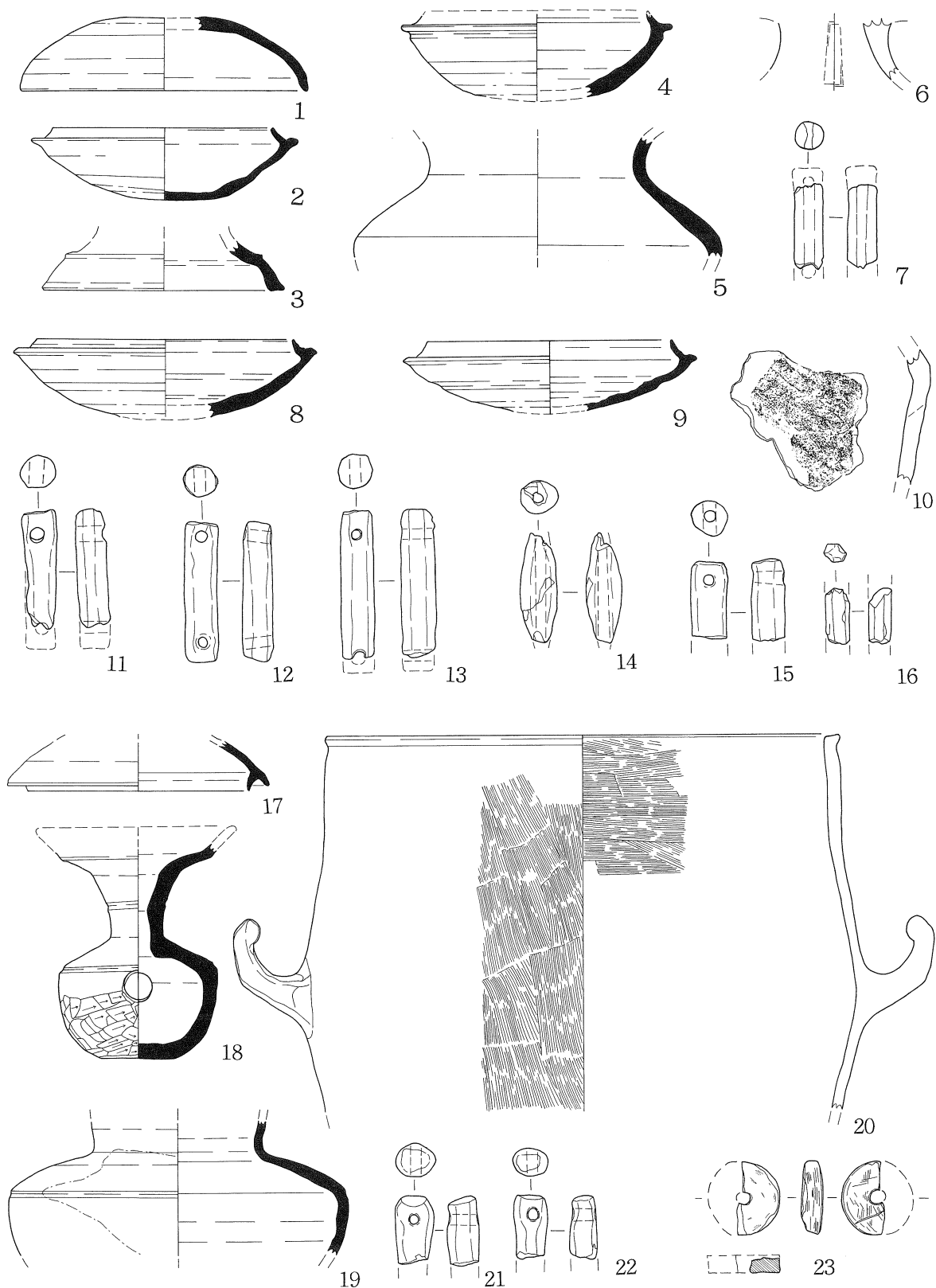
調査区全体に渡って柱穴が見られ、前述した7棟の掘立柱建物跡はその一部に過ぎない。限られた範囲の調査であったことと、攪乱が著しく、部分的に失われていることで、建物跡の柱穴の一部分しか検出できず、結果として単独の柱穴として大半を扱うことになった。そのうち、P208・154・156・194・198の5つの柱穴からは、図化に耐え得る遺物を出土しているため、その遺物について記述する。

P208は調査区中央の南端で検出した柱穴である。6つの柱穴が切りあっており、本遺構は2番目に新しい。出土した2の遺物は須恵器杯で、復元口径10.8cm、器高3.7cmを測る。

P154は調査区東側の4号掘立柱建物跡のP153に隣接する柱穴である。小型の柱穴であるが、11と14の土錘が出土している。11は両端に穴を穿った有孔土錘である。14は紡錘形で中通しになっている土錘である。

P156は13の土錘が出土している。両端に穴を穿った有孔土錘である。

P194は調査区東側の3号掘立柱建物跡のP256に切られる柱穴である。14の土錘が出土している。両端に穴を穿った有孔土錘の一部である。



1号建物 (1 : P174 3 : P228) 2号建物 (4 : P165 5 : P175 6 : P166 7 : P202)
 3号建物 (8 : P256) 柱穴出土 (2 : P208 11 : P154)
 5号建物 (10 : P180) 13 : P156 14 : P154 竖穴状遺構 (17~23)
 6号建物 (9 : P183 12 : P183) 15 : P194 16 : P198)

第22図 掘立柱建物跡・柱穴・竖穴状遺構出土遺物

0 10cm
 (1/3)

4. 竪穴状遺構

遺構 (第13図・図版13) 調査区中央に位置する。第4遺構面上面の1号集石遺構の東側から検出された。攪乱や遺構の切り会いによって遺存状況は極めて悪く全体の状況は捉えられない。西辺は直線的で、西北・西南のコーナーが検出されたことから、方形の形状を呈すると推察され、竪穴住居跡の可能性も考えられる。

遺物 (第22図・図版51)

土師器 20は甑である。胴部中位に上方に大きく反る把手がつき、体部は直線的で口唇部は平坦である。外面は縦ハケ、内面は口縁部に横ハケが施されている。復元口径は25.6cmを測る。

須恵器 17は蓋と思われる。口径10.8cmを測る。18は甕である。胴部下位の外器面は丁寧な手持ちヘラケズリ、直立する頸部の中位に凹線が1条入り、口縁部は大きく開いて段を成す。19は広口壺の肩部と思われる。肩の最大幅を有する部分には凹線が入る。胴部の一部に自然釉がかかる。

土錘 21・22は有孔土錘である。

紡錘車 23は滑石製紡錘車である。上半分が欠損しているが、断面は台形になるものと思われる。直径3.9cmで、現存する厚さは1.0cmである。細かい研磨痕が見られる。

5. 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡

遺構 (第23図) 本遺構は調査区の東端にわずかにかかって検出された遺構である。平面での精査では認識されず、断面の観察によって判明した。4号竪穴住居跡と切りあい関係にあり本遺構の方が新しい。遺構の底面から壁溝がわずかに確認できたが、北側部分が攪乱によって失われているため、遺構上面と床面共に確認することはできなかった。遺構検出面から床面までの深さは20cmを測る。

遺物 (第29図・図版) 図化できた遺物は2点のみである。1は須恵器杯で、復元口径12cm、復元器高4cmである。2は有孔土錘の一部である。

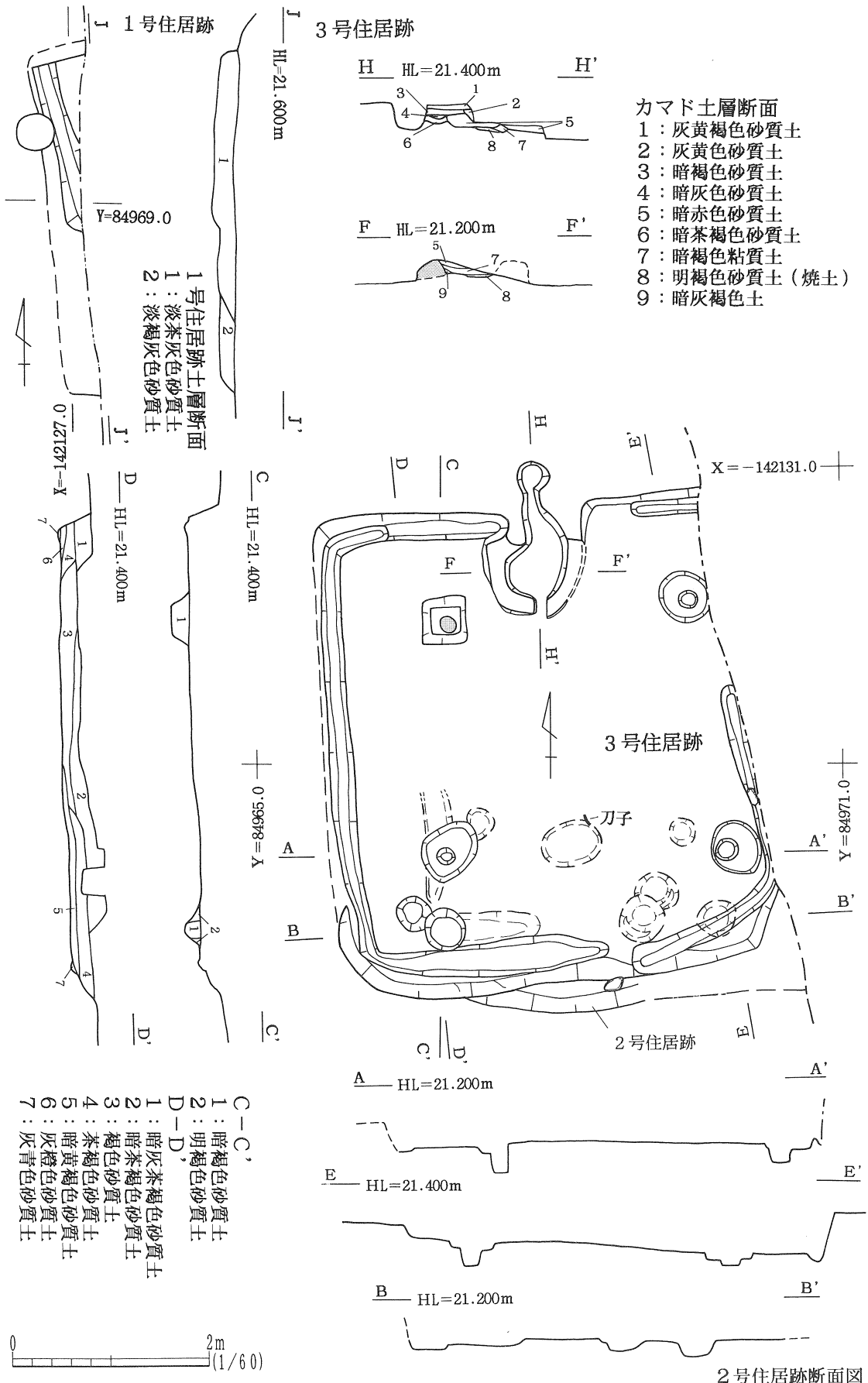
2号竪穴住居跡

遺構 (第23図、図版14) 本遺構は調査区の南東隅で検出された。大部分を3号住居跡によって切られているために、南側の壁と、西側の壁溝の一部が確認できただけである。また東側の調査区境は攪乱によって失われているため遺構の全容をつかむことはできなかった。

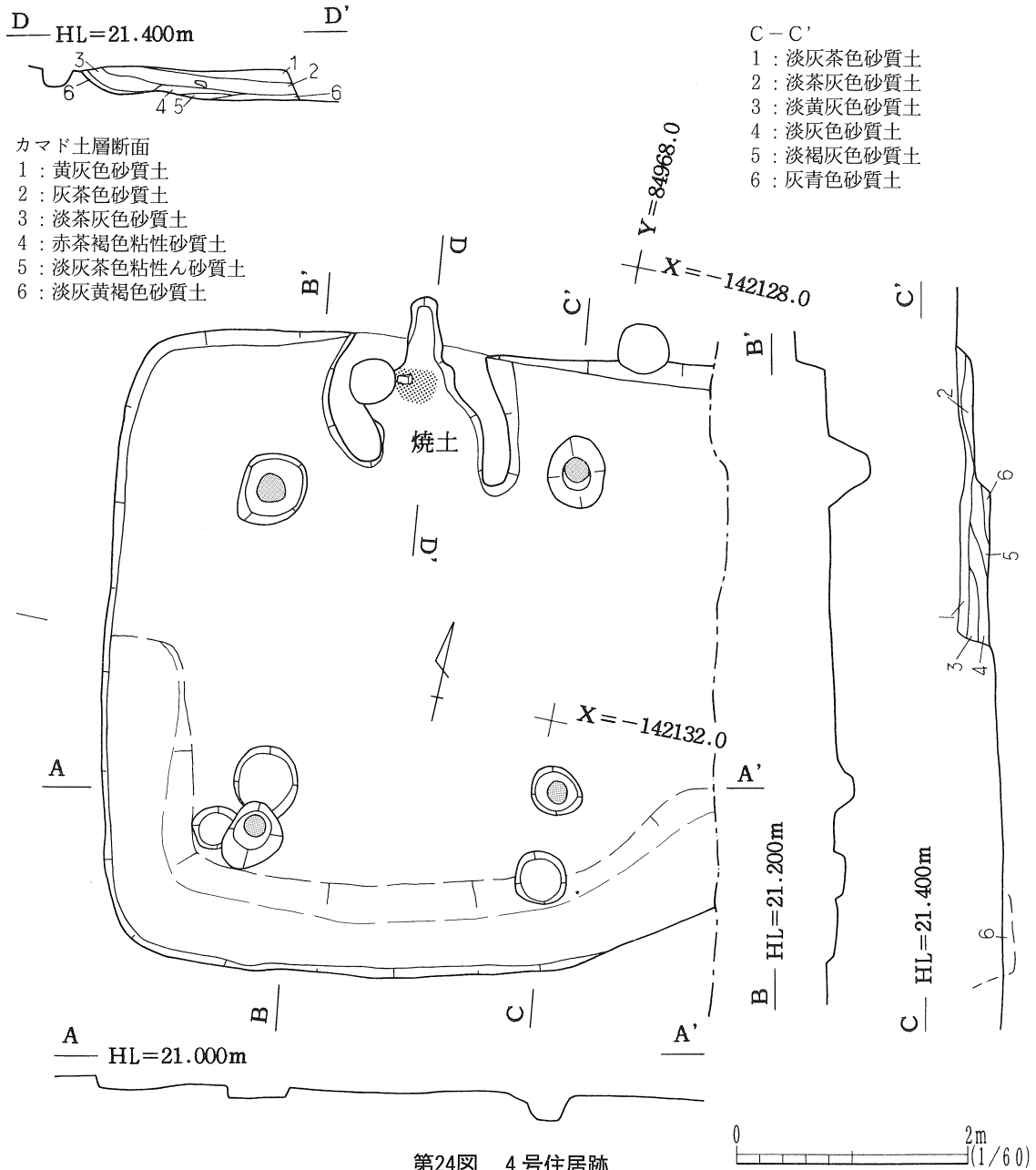
遺物 本遺構からは若干の遺物が出土しているが、小片のため図化に耐え得るようなものはなく、ここでは割愛しておく。

3号竪穴住居跡

遺構 (第23・29・38図、図版14) 本遺構は調査区の南東隅で検出された遺構である。切り合い関係から2号と4号の竪穴住居跡より新しい。遺構の中央部が東西にコンクリート基礎によって壊されていたが、遺構の床面までは及んでいなかった。形状は隅丸方形で南北5m、東西は東端が調査区外にかかっているため、明確ではないが、南東隅にコーナーが見られることから5m前後になるとと思われる。遺構検出面からの深さは最も深いところで35cmを測る。土層の状況から北側からの砂の流れ込みで埋没していると考えられる。壁溝は調査区外にかかる部分をのぞいて全周するが、遺構南端の一部分が切れてい



第23图 1・2・3号住居跡



る。幅は上端は20~25cm、下端は10cm前後を測る。カマドは北壁のほぼ中央にあり、袖の残りも良い。カマドの中央からは支石が立ったままの状態で見出された。支石は方柱で、石質は花崗岩である。煙道は住居外に延びている。遺構検出時に煙道の排煙口の部分に焼土の広がりが見られた。4本の支柱穴は明確にすべて検出できた。カマド左脇の柱穴は検出時は円形であったが、砂層を掘り込んで住居を作っていることと、湧水点が高いため、調査中に崩落してしまったことによる。

遺物 (第29・39図、図版44・51) 本遺構中から出土した遺物は、第29図3~15と第39図の17、21、23が実測できたものである。3は口縁から胴部にかけての土師器甕である。外反して立ち上がる。器面外部は、ハケによる縦方向の調整、器面内部はハケによる横方向の調整を行っている。4・5は須恵器蓋で宝珠つまみをもつ。5は径10cm、器高3cmを測る。6は須恵器杯でやや外傾して立ち上がる。口径は11cm、器高3.8cmを測る。7・8は須恵器の蓋でつまみを持たないものである。7は口径10.1cm、器

高3.2cm、8は口径13.2cm、器高4.2cmを測る。9は須恵器杯身で口径14cm、器高は4cmである。10～12は両端を潰し孔を穿つ土錘である。14、15は両端に孔を穿っただけの土錘である。13は飯蛸壺の把手部分である。第39図の17は鉄製の刀子で住居の中央南よりで検出された。刃部は5cmを測る。基部は途中で折れて失われていた。21は砥石で住居跡の中央西端で検出された。4面ともかなり使い込んでおり磨耗が著しく途中で折れたため捨てられたものと考えられる。23も砥石である。端部に自然面を残すが、4面とも使用した形跡が見られる。1面には幅4mmの断面半円形の溝が見られる。玉を研いだ可能性も考えられる。

4号竪穴住居跡

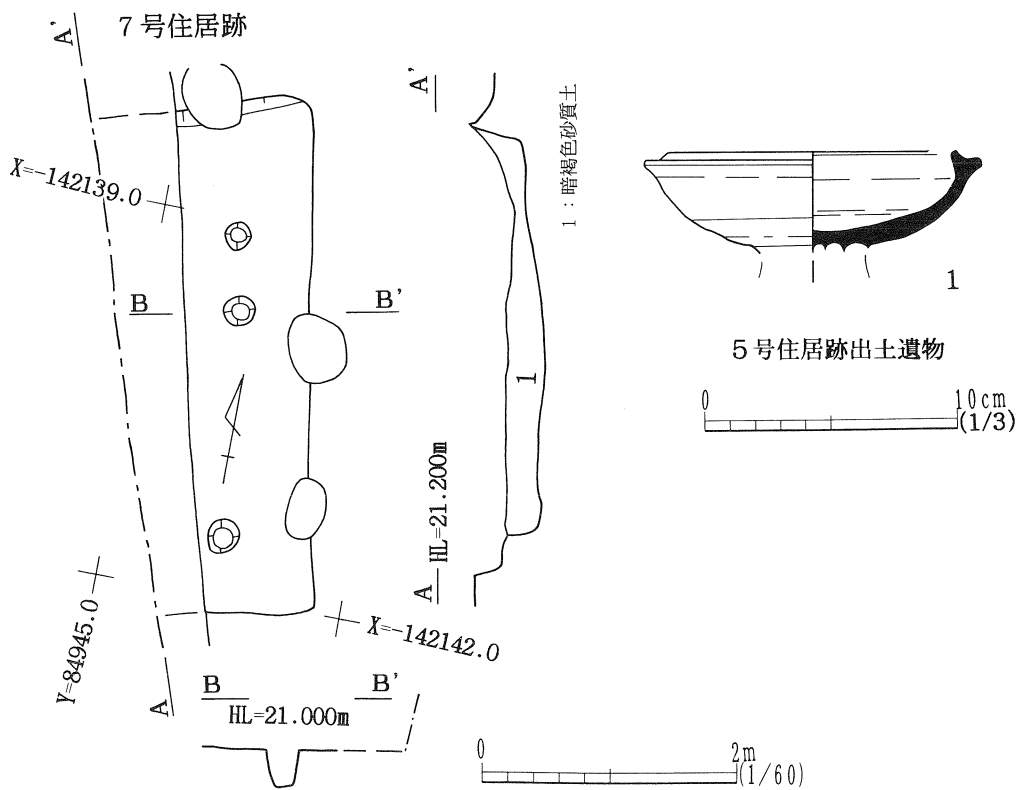
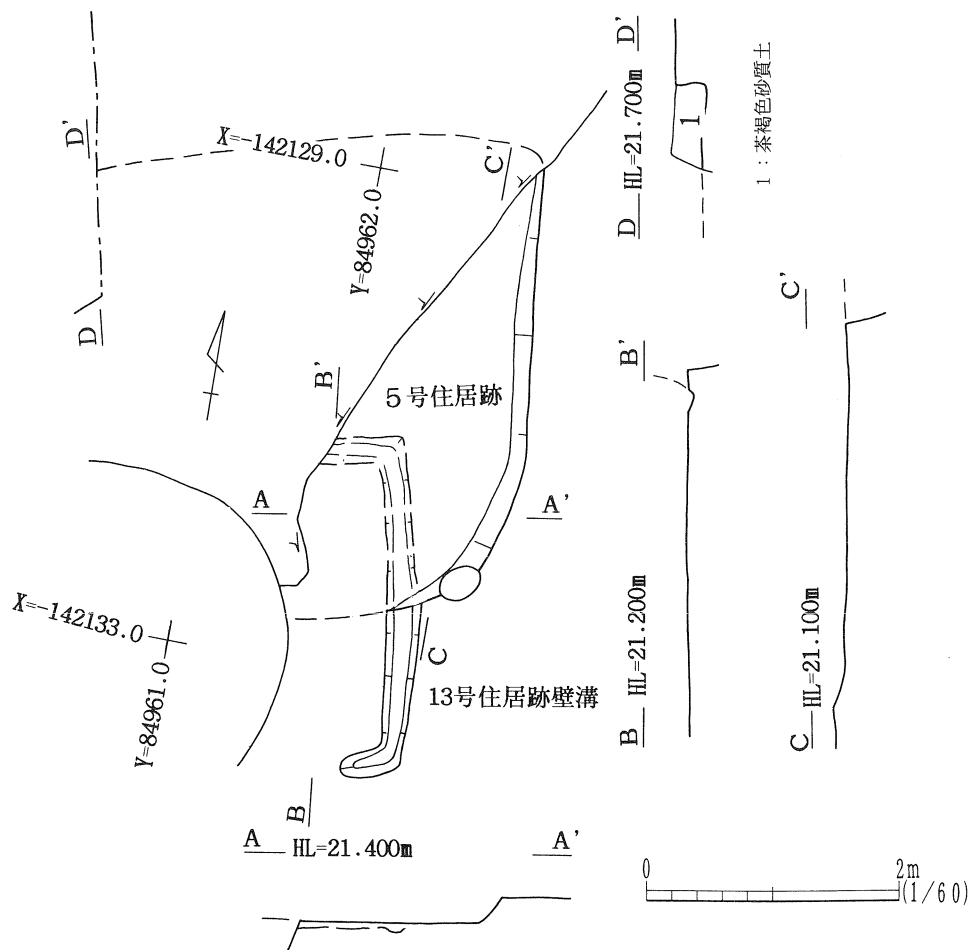
遺構（第24図、図版15） 調査区の東側で検出された住居跡である。切り合い関係により、1号・3号竪穴住居跡より古い。遺構の半分近くを3号住居跡に切られているが、4号住居跡の床面と排水溝は残存していた。遺構の形状は隅丸方形である。遺構の東側部分は調査区外に延びているので、推定される東西の大きさは6m前後になると考えられる。南北は5.7mを測る。遺構検出面からの深さは最も深いところで30cmを測る。土層の観察から北側からの砂の流れ込みで埋没していると考えられる。壁溝は検出できなかった。住居跡の南側半分の壁に沿って幅80～90cm、床面からの深さ10cm程の広い溝が切られている。埋没時の状況は土層から観察できないので、住居構築時に深く掘った掘形を使用時に埋めたのか、排水施設として使用したか、あるいは洪水によってえぐり取られたかの判別はつかない。カマドは北壁の中央からやや西寄りに作られている。袖の残りは、上層からの柱穴の掘り込みがあり良好ではない。カマドの中央からは小型の支石と思われる石が検出された。第24図中のカマド中央にある網点は強く焼けているところである。煙道は住居外に延びている。4本の支柱穴は明確にすべて検出できた。

遺物（第29・39図・図版44・51） 本遺構中から出土した遺物は、第29図の16～23と第39図10である。第29図の16は完形の甕である。内部には孔を開けた際に中に落ちたと考えられる円盤形の器壁が残っていた。頸部は緩やかに広がり、口縁はわずかに内傾しながら立ち上がる。口径10cm、器高は11.8cmを測る。17は甕の把手。18は須恵器高坏の脚裾部である。19～23は土錘で、20と23は両端を潰さずに孔を穿ったもの。他は両端を潰した後に孔を穿ったものである。第39図の10は鉄鏝の茎部と考えられる。

5号竪穴住居跡

遺構（第25図、図版17） 調査区中央東よりで検出された。遺構の大半は攪乱のために失われており、わずかに東壁と床面の一部を残すにすぎなかった。平面の精査と、調査区の中央部に残された南北土層断面の観察から11号住居跡と13号住居跡よりも新しいことが判明している。形状は遺構の東南隅から隅丸方形になると推定される。遺構検出面からの深さは14cmを測る。壁溝は平面からも断面からも見いだすことはできなかった。カマド部分は攪乱で失われているが、中央部に残された土層断面の一部に著しく焼けた痕跡が見られることから、D-D'の土層断面付近にカマドが存在していた可能性が考えられる。このカマドの位置と南東隅のコーナーの存在から4m前後の大きさの竪穴住居跡であったと推測されよう。

遺物（第25図・図版44） 本遺構からは1の須恵器高坏の杯身が出土したのみである。口径14cm、残存高4cmである。



第25图 5·13·7号住居跡

6号竪穴住居跡

遺構 (第26図、図版18) 調査区東北側で検出された。遺構は、南側を12号住居跡、北側を攪乱、西側が調査区外に延びており、わずかに東側の壁と壁溝を残すのみであったため、遺構の規模は不明である。また、遺構の床面から3・4号建物跡の柱穴が検出されたことから、3・4号建物跡よりも新しい。調査区中央の南北土層断面の観察から、1号墳の墳丘面を掘削して構築していることが判明した。遺構検出面から床面までの深さは10～20cmである。

遺物 (第29・39図、図版51・52) 第29図の24～28と第39図19・22が出土遺物である。第29図の24は須恵器甕の口縁部である。3条の櫛搔きが施されている。25は須恵器の小壺か提瓶の口縁部分であろう。口径6.5cmを測る。26は甕の把手部分、27・28は土錘である。前者は両端を潰して孔を穿ったもの。後者は両端を潰さずに孔を穿ったものである。第39図の19は鉄製の鎌で、大型鎌と小型の鎌が2枚重なった状態で出土した。22は砥石である。1面のみが著しく窪んでいる。途中で折れているので廃棄されたものと思われる。

7号竪穴住居跡

遺構 (第25図、図版17) 調査区の最西端から検出された遺構である。西の壁面の土層断面観察時に検出された。平面的には、すでに掘立柱建物跡の遺構検出作業にあっていたため、わずかに床面の範囲を押さえるにとどまった。形状は隅丸方形で南北幅は3.3mを測る。

遺物 本遺構からは遺物の出土はなかった。

8号竪穴住居跡

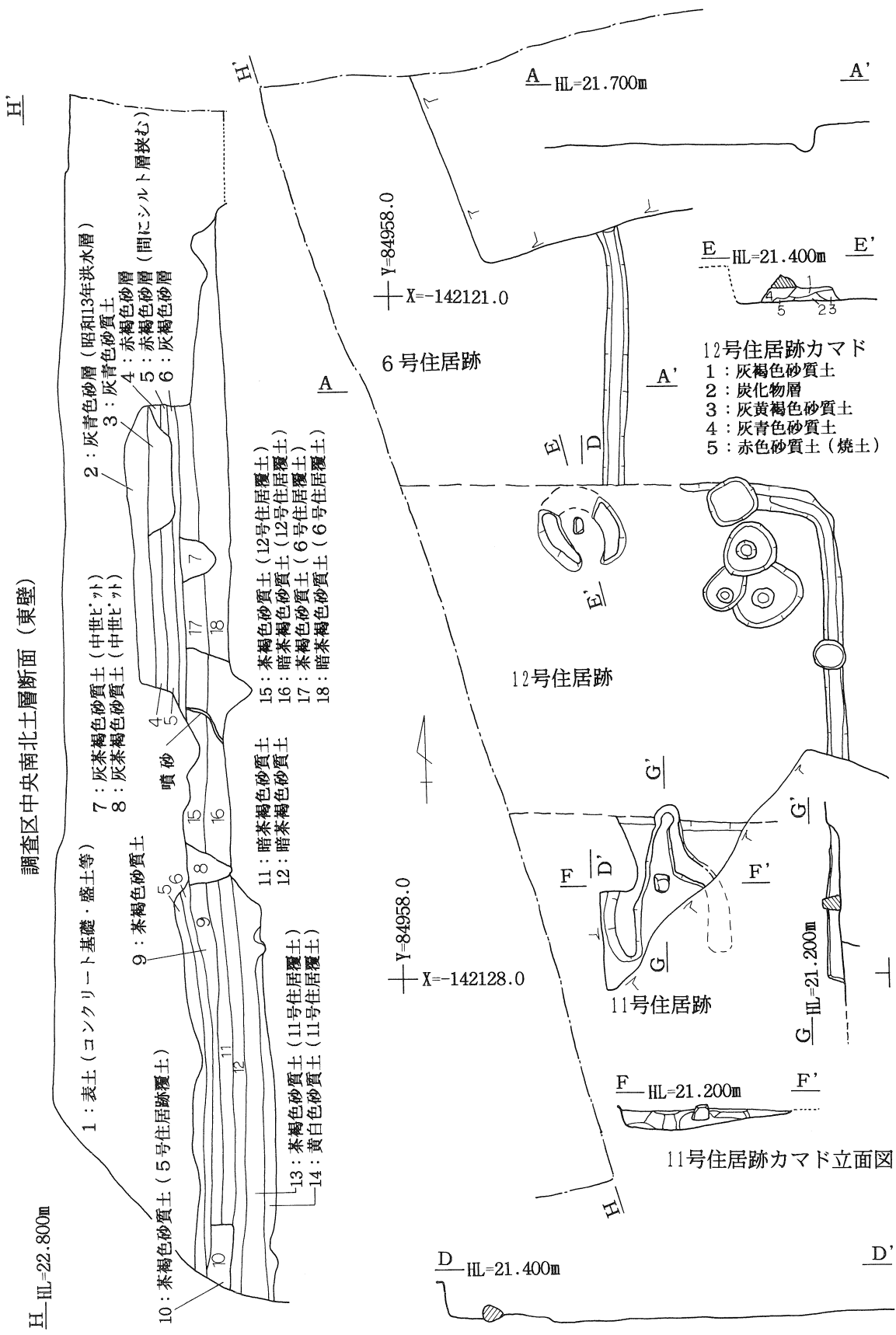
遺構 (第27図、図版18) 調査区中央の南壁の際から検出された遺構である。この部分においては8・9・10・14・15の5基の竪穴住居跡が切り合っている。南壁の土層観察などから、新：9号→8号→14号→10号→15号：古の順に遺構の変遷があったものと理解される。以上の状況から本遺構は残存状況が悪く、北西コーナーと壁溝、カマドを検出するに留まった。当初カマドは、攪乱のために西側の袖がなく、東向きであると思われたが、カマドを取り外し、9号住居を調査した時点で、8号住居跡が東に伸びていた痕跡があったため、北カマドと判明した。カマドの中央には方形の支石が残っており、その周辺も含めて強く焼けていた。

遺物 (第29図、図版52) 本遺構から出土した遺物は第29図の29・30のみである。29は須恵器杯身である。口径は14cmを測る。30は土師器甕の口縁から体部上半の一部分である。調整の跡は体部にハケ目が見え、わずかに観察されたのみである。

9号竪穴住居跡

遺構 (第27図、図版18) 調査区中央の南壁の際から検出された遺構である。8号住居跡で前述したように、5基の竪穴住居跡が切り合っており、土層観察から本遺構は2番目に新しい。直接には8号住居跡を切って作られている。北西隅のみの検出であるために、遺構の全体像は不明である。

遺物 わずかに出土しているが、図化に耐えうるものはなく、ここでは割愛する。



第26図 6・11・12号住居跡

10号竪穴住居跡

遺構（第27・29図） 調査区中央の南壁の際から検出された遺構である。8号住居跡で前述したように、5基の竪穴住居跡が切りあっており、土層観察から本遺構は2番目に古い。遺構の大半を切り合いと攪乱によって失われている。また、南半分は調査区外に伸びている。東側は8号住居跡の床面から検出された。床面も遺構検出時にはわずかに残るだけで、範囲を確認するにとどまった。カマドは北カマドで住居跡のほぼ中央にあると推測される。炉の中央には10cm程の石が置かれていた。カマドの残りも非常に悪い。カマドの左脇に壁溝の残滓と思われる溝跡も確認される程度である。支柱穴も同様に切りあった状態で出ており、本遺構に伴うものかどうかの判断はつかない。

遺物（第29図、図版52） 31が本遺構に伴うと考えられる遺物である。甌の把手の部分である。

11号竪穴住居跡

遺構（第26図、図版19） 調査区中央から東側にかけて検出された遺構である。攪乱のためにカマドと周辺のみが残存である。12号住居跡の床面を切って、11号住居跡が作られている。5号住居跡との関係は、5号住居跡に伴うとみられるカマドの痕跡が中央の調査区外の土層断面から確認できることから、5号住居跡に切られているとみられる。カマドの中央には花崗岩の支脚が立ったまま検出された。カマドの袖は大部分がピットや攪乱のためあまり明瞭ではない。

遺物（第29図、図版52） 32～36が本遺構出土の遺物である。すべてカマドの火床からの出土である。32は須恵器蓋杯である。口径12cm、器高3.6cmを測る。33は須恵器甕の口縁部分、34は須恵器高坏の脚部分で二段方形透かしが入り、上下の透かしの間には2本の凹線が入る。35は土師器甕である、体部は下方向に向かったのハケ調整、頸部は横ナデを行っているが、わずかにハケ調整の痕跡が認められる。36は土錘である。両端を潰さないで孔を穿っている。

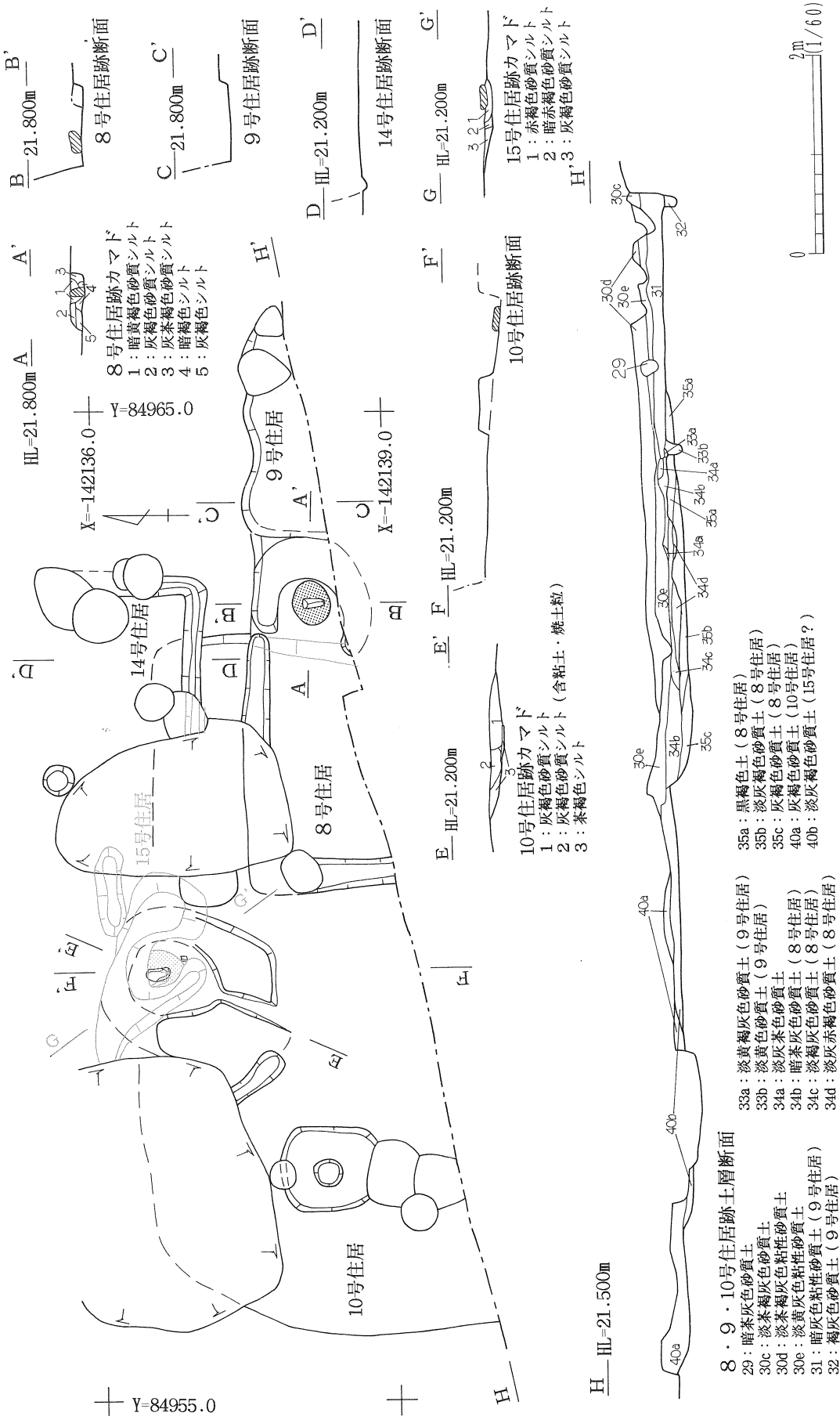
12号竪穴住居跡

遺構（第26図、図版19） 調査区東側で検出された遺構である。切り合いと攪乱のために、全体の3割程度しか残存していない。本遺構の南側は11号住居跡によって切られ、また、攪乱によって失われている。西側は調査区外に及んでいる。北側は6号住居跡を切っているが、両住居跡の埋土が非常によく似ていたため、6号住居跡を調査している時点で同時に掘り込んでしまった。土層断面H-H'の観察とカマドの存在から住居跡と認識して精査を行った結果、東側の壁溝がわずかに残っていることが判明した。カマドは袖が明瞭であり、比較的堅緻であった。中央からは花崗岩製の支脚が立ったまま確認された。支柱穴は、東北部分のみの検出であった。3号掘立柱建物跡のP256を切っている。

遺物（第28図、図版50） 本遺構からは、1の土錘が出土したのみである。両端を潰し穴を穿ったものである。

13号竪穴住居跡

遺構（第25図、図版17） 調査区東側中央で検出された遺構である。5号住居跡の床下より壁溝が確認されたことにより認識された。壁溝の幅は20～25cm程である。壁溝を南に辿ると14号住居跡に至るが、床面の高さが異なることと間をコンクリート基礎の攪乱で壊されているため、ここでは別な遺構として捉えている。



第27図 8・9・10・14・15号住居跡

遺物 本遺構からは、遺物の出土が若干みられたが、図化に耐えうるものはなく、ここでは割愛した。

14号竪穴住居跡

遺構（第27図） 調査区中央南端で検出した遺構である。攪乱のため南東側コーナーの壁溝を確認できた程度である。8号住居跡のところでも前述したがかなりの切り合いがあり、本遺構は15号住居跡を切っていることは確認している。また、13号住居跡でも記述したが、13号住居跡の床面の高さや攪乱によって分断されており、同一遺構とは考えにくいので、ここでは別な遺構として扱っている。

遺物 本遺構からは、遺物の出土はない。

15号竪穴住居跡

遺構（第27図、図版20） 10号住居跡のカマドの火床を断ち割ったところ下から更に支脚が出てきたことによりカマドが重複していることが確認された。カマドの両脇が攪乱でなくなっているために住居跡の広がりや捉えることはできなかった。本調査区で確認されている他の住居跡の規模からいっても調査区の南壁にその痕跡を捉えることができるとは思われたが、明確に捉えることはできなかった。カマドの形状は煙道が壁に沿って西側に延びるものと思われる。支脚は倒れた状態で検出された。石の材質は花崗岩であった。また、カマドの袖の一部は10号住居跡のカマドによって壊されていた。

遺物（第29図、図版44） 37は本遺構から出土した遺物である。土師器杯で、内外面ともミガキが加えられている。底部から内湾気味に立ち上がり口唇部はつまみ上げ外反する。

16号竪穴住居跡

遺構（第28図、図版21） 調査区の東側で検出された遺構である。住居の東側は調査区外にかかっている。南西コーナーで壁溝が検出され、それに伴って精査したところ、砂の色が周りとは異なり、遺構の範囲が判明した。南北5.1mを測り、東西は5m以上と推測される。本遺構の南東隅は1号住居跡に切られている。支柱穴は4本と思われる。うち3本が確認されているが、残り1本は調査区外にあると思われる。

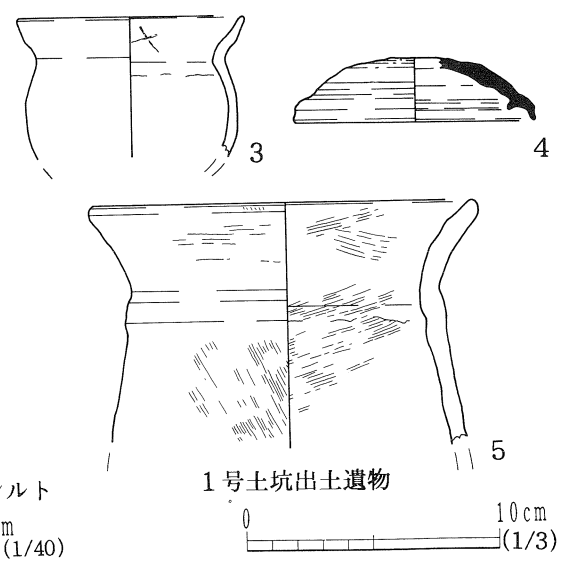
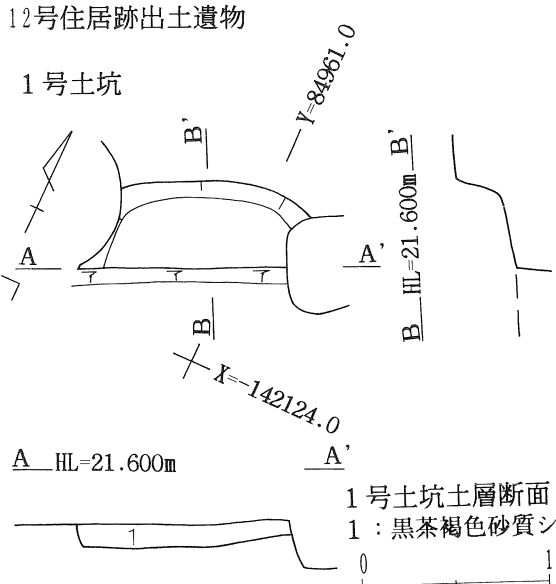
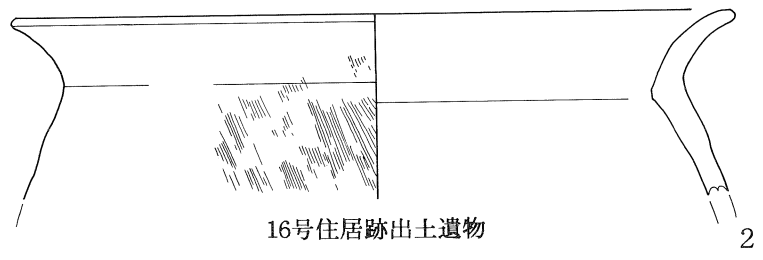
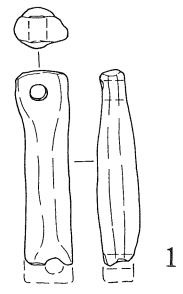
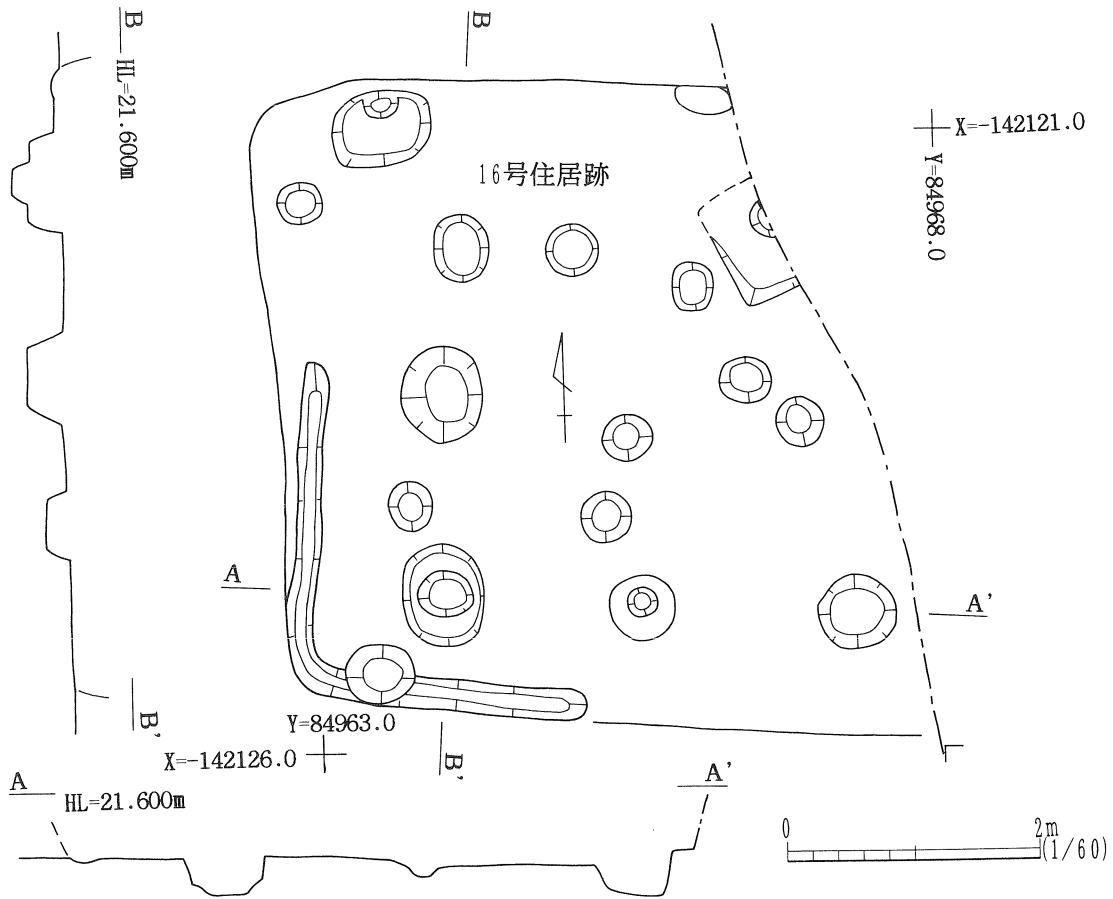
遺物（第28図、図版52） 2が本遺構出土の遺物である。土師器甕の口縁部で外反して立ち上がる。外器面はハケで調整されている。

6. 土坑

1号土坑

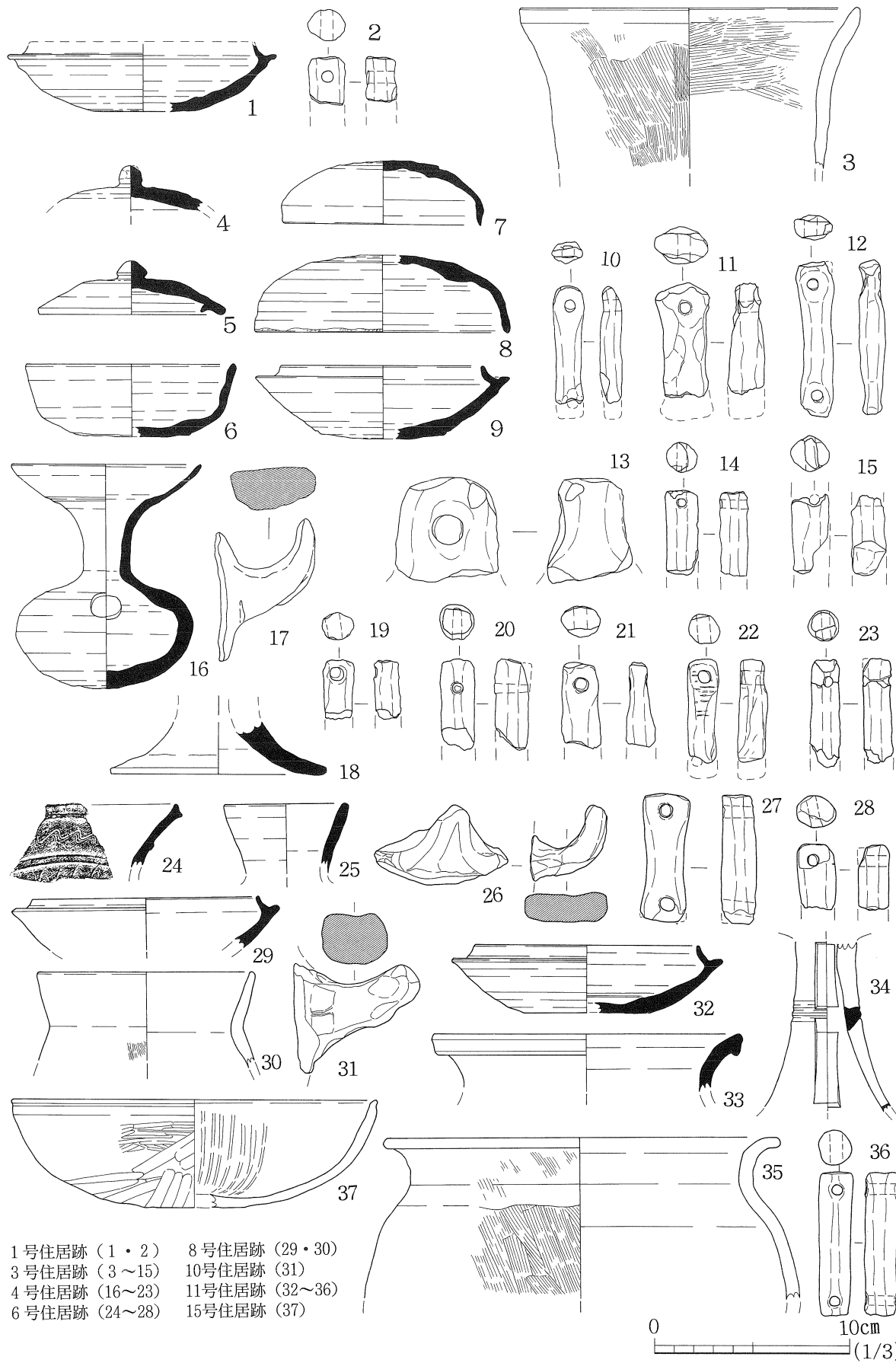
遺構（第28図、図版21） 調査区の北東側で検出された遺構である。遺構の南半分を攪乱で失われ、東西両側を掘立柱建物の柱穴で切られている。深さは約10cmである。

遺物（第28図、図版52） 3の土師器小型壺は、口縁内部に×字状のヘラ書きが見られる。器面は粗れている。4の須恵器蓋は、復元口径9.9cm、器高2.6cmを測る。5の土師器甕は、体部から口縁にかけての部分で、外面に撫での痕跡が見られる。



1号土坑土層断面
1: 黒茶褐色砂質シルト

第28図 第16号住居跡・1号土坑



第29图 竖穴住居跡出土遺物

第4章 古墳時代の遺構と遺物

第1節 古墳

1. 古墳時代後期（第5遺構面）の概要（第30図・図版22・23）

第4遺構面の基盤となっていた第IV層の下には、純粋な黄色砂層が厚く堆積している。この砂層は洪水によって運ばれてきたものであり、土層断面からは墳丘の断面形に沿って堆積していることがわかる。これにより、古墳の周溝だけでなく、古墳自体も埋没していたことがわかる。この堆積が一度の洪水によるものでなく、短い期間に何度か繰り返された結果であることは、切り合った古墳の周溝の埋土が同じ黄色砂層であることから明らかである。

この砂層を除去すると黒色シルトの面が広がり、これが第5遺構面の基盤となっている。黄色砂層と黒色シルトは容易に分層できたため、第5遺構面の遺構は明確に検出された。遺構としては古墳が8基検出されている。

黒色シルトの面は調査区全面に残っており、標高は20.30m～21.10mで、北から南に傾斜している。

1号墳

遺構（第31図、図版23・24） 1号墳は調査区中央の北側に位置しており、2・3号墳と隣接している。調査区外を挟んで西側にわずかに周溝外縁が確認されたことから、方墳と考えられる。

北辺と西半分が調査区外にあるため、全体の1/4が検出されたにとどまる。また、第4遺構面の6・12号竪穴住居跡や3号掘立柱建物跡が本墳を切っているため、封土は残っておらず、遺存状態は良くない。墳丘規模は、周溝外径で10.2m～10.8m、周溝内径は不明確だが6.8m程ではないかと思われる。

周溝南辺の墳丘側の立ち上がりに偏平な川原石が2個重なって出土したが、これは墳丘上の貼石が崩落したものと思われる。

周溝幅は1.6～1.9mで、深さは0.7～1.3mで、北から南に向かって深くなっている。周溝の内側の立ち上がりは緩やかで、灰褐色シルトの貼土が見られることから、墳丘の裾部にあたると思われる。外側は壁が水流によって抉られている。

周溝埋土は、混入物を含まない純粋な砂層であることから、洪水によって埋没したものと思われる。周溝東南隅の床面から、U字形鍬先が刃を下にして深く突き刺さった状態で出土したが、これは周溝掘削に使用していたものが抜けなくなって放置されたものと推測される。

主体部は調査区外にあるものと思われ、検出されなかった。

遺物（第39図）

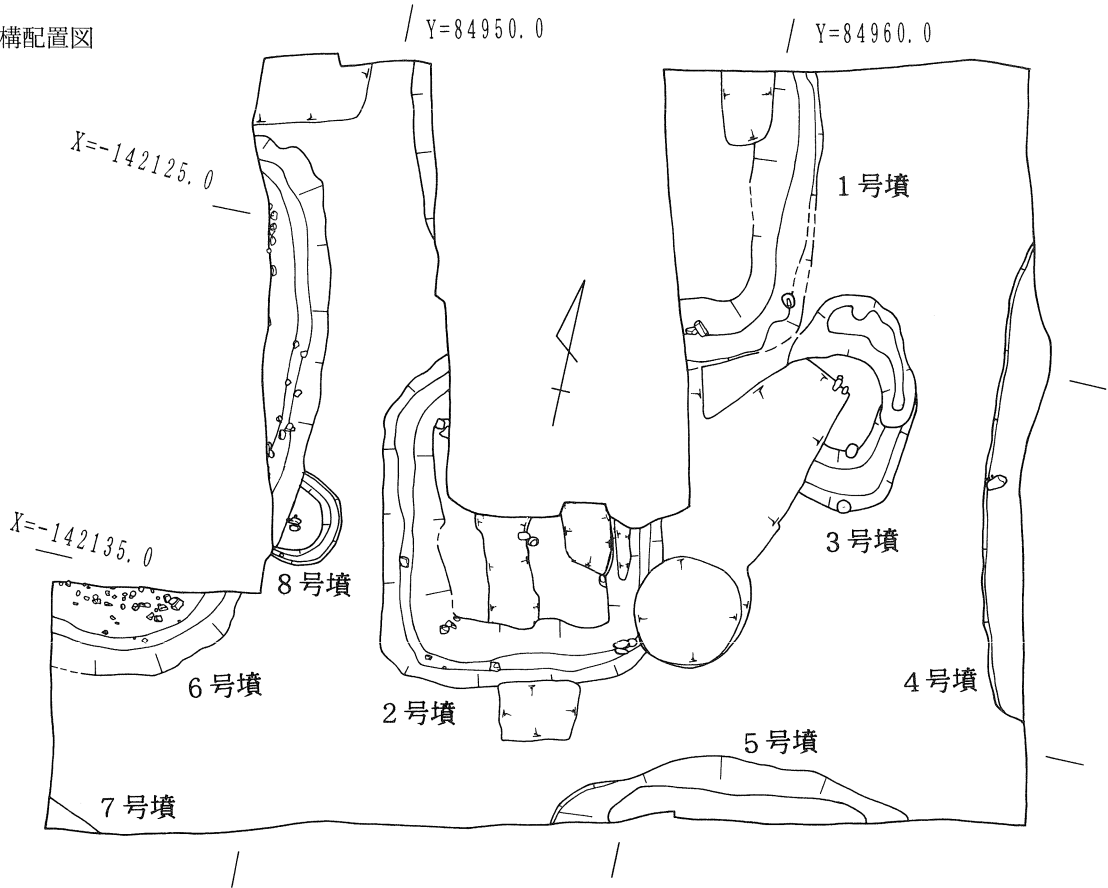
第39図の20は鉄製U字形鍬先で、錆膨れのため遺存状態は良くないが、ほぼ完形である。袋部の幅は1.3cmで、刃幅は0.9cmを測る。

2号墳

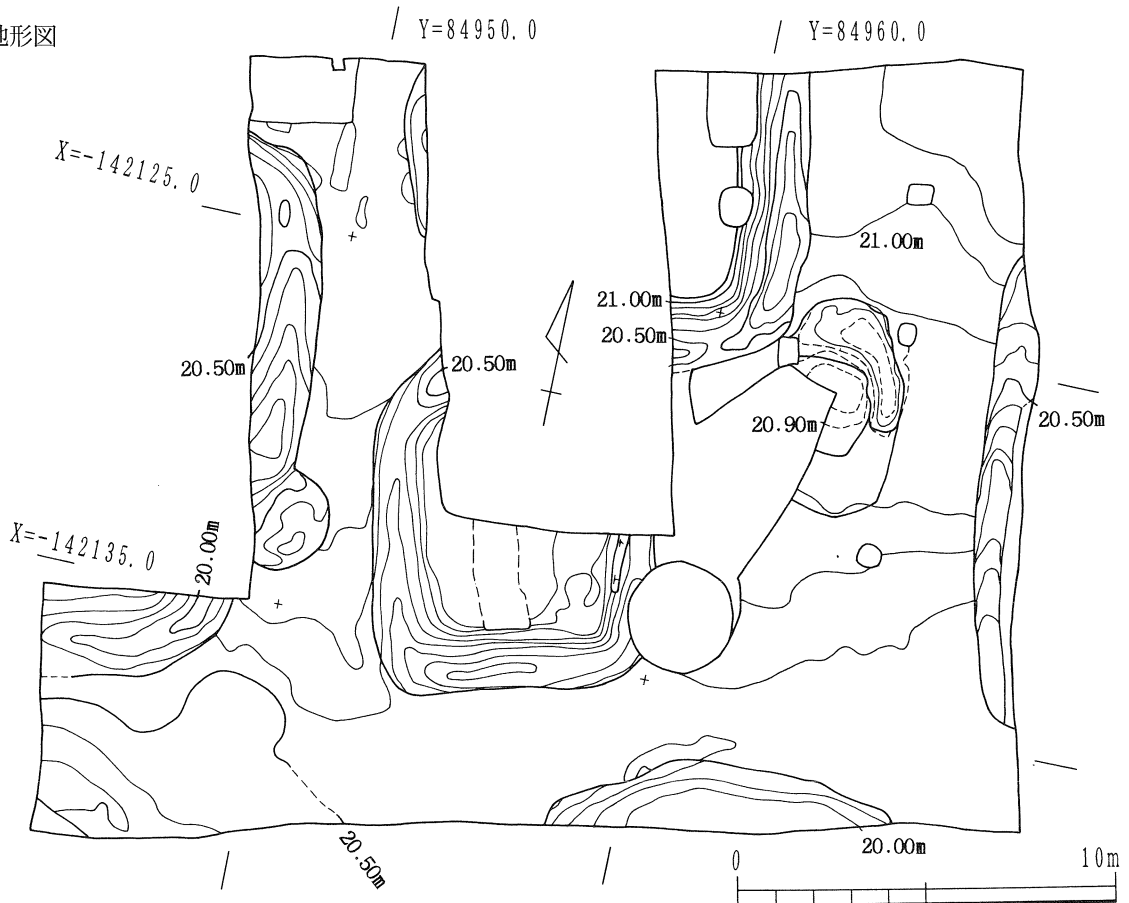
遺構（第32図、図版25・26）

本遺構は調査区中央に位置する方墳で、1号墳と隣接している。全体の3/5が検出されたが、中央

遺構配置図

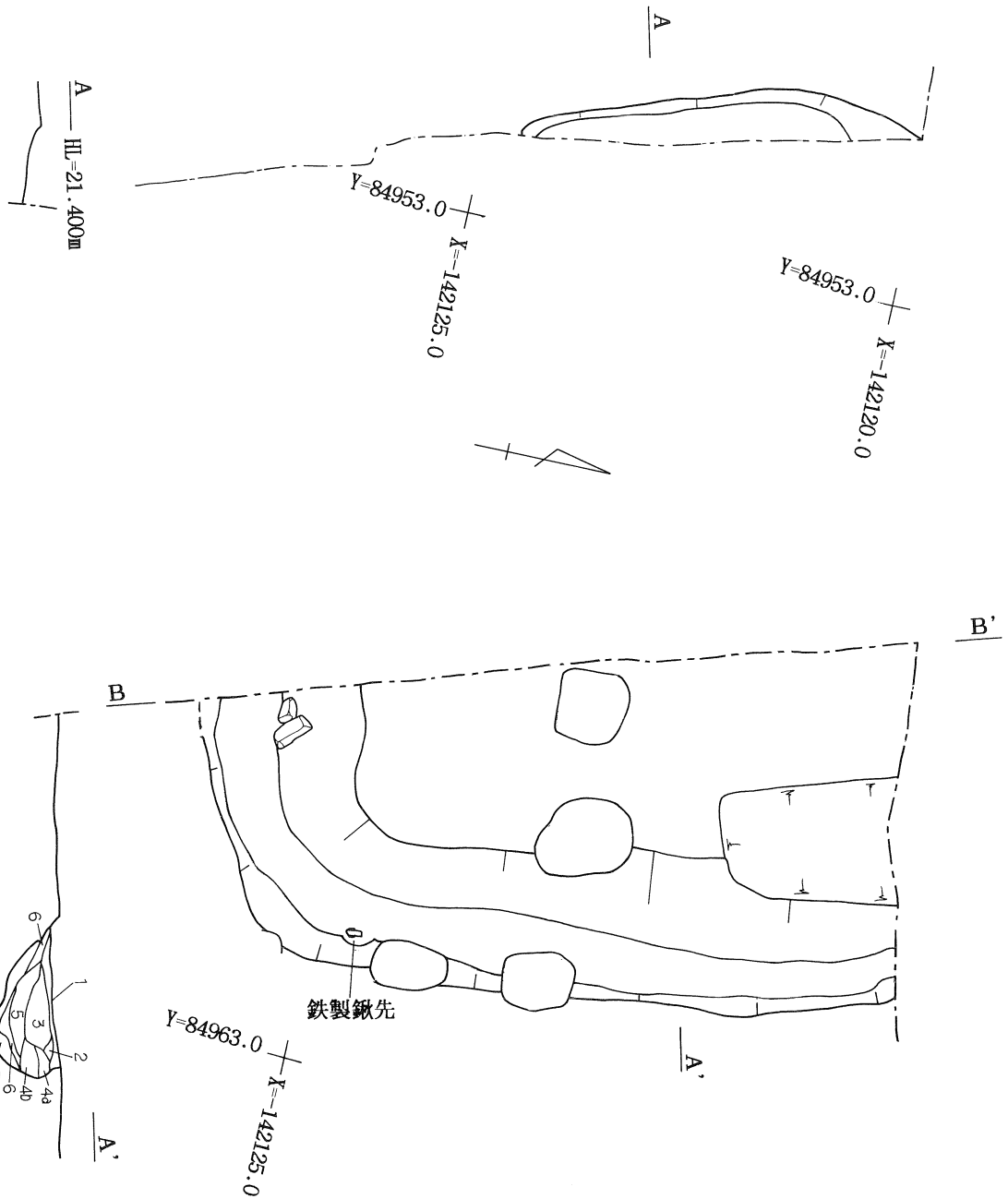


地形図

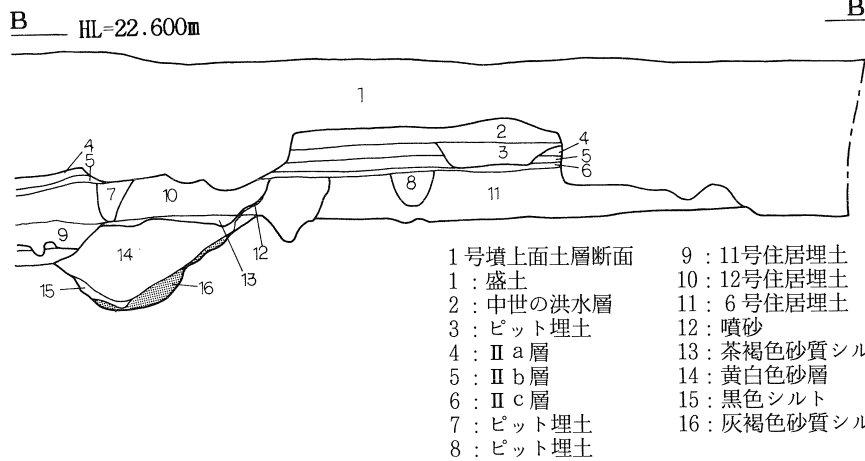


第30図 第5遺構面 配置図・地形図

(1/200)

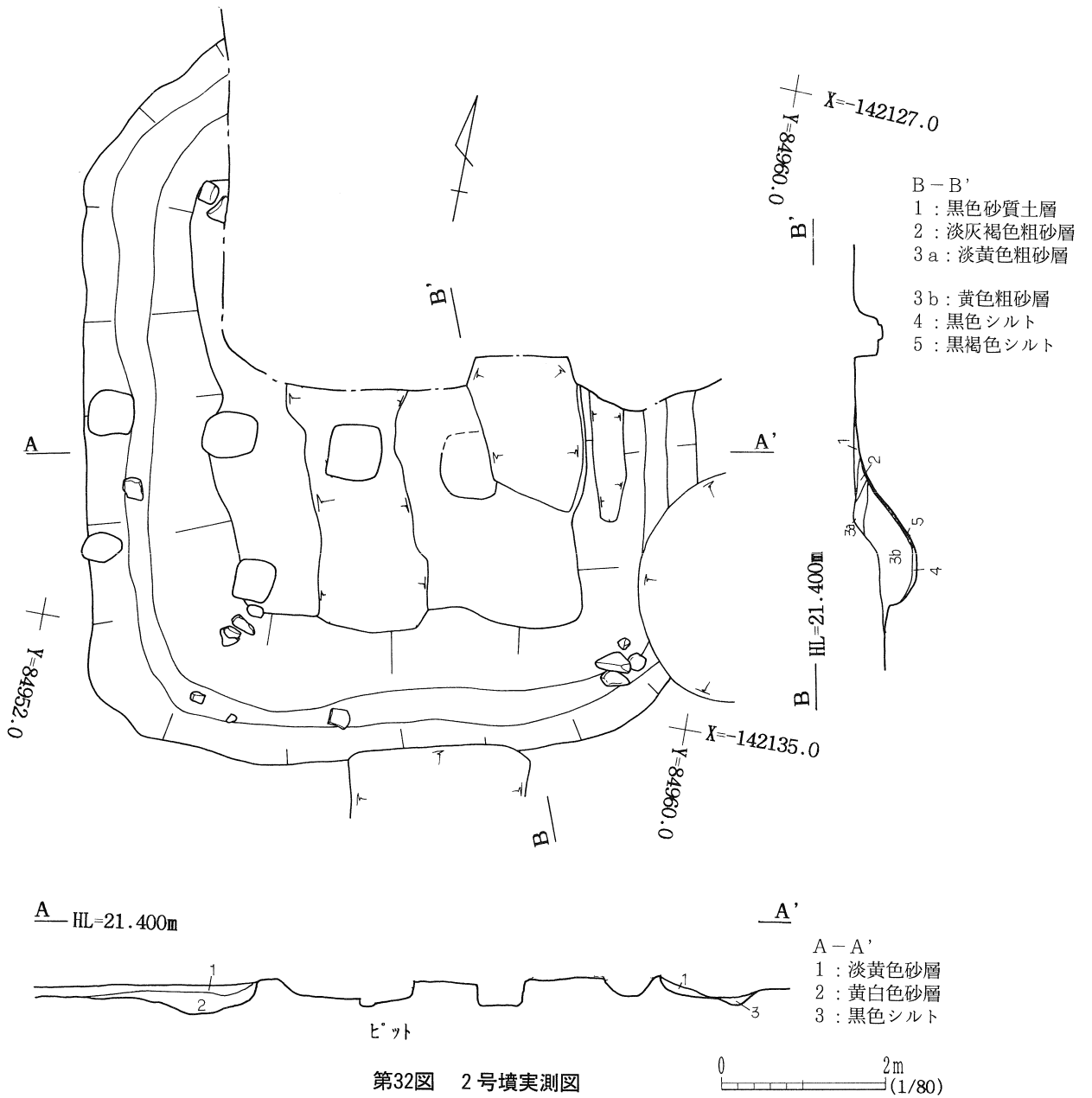


- 1号墳周溝土層断面
- 1 : 褐色砂層
 - 2 : 暗褐色砂層
 - 3 : 明褐色砂層
 - 4a : 褐色粗砂層
 - 4b : 褐色細砂層
 - 5 : 褐色砂層
 - 6 : 明褐色砂層
 - 7 : 灰褐色粘質シルト



- 1号墳上面土層断面
- 1 : 盛土
 - 2 : 中世の洪水層
 - 3 : ビット埋土
 - 4 : II a層
 - 5 : II b層
 - 6 : II c層
 - 7 : ビット埋土
 - 8 : ビット埋土
 - 9 : 11号住居埋土
 - 10 : 12号住居埋土
 - 11 : 6号住居埋土
 - 12 : 噴砂
 - 13 : 茶褐色砂質シルト
 - 14 : 黄白色砂層
 - 15 : 黒色シルト
 - 16 : 灰褐色砂質シルト

第31図 1号墳実測図



部には南北に攪乱が入り、また第4遺構面の1号掘立柱建物跡が本遺構を切っているため遺存状態は良くない。

墳丘規模は、周溝外径で10.2~10.8m、周溝内径は6.8mを測る。検出された墳丘の稜線上に、扁平な川原石の貼石が見られる。西北隅に2個、西南隅に3個、コーナーの稜線に沿って縦に並んでいる。東南隅のものは周溝に崩落しているが、本来は同様に貼られていたと考えられる。四隅に貼石をもっていたと思われる。

周溝幅は1.6~1.9mで、深さは0.7~1.3mで、北から南に向かって深くなっている。周溝の内側の立

ち上がりは緩やかで、灰褐色シルトの粘土が見られることから、墳丘の裾部にあたると考えられる。外側は壁が水流によって抉られている。

周溝埋土は、混入物を含まない純粋な砂層であることから、洪水によって埋没したものと思われる。その埋土中から須恵器碗が2点出土している。洪水による堆積層中であるため、本遺構に伴う可能性は少ないと考えられる。

遺物（第35図、図版52）

1・2は須恵器杯である。1は復元口径10.6cmを測る。口唇部には段を持ち、底部に回転ヘラケズリが見られる。TK208期にあたる。2は復元口径9.4cm、器高5.0cmを測る。MT15期にあたる。

3号墳

遺構（第33・34図、図版27・28・29）本遺構は調査区東側に位置しており、1号墳と隣接している。攪乱や試掘トレンチが入っているため、全体の3/4が残存していた。

周溝外縁はやや不整形だが、東辺と南辺が直線的で、東南隅にコーナーを持つことから、方墳と考えられる。

墳丘は、攪乱を受けているため、頂部が失われている。現状で12cm程残っている。墳丘規模は、周溝外径で5.52m、周溝内径はやや不明確ではあるが2.5mを測る。周溝幅は0.9～1.7mで、深さは非常に浅く約10cm程で、北から南に向かって深くなっている。

主体部は、墳丘中央部に埋置された小型の箱石石棺で、南半分と蓋石の大部分が失われており、遺存状態は良くない。

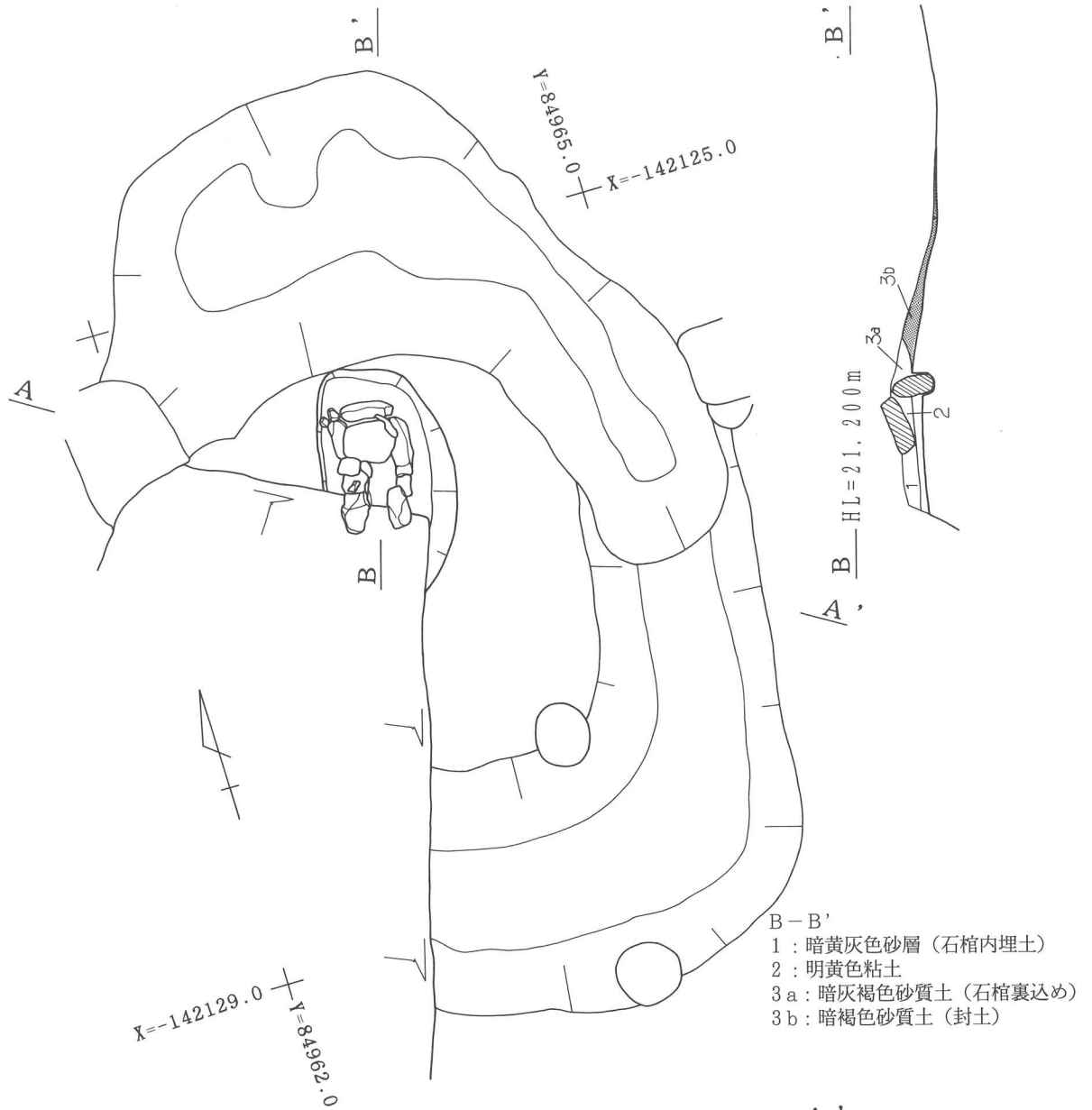
墓壇は長辺約1.44m以上、幅0.6～1.58m、深さ0.3mで、墳丘上から掘り込まれている。棺は偏平な河原石を多少整形して使用しており、側壁が両側に2枚ずつ立て据えられており、隙間を粘土で埋めている。小口には1枚石が確認された。蓋石はほとんどが外れており、1枚を残すのみであった。棺内を掘り下げたところ、小口近くの床面上から粘土が出土している。これは蓋石が崩落したか何らかの理由で蓋石をはずされた際に、棺内に落ちたものと思われる。石棺の内寸は、長辺1.4m以上、幅32～40cm、深さ約20cmである。

遺物（第33図、図版46）本遺構の墓壇、周溝から遺物の出土はなかったが、周溝北側のやや外よりの部分から第33図の土師器高杯の出土がみられる。第5遺構面の直上から横倒しの状態で出土した。古墳を埋めた砂によって運ばれた可能性も考えられるが、単純に横倒しになった可能性も否定できないので、ここで取り上げた。高杯は、丸みのある杯部で外面の下位に低い稜を有する。脚部は大きく屈曲し、内外面はヘラケズリで調整している。口径14cm、器高11.5cm、底径10cmを測る。

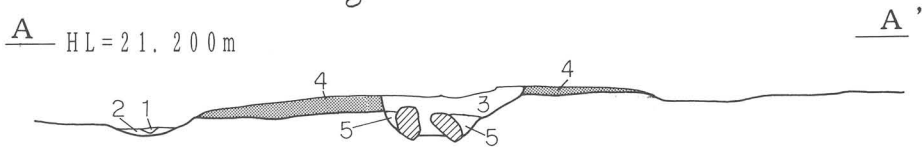
4号墳

遺構（第35図、図版30）本遺構は調査区東端に位置しており、わずかに周溝外縁が検出された。検出された周溝外縁の形状は比較的直線的であり、南西端と北西端付近と思われる部分も検出されていることから、一辺13～14mの方墳と考えられる。周溝中央の西側の立ち上がりに偏平な河原石が2個重なって出土した。これは古墳墳丘の隅にあった貼石が崩落したものと思われる。

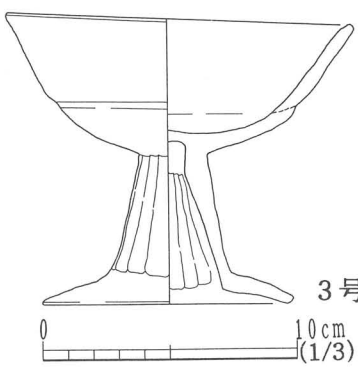
周溝幅は1.6～1.9mである。遺構検出面からの深さは0.7～1.3mで、北から南に向かって深くなっている。周溝内側の立ち上がりは緩やかで、外側は壁が水流によって抉られている。周溝埋土は、混入物



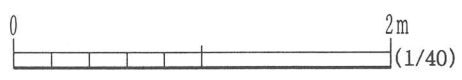
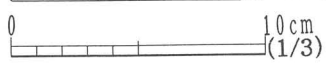
- B-B'
- 1: 暗黄灰色砂層 (石棺内埋土)
 - 2: 明黄色粘土
 - 3a: 暗灰褐色砂質土 (石棺裏込め)
 - 3b: 暗褐色砂質土 (封土)



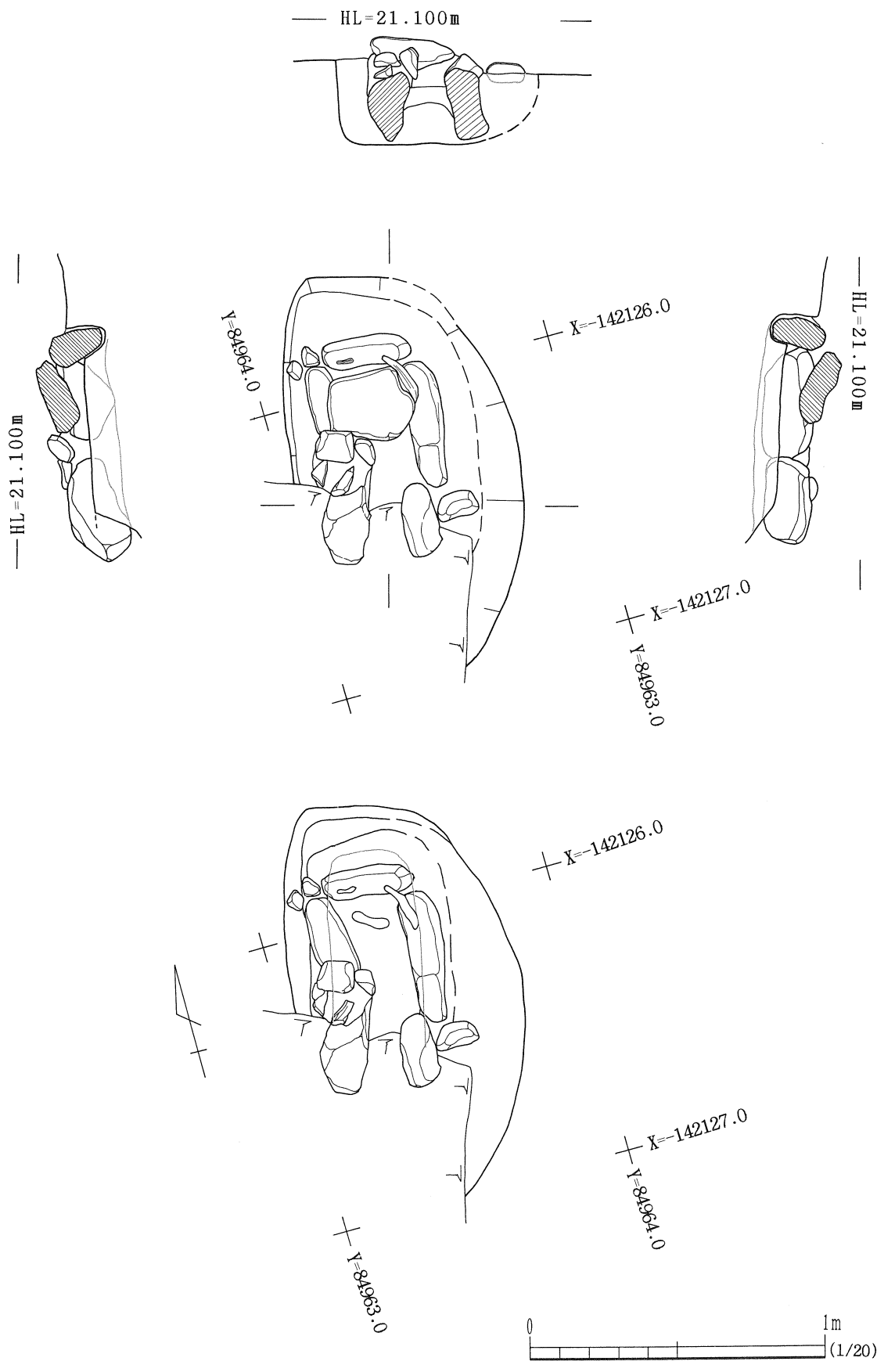
- A-A'
- 1: 暗褐色砂層 (周溝埋土)
 - 2: 黄白色砂層 (周溝埋土)
 - 3: 暗黄灰色砂質土 (石棺内埋土)
 - 4: 灰褐色砂質土 (封土)
 - 5: 灰黑色土



3号墳北側出土遺物



第33图 3号墳実測图



第34图 3号墳主体部実測図

を含まない純粋な砂層であることから、洪水によって埋没したと思われる。

遺物 本遺構中からの遺物の出土はなかった。

5号墳

遺構 (第35図、図版30) 本遺構は調査区南端に位置している。遺構の大部分が調査区外にのびており、今次の調査では、わずかに周溝外縁を検出するにとどまった。周溝外縁の形状は中央部が大きく膨らむが、溝の床面の線が直線的であることと、東西両端が古墳の東北端と北西端付近に当たると考えられることから、一辺10m程の方墳と考えられる。

周溝の幅は計測できなかった。遺構検出面からの深さは0.7～0.8mで、西から東に向かって深くなっている。周溝の外側の立ち上がりは水流によって抉られている。周溝埋土は、洪水によって堆積した砂層であり、さらにその上にも砂層が認められることから、墳丘も大部分が砂層に覆われたと思われる。周溝の底には黒色シルトの粘土が見られることから、墳丘の裾部にあたると考えられる。この粘土上に土師器の小型甕が貼りついた状態で出土した。

遺物 (第35図、図版45) 3は土師器の小型甕で、口縁部は短く丸みのある胴部を持つ。外面はハケによる調整、内面はヘラケズリによる調整、口縁はナデによる調整を施している。

6号墳

遺構 (第36図、図版31・32・33) 本遺構は調査区の西側に位置している。遺構の大半が調査区外にのびており、今次の調査では墳丘の裾部と周溝の東から南にかけての部分の調査を行うにとどまった。周溝の形状と北東・南東の端部の状況から方墳と考えられる。本遺構は8号墳を切っている。

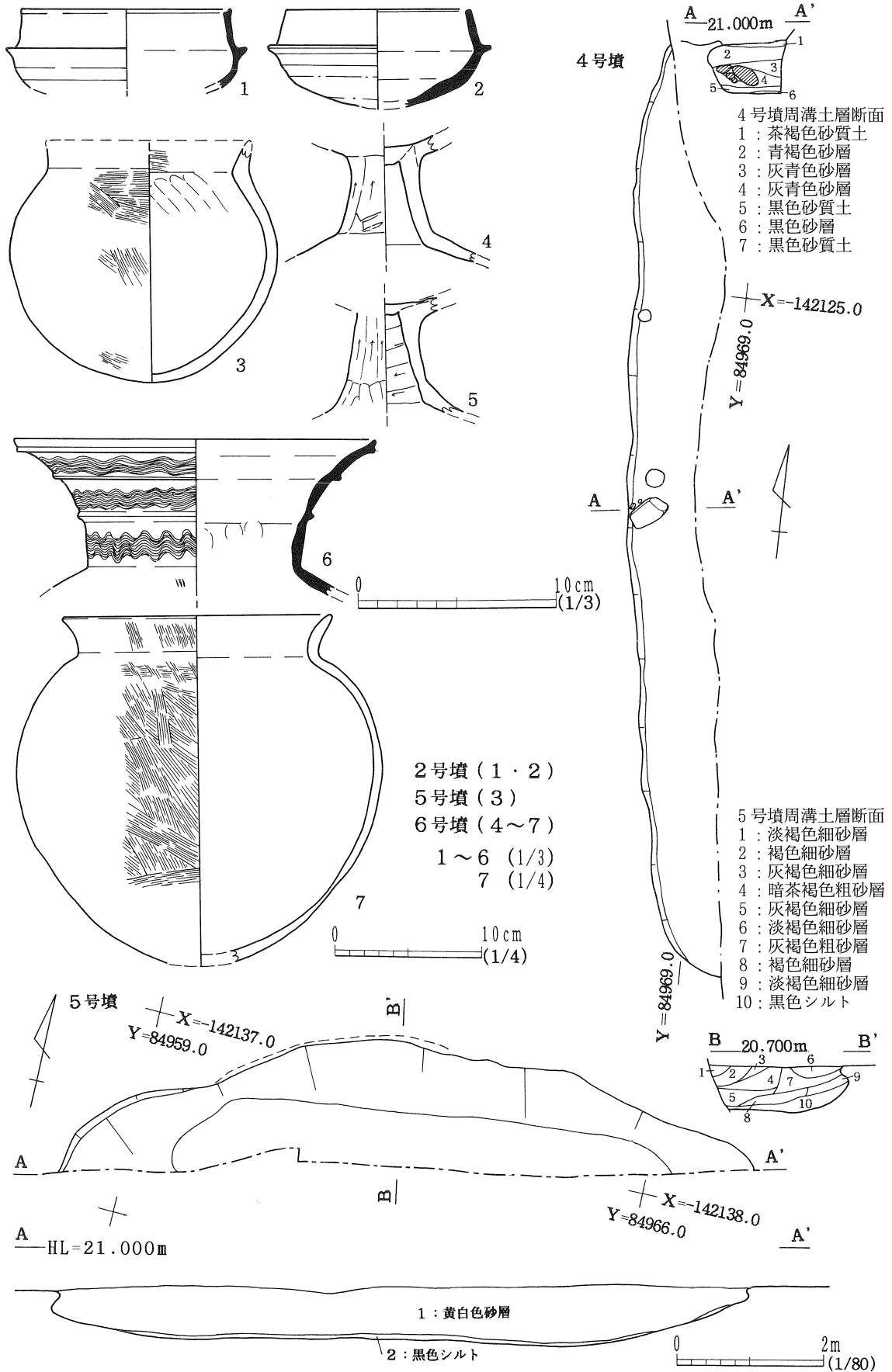
墳丘規模は周溝外径で14～15m、周溝内径は不明確だが13m程度と思われる。封土は墳丘裾部に粘土が確認できた。この粘土に葦石が埋め込まれている。葦石は径5～15cmの小礫で、ややまばらに葦かされている。

6号墳の東北部の遺構面には、6号墳の葦石に用いられているものと同様の礫が多数貼りついていた。他の場所にはこのような礫は見られないことから、洪水砂とともに流れてきたものではなく、葦石に使用した残りの礫の可能性も考えられる。

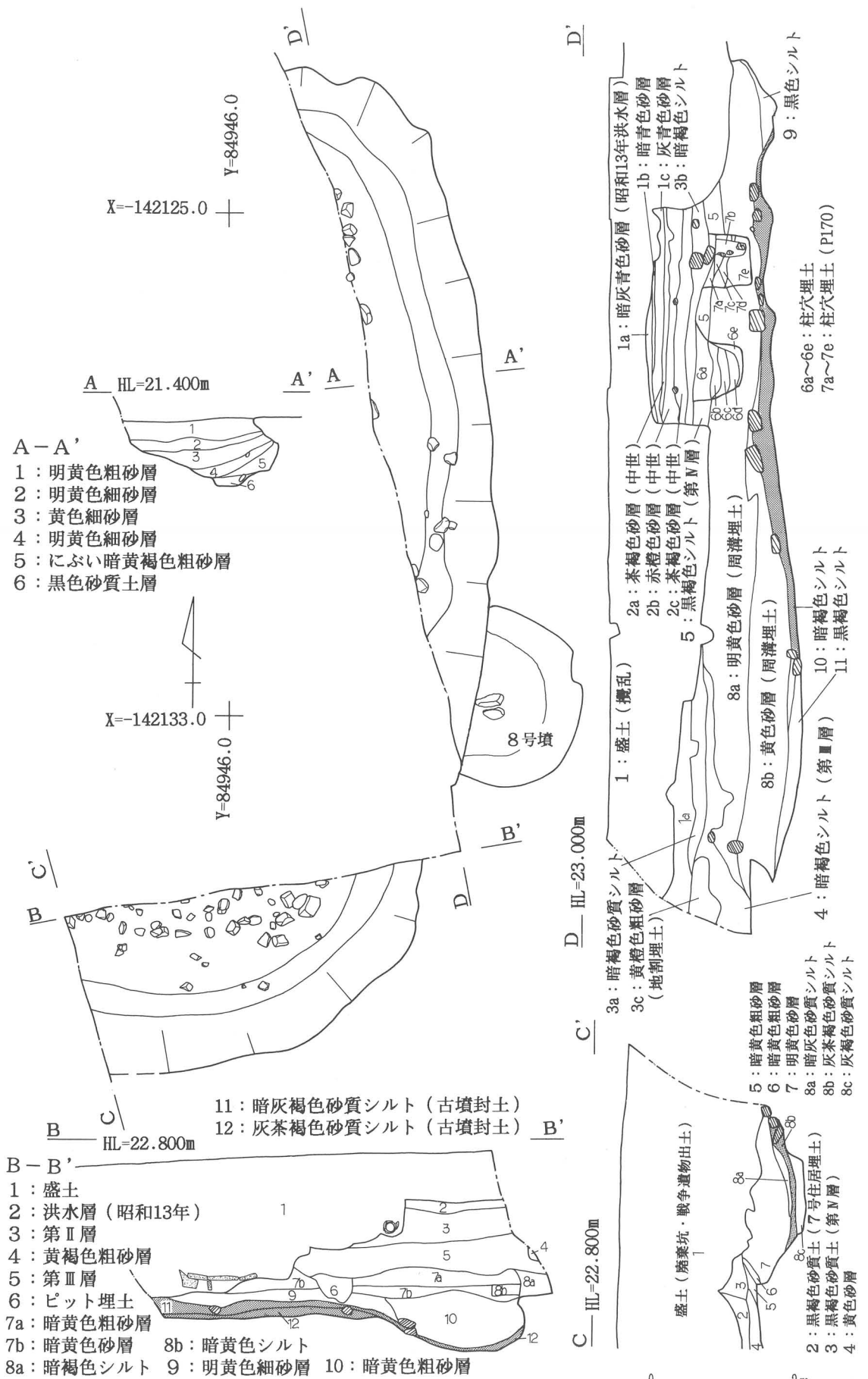
周溝幅は0.4～1.1m、遺構検出面からの深さは0.7～0.8mで、北から南に向かって深くなっている。周溝の内側の立ち上がりは緩やかで、墳丘の裾部にあたる。外側は壁が水流によって抉られている。周溝埋土は、すべて砂層であることから、洪水によって埋没したと思われる。さらに遺構検出面より上層においても砂層が厚く堆積していることから、本遺構の大部分がすでに埋没していたものと考えられる。埋土の上位から須恵器の広口壺の口縁部が出土しているが洪水時の流れ込みであろう。周溝南東部の床面から、粘土に貼りついて土師器の高杯と甕が出土している。

主体部は調査区外にあると思われ、今次の調査では検出されなかった。

遺物 (第35図、図版45) 4・5は高杯脚部で、脚部は大きく屈曲して開く。調整は内外面ともヘラケズリである。7は土師器甕で、口縁部は短く、大きく張った丸みのある胴部を持ち外面はハケによる調整を施している。口径は18.0cmを測る。6は須恵器甕の口縁部で、3条の波状文の間に断面三角形の突帯が入る。口縁下部にも突帯が貼りつけてあり、口縁端部に面を持たせている。時期はON46期にあたる。



第35図 4・5号墳実測図・古墳出土遺物実測図



第36図 6号墳実測図

7号墳

遺構（第37図、図版33） 本遺構は調査区南西端に位置しており、わずかに周溝外縁の一部が確認されたのみである。これが古墳の周溝と考えられる根拠は、第一に、埋土が他の古墳周溝の埋土と同様の砂層であり、その上を覆う砂層が南に行くにつれて斜めに上がっていることから、南側に墳丘の存在が予測される。これは5号墳でも同様な傾向が見られる。第二に、周溝の北側の立ち上がりが抉られていることと、遺構検出面からの深さが約60cmで、同じ高さの東側に位置する5号墳の周溝と一致する。第三に、本調査区内の第5遺構面は墓域であって、墓以外の遺構が存在していることが考えにくいという3点である。

検出された遺構が周溝のほんの一部であるために規模等は不明である。

8号墳

遺構（第37図、図版34・35） 本遺構は調査区西側に位置しており、6号墳の南東側周溝に切られている。古墳の形状は隅丸方形だが、小型のためにやや不整形になっているものと思われる。本来は他の古墳と同様に、方墳を意図したものと考えたい。

墳丘は、6号墳の周溝に切られていない東半分であっても、わずか20cm程の高さしかない。風化や洪水などにより封土が流されたと考えられる。残存する封土は、他の古墳の粘土と同様の黒色シルトである。墳丘の平面規模は、周溝外径で2.4m、周溝内径は2.0mを測る。周溝幅は0.3～0.4mで、遺構検出面からの深さは0.15m前後である。周溝の東側の立ち上がりは水流によりやや抉られている。

主体部は、合掌型に組まれた人頭大の2枚の扁平な川原石で構成されており、その内部には甕が正立して設置されていた。主体部の内部は、外部とほぼ同様な洪水砂で埋没しており、一度期に埋もれた様である。設置された甕の内部からも周溝埋土と同じ砂がつかまっていることから、洪水砂で埋没する以前から、主体部が露出していたと判断される。大きさから、胎盤も入らず、火葬骨も入っていなかったので、擬似的な墓であった可能性がある。

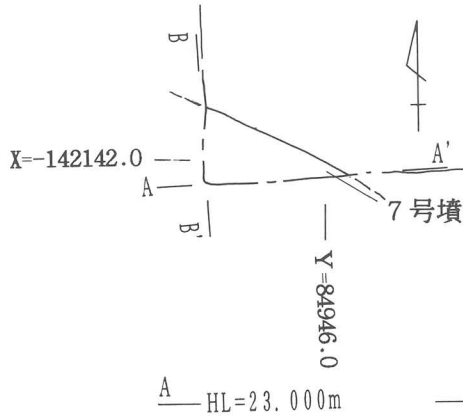
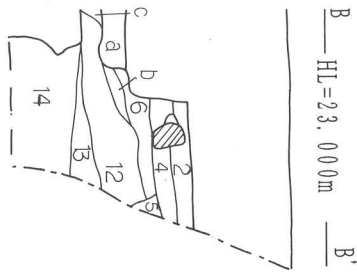
遺物（第37図、図版45） 本遺構から出土した遺物は、主体部より出土した甕のみである。口径8.85cm、器高9.1cmの小型のもので、頸部と胴部に波状文が入る。口縁部径が胴部最大径よりやや大きくなるもので、器高も口縁部径よりやや高い器形で、TK208～TK23期と思われる。

古墳を検出した第5遺構面からは古墳が8基発見されたが、古墳間の切り合い関係は8号墳と6号墳のみにしか見られず、また、それぞれの古墳に伴う遺物が少ないため築造順序を明らかにすることはできない。また、時期を特定できる古墳も少なく、それ以外は古墳群全体の存続時期から推定するよりない。8号墳は主体部の甕から、TK208～TK23期に該当し、これを切る6号墳は一時期新しいが、周溝出土の土師器甕からみて5世紀後半より下らないと思われる。

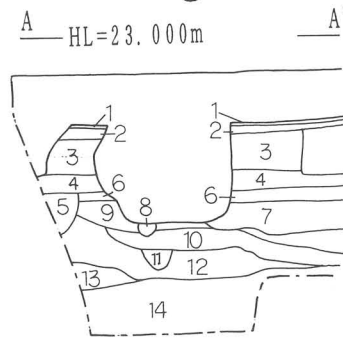
古墳群の上限は、最も古い時期の遺物で5世紀後葉より遡らない。下限は、2号墳の周溝に流れ込んだMT15期の坏が出土しているので、この時期の古墳も周辺に存在すると考えられる。

したがって、本古墳群の存続時期は、TK208～MT15期と考えられる。これは、第5遺構面より上位で出土する遺物の最も古いものが、MT85期であることからいえることである。

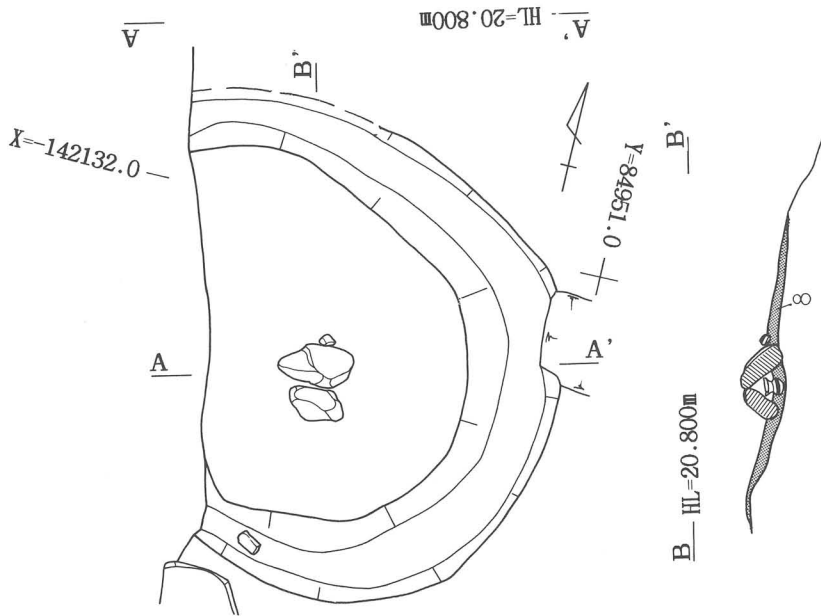
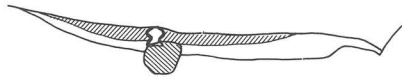
7号墳



- a : 8号住居埋土
- b : 黒褐色砂質土
- c : 暗橙色粗砂土
- 1 : 昭和20年の焼土層
- 2 : 整地層
- 3 : 洪水堂
- 4 : 近世~近代の水田
- 5 : 中世のピット埋土
- 6 : 第II層
- 7 : 第III層
- 8 : ピット埋土
- 9 : 淡灰色砂質土
- 10 : 淡灰赤褐色砂質土
- 11 : ピット埋土
- 12 : 淡灰黄褐色砂層
- 13 : 暗黄色粗砂層
- 14 : 明黄色粗砂土 (7号墳周溝)

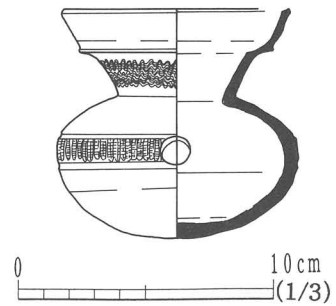


8号墳

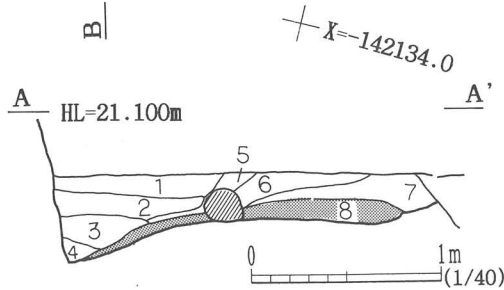


B—HL=20.800m

8号墳主体部出土遺物



- 8号墳土層断面
- 1 : 暗黄色粗砂土
 - 2 : 黄色粗砂土
 - 3 : 暗黄色粗砂土
 - 4 : 明黄色細砂土
 - 5 : 黄白色シルト
 - 6 : 暗黄色粗砂土
 - 7 : 黄色粗砂土
 - 8 : 黒色シルト層



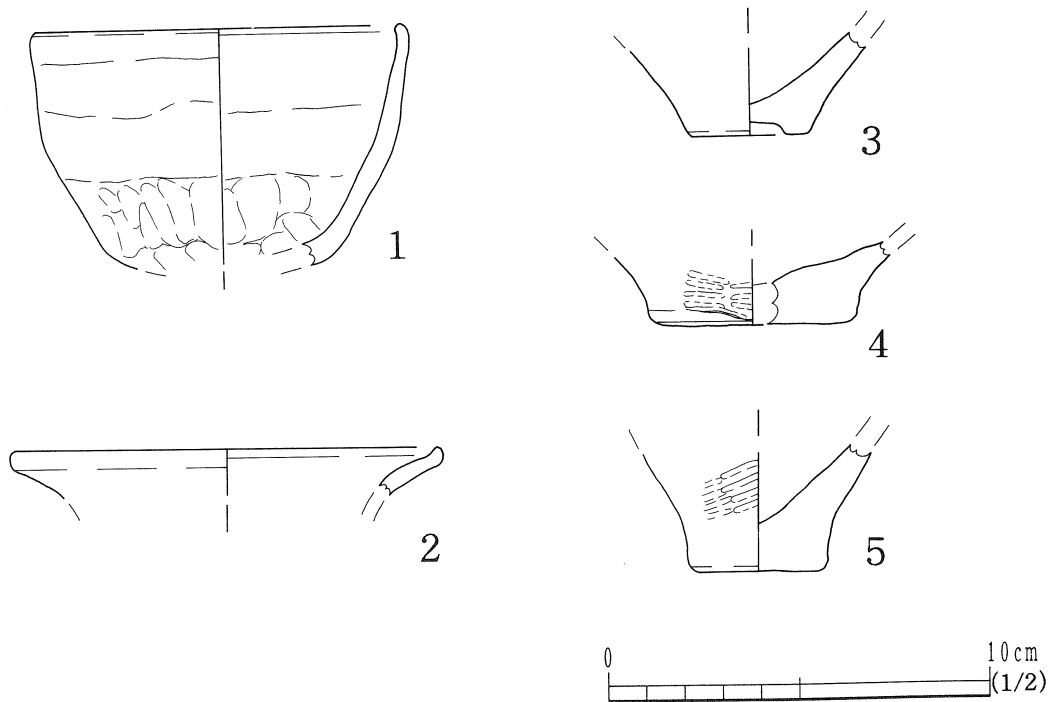
第37図 7・8号墳実測図

第5章 その他の遺物

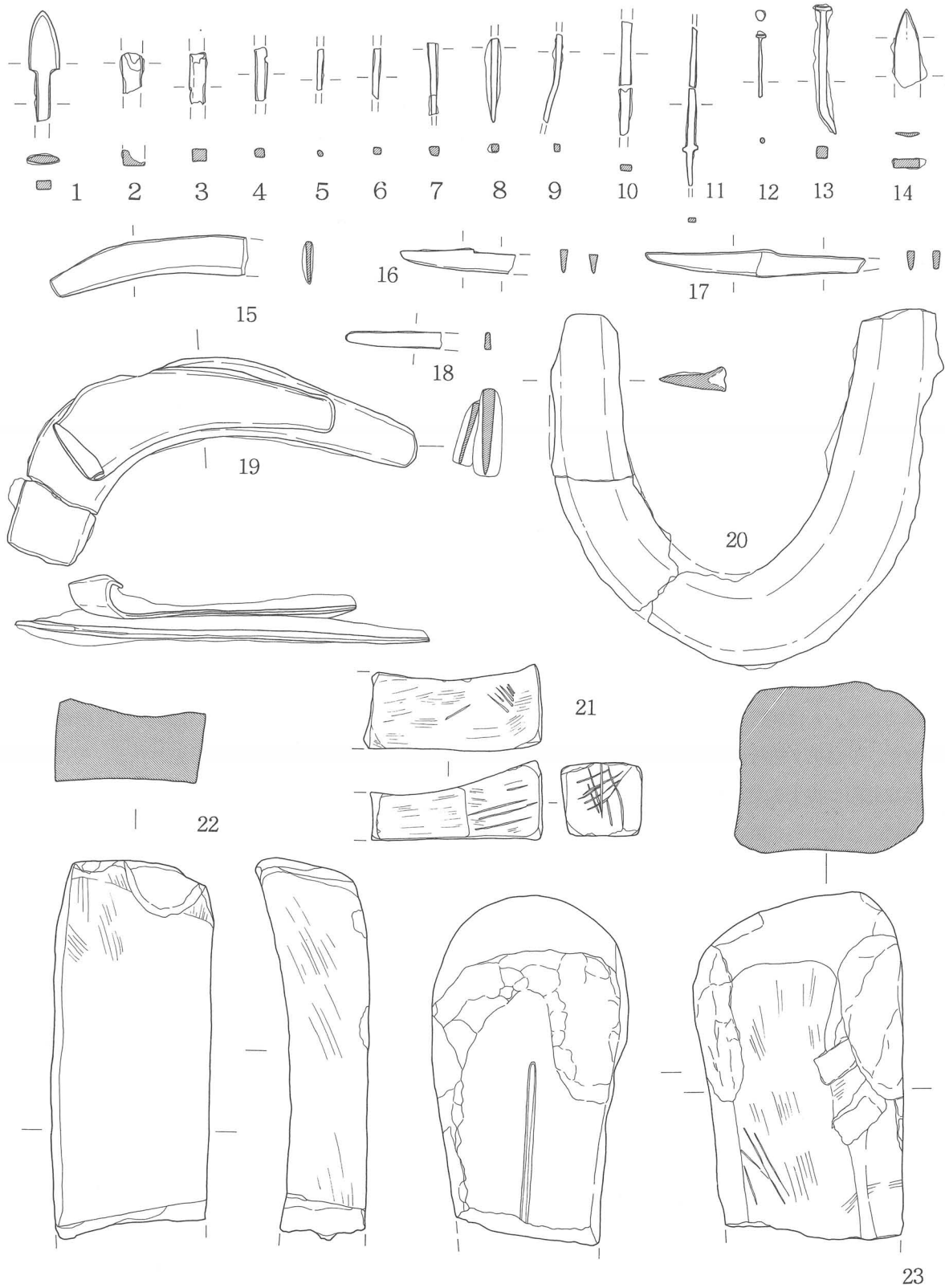
第1節 第V層出土遺物

本節では、第38図、図版53で掲載した遺物について取り上げる。第V層は前章で取り上げた、古墳を掘り込んで築造した層位である。平均して30cmの厚さをもつ粘質のある黒色のシルト層である。遺物は、主にV層の表面付近で採集されたもので、下層からの出土はみえていない。遺物の状況から弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺物包含層である。本次調査区における遺物の散布状況は、まばらで濃厚な分布を見いだすことはできなかった。遺物も少量で、いずれも小片である。また、粘質の強い土壌のために同化している遺物もあった。以下に図化が可能であった遺物について掲載する。

1は碗である。内湾気味に立ち上がり、口縁は内傾し、口縁の外側には荒いヨコナデ調整が見られる。全体的に漆黒を呈し、調整は雑である。口径は15.2cmを測る。2は外反する甕の口縁である。口縁端部をやや跳ね上げている。3～5は甕の底部である。3は器面を磨いたもので、底部はドーナツ状の上げ底である。4・5はタタキ目が施されるものである。4は底部が厚く、台状を呈する。胴部への立ち上がり角度は緩やかであるので、胴が大きく膨らむものと思われる。5は胴部への立ち上がり角度が急であるので、底部が急に細くなるものである。



第38図 V層出土遺物



II層中 (11・14・16・18) 3号溝跡 (17・21・23) 1号墳周溝 (20)
 IV層中 (1・8・12・15) 4号溝跡 (10)
 V層中 (2) 6号溝跡 (19・22)
 1号溝跡 (5・6・7・9) 8号溝跡 (13)
 4号溝跡 (3・4)

0 10cm (1/3)

第39図 鉄製品・石製品

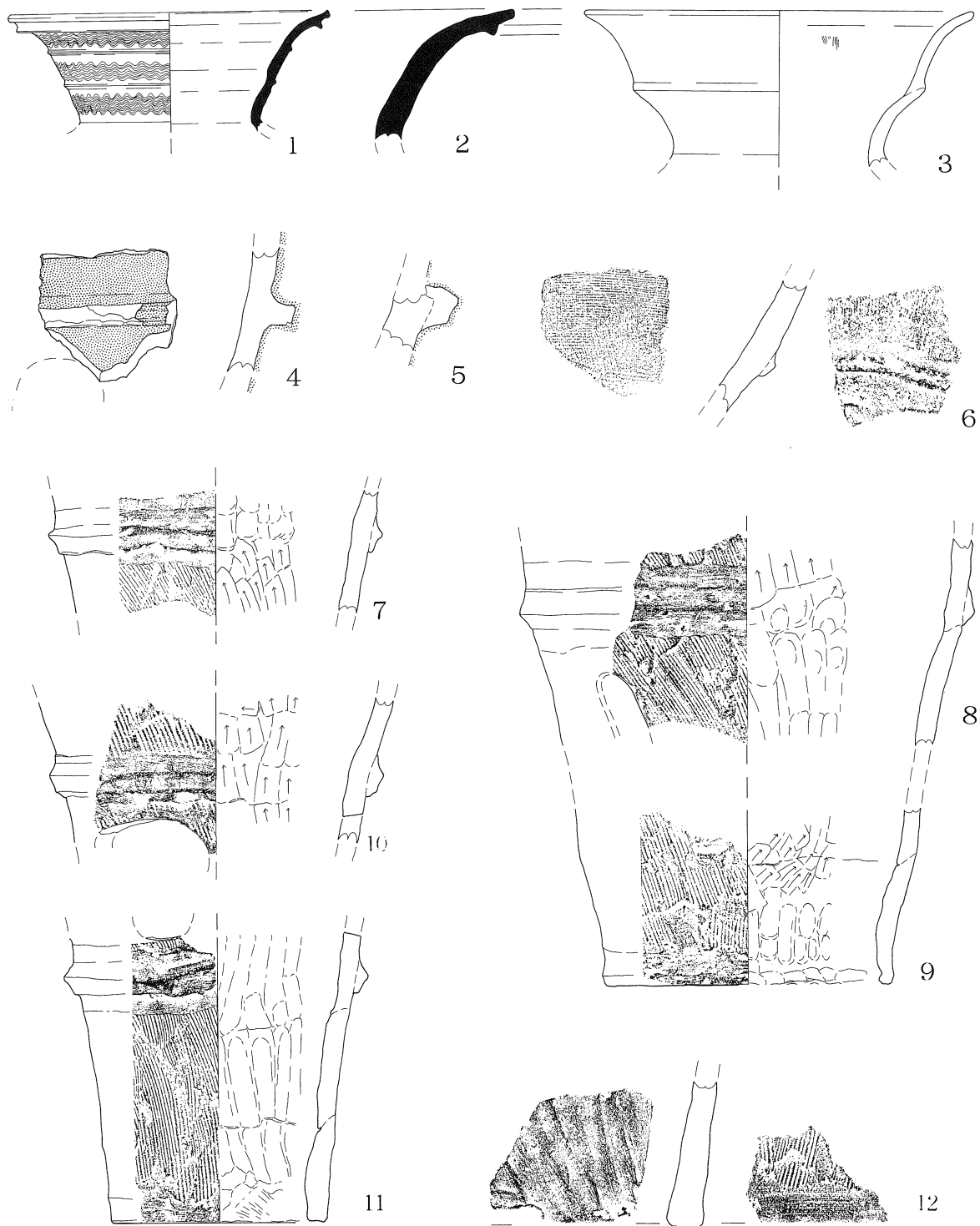
第2節 古墳時代遺構外出土の遺物

本節では古墳時代の遺物で、古墳の遺構の外から出土したものを扱う。出土した遺物は、すべて古墳が埋没した後に、本調査区に流れ込んだものや、あるいは上面の遺構に何らかの理由で混入して出土したものである。

遺物(第40・41図、図版45・52・53) 1は須恵器甕の口縁部で、3本の波状文の間に断面三角形の突帯が2本入る。口縁下部にも突帯が貼りつけてあり、口縁端部に面を持たせている。形状から広口壺であろう。復元口径は18.3cmで器壁は薄い。第IV層の出土である。2も同様に須恵器甕の口縁部である。器壁が厚く、無文であることから大型の広口壺か甕の口縁部と思われる。器面には自然釉がかかっている。1号集石遺構の出土である。3は二重口縁をもつ土師器壺の口縁部である。首部から外反して立ち上がり、一つ段をおいて口縁に向かってさらに外反する。器面がかなり荒れているため調整の跡は窺えなかった。復元口径18.1cmを計る。第IV層の出土である。

4～12は円筒埴輪片である。円筒埴輪片は多数出土したが、いずれも遺構に伴うものではなく、小片ばかりの出土であった。径の復元できる胴部片や、特徴のある遺物を図化掲載した。4・5・7・8・10は胴部片、6は朝顔型円筒埴輪の口縁部と思われる。9・11・12は基部片、うち11は須恵質の円筒埴輪である。4・5は外面に赤色顔料を施したもので、わずかに2点が出土しているのみである。突帯が胴部にほぼ垂直に接している。4は突帯の断面が整った台形で、幅は1.0cmを計る。円形透し孔の一端が確認できる。5は突帯の幅が1.9cmで、断面はいびつな台形で、やや下に傾いている。4は3号住居跡の埋土、5は第2遺構面のピット1から出土している。6は朝顔型円筒埴輪の口縁部と思われる。突帯は胴部器面に接する幅は1.3cm、高さ0.4cmで大きく下垂し断面が略三角形を呈する。外器面はタテハケ、内器面は細かい条線のヨコハケとタテハケが入る。重機による表土掘削中に出土した。7は外面がタテハケで調整されたのみで2次調整は施されていない。内面は下方から上方にむけて荒い指ナデが施されている。突帯は幅が1.8cmで断面は低い三角形を呈している。1号集石遺構の出土である。8は突帯の断面が1.9cmを計り低い三角形を呈している。突帯はタテハケによる器面調整後に取りつけられている。透し孔の一部がかかっている。内面は荒い指ナデが施される。1号土坑の出土である。9は基部にあたる。基底部下端はやや外方に開き、内側はくの字形を呈する。外面の調整はタテハケ、基部は板状工具で押圧後ヨコナデが施されている。内面は荒い指ナデが施され、基部に近い部分は指頭圧痕のみである。このため器壁が薄く、内湾している。1号溝跡の出土である。10は断面M字形の突帯が外面タテハケ調整後取り付けられている。突帯は幅2.0cmを計る。内面は荒い指ナデが施される。第IV層の出土である。11は基底部から第2段の透し孔の一部分まで残存している。須恵質の円筒埴輪である。外面はタテハケ調整のみで、基部下端はヨコナデが施されている。内面のナデ調整が粗いため粘土帯の接合痕が明瞭に残る。復元底径は10.0cmで、最下段の突帯までは10.7～11.1cmである。突帯は低い三角形の断面を呈し、幅は1.8cmを計る。4号溝跡の出土である。12は基部である。外面はヨコナデで、内面はタテナデが底部まで及んでいる。これは底部付近の器壁が肉厚になっていることと考えあわせると、粘土を貼り付けて補強した可能性がある。1号集石遺構の出土である。

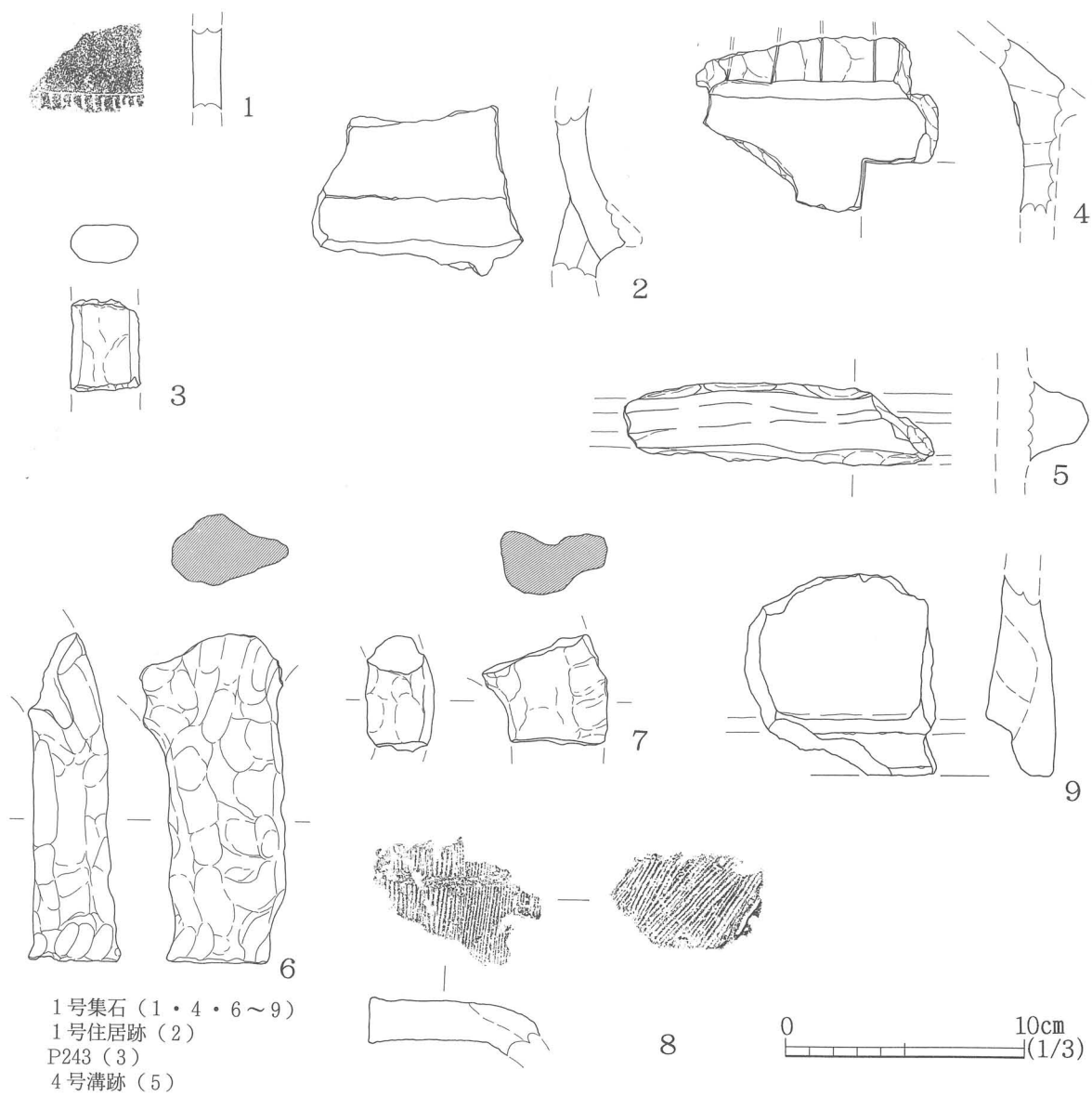
第41図の1～9は形象埴輪である。いずれも小片である。1は1条の沈線とこれに垂直な連続刺突文が見られる。明確な器種の特徴を示すものがない。器壁が薄く、かつ湾曲がほとんどないことから器台



- | | |
|-------------------|----------------|
| 表土掘削中出土 (6) | 4号溝跡出土 (11) |
| 第2遺構面出土 (5) | 1号土杭出土 (8) |
| 1号溝跡出土 (9) | 3号住居跡出土 (4) |
| 1号集石遺構出土 (2・7・12) | IV層出土 (1・3・10) |
| 4号溝跡 (3・4) | |

0 10cm (1/3)

第40図 古墳時代の遺物①



1号集石 (1・4・6~9)
 1号住居跡 (2)
 P243 (3)
 4号溝跡 (5)

第41図 古墳時代の遺物②

埴輪の可能性が強い。2は人物埴輪の上着の裾部かあるいは家型埴輪の底であろう。人物埴輪とすると、裾より下は円筒になり、裾部の先端は接合部で剥がれているらしく、裾はもう少し延びるだろう。家型埴輪とすれば、湾曲した高い屋根で底が短く、壁が直線的にはならず多少湾曲しているものが想定される。底となる剥落している部分は、住吉東古墳出土の家型埴輪と類似しているものとすれば、肥厚して装飾文様が描かれていたであろう。3は人物埴輪の腕と思われる。断面長楕円形の中実技法で、横幅2.8cm、厚さは1.6cmを計る。4は家型埴輪の屋根から壁の部分で、屋根の底と壁の器表面は剥落している。屋根は低い角度で直線的に上がっており、縦方向に等間隔の線刻が見られる。壁は板状の粘土板で直立

している。屋根の下に方形透かしで表現された窓のコーナーが見られる。5は断面の形状が蒲鋒状で、弦の部分が剥落した面である。指頭圧痕が均一についているので、水平に貼り付けられていたと考えられる。このことから家型埴輪の壁に付いていた突帯と想定されている。住吉東古墳出土の家型埴輪に類似するものがあり、高床建物の壁より外に張り出した床板を表現した裾周り突帯と思われる。幅は接合面で3.1cmを計り、住吉東古墳のものと同規格が類似する。6・7は動物埴輪の脚で同一個体の可能性が高い。脚は太く短く、体部から外に張り出している。断面形は歪な楕円形で、脚の後ろ側には鬚状のものがつまみ出されている。脚の端部は前面に指圧痕による爪があるのでイヌと思われる。調整がなく、整形時の指圧痕が前面に残っている。6と7が同一個体のものであるならば、左右対称の脚ではなく、前脚・後脚の位置関係になるものと思われる。8は器種不明である。内外にハケメが施され、端部は整形されて平滑になっていることから、両面とも外側に向けられたヒレのような部分と考えることができる。ただし、ヒレ付きの円筒埴輪にしてはヒレの幅が狭すぎるので、形象埴輪でヒレの付く器種と考えられる。9は器種不明である。外面は丸みを持ち、内面に段を有す。下端部は平滑であるのでこの面で接地すると思われる。内面の段は何らかの接合痕とも考えられたが、剥落した痕跡はなく、単に段である可能性の方が大きい。

本調査区内の古墳には埴輪を持つものはなく、またいずれも古墳時代の遺構面より上位で出土していることから、本来は今次の調査区より標高の高い場所に近接する大型の古墳に樹立された埴輪であったものと思われる。

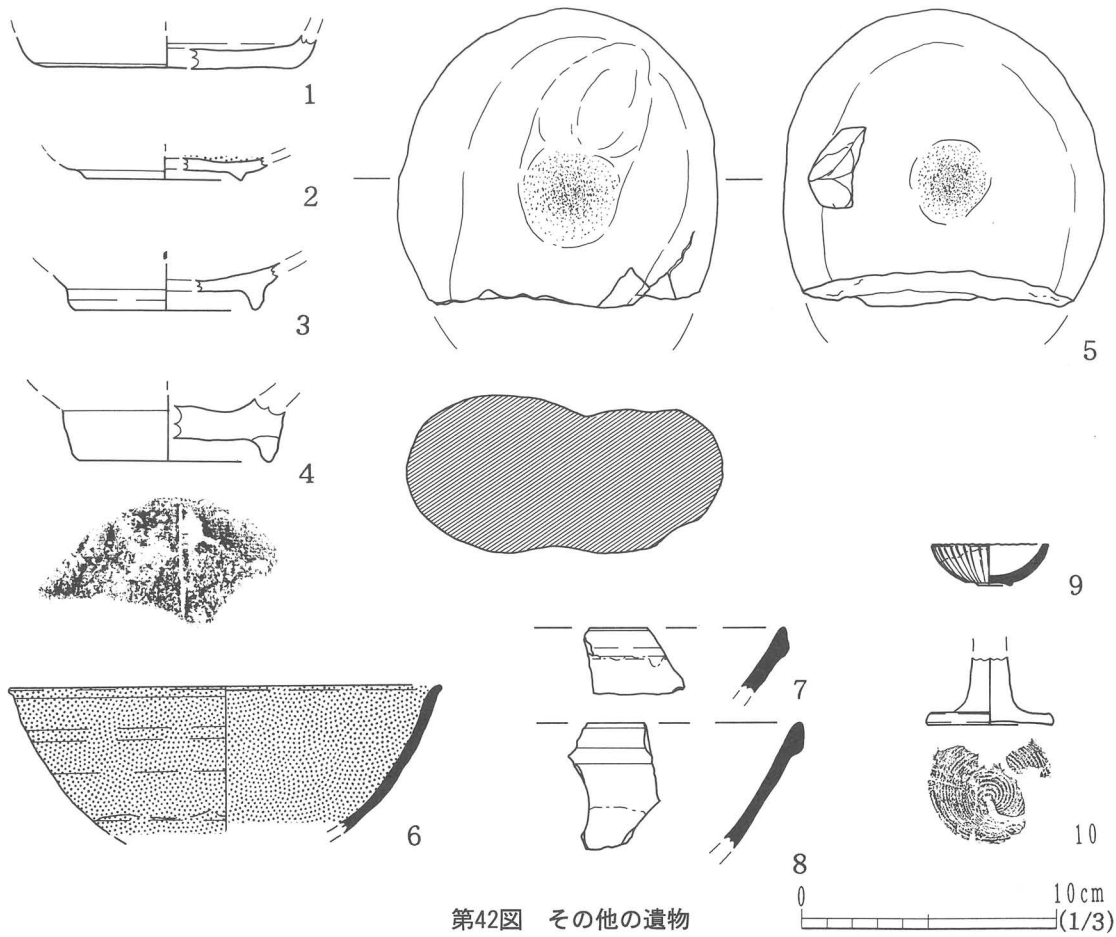
第3節 第I・II層出土遺物

本節では、第42図、図版53で掲載した遺物について取り上げる。

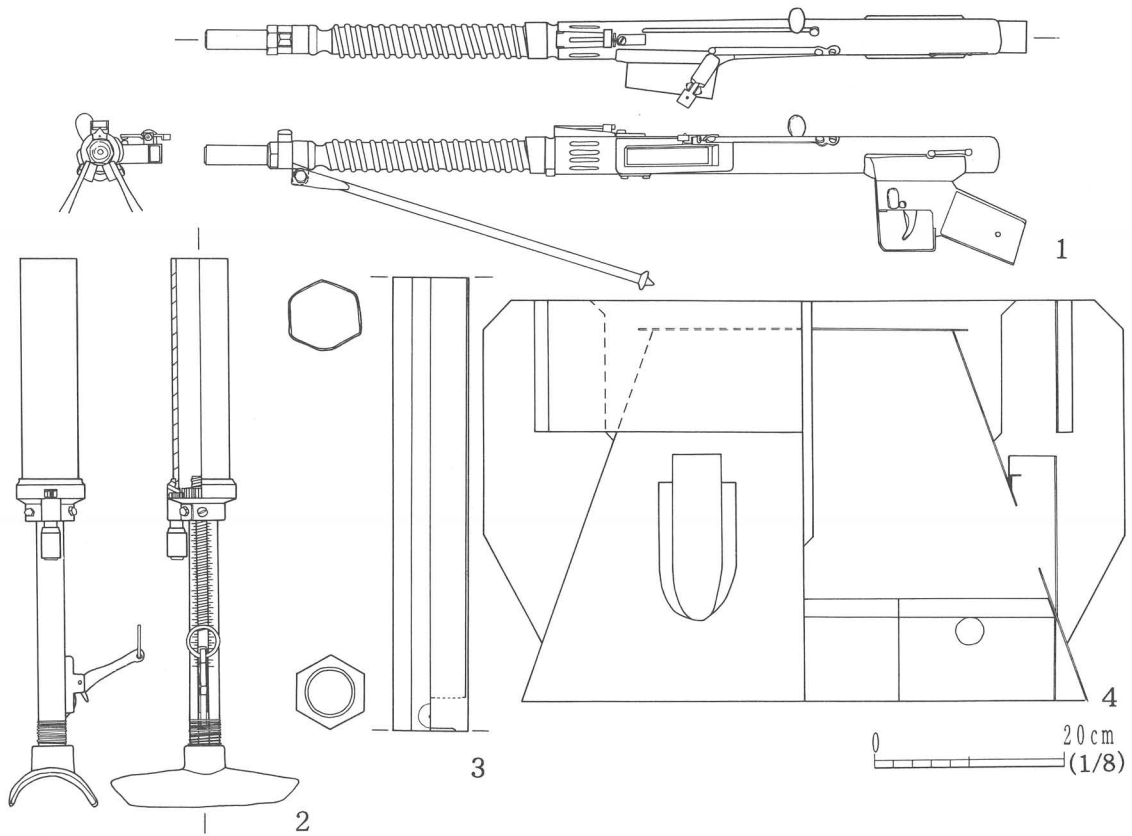
1は土師器の底部である。底部には回転糸切り痕が見られる。2は黒色処理の土師器である。全体的に摩耗が著しく判別はつかない。断面三角形の高台が付く。3は高台付き碗の底部である。4は土師質の高台付きの甕と思われる底部である。底部には一条の沈線が見られる。1～4はIV層の出土である。5は凹石と考えられる。平坦な石の表裏両面に凹面が見られる。表面には酸化した鉄がかなり付着していた。石材は硬質の砂岩である。4号溝の裏込めから出土している。6は灰釉陶器の碗の口縁部である。口縁端部が短く外傾し、身が深い器型で、内外面とも釉がかかっている。復元口径は17.6cmである。これらの特徴から11世紀前半代のものであると思われる。7・8は白磁碗の口縁部分である。玉露口縁を呈し、乳白色の釉がかかる。攪乱から出土した。9は陶器の紅猪口で、外面は菊花型の文様で、口縁から胴部に灰白色の釉がかかる。肥前系の型作り成型によるものと思われる。10は仏飯器の脚部で、底部は回転糸切りの跡が見られる。9・10は江戸時代後期のもので、近世の水田層である第II層の灰色砂質土層中より出土している。

第4節 戦争遺物

遺物（第43図、図版54） 今次の調査では、太平洋戦争当時に焼け出された火器類や焼夷弾等が出土した。これらのものは、表土掘削のおり、焼失した煉瓦などの建材などとまとまって出土したものである。住吉村役場焼失後に埋められたものである。



第42図 その他の遺物



第43図 攪乱中出土戦争遺物

1は軽機関銃である。3丁出土しているが、すべて火を受けてかなり錆びている。口径は6.5mm、銃身の長さは85cmである。弾を供給する装填架が左真横に付き、右斜め下に排莢するものである。日本製の軽機関銃にこのようなものはなく、恐らく外国製であろう。2は擲弾筒である。全体的に錆びていて詳細な部分は判別しにくい。が、国産の八九式擲弾筒と呼ばれるものであろう。一部割れている部分があり、その部分は鋳物鉄とも考えられるので、実戦用ではなく訓練用の擲弾筒の可能性も考えられる。全長58.4cm、筒長24.8cm、口径5cmである。3は焼夷弾の弾筒部である。形状は正六角形で長さ48cmを測る。M69焼夷弾と呼ばれるものである。ナフサとパーム油を混合したうえに燐やガソリン等を加えたものを筒内に充填したものである。充填時の重さは2.7kgであったという。4はM69集束焼夷弾の尾部である。弾筒を束ねて3段構成にし、頭部、筒部カバー、尾部で覆って1つの爆弾にしたものがM69集束焼夷弾である。

今回出土した戦争遺物に関連する記述が、(財)住吉学園発行の『続 住吉村史』に詳しいので抜粋してみる。

明治36年(1903) 在郷軍人会住吉分会発足

昭和13年(1938)10月 時局柄、郷軍の新訓練兵器整備のため、基金により5800円を得。

歩兵銃50丁・軽機関銃5丁・投弾筒5丁・手榴弾20個・携帯天幕30張を購入する。

昭和20年(1945)5月11日 第1回空襲

B29 50機が川西航空機甲南製作所を目標として襲来。

6月5日 8時 第2回空襲

B29多数による無差別爆撃のため、村役場全焼。

8月6日 第3回空襲

B29 130機が紀伊水道から西宮方面に襲来、焼夷弾4万発を投下する。

以上の記事から、本調査区で発見された軽機関銃、擲弾筒(投弾筒)は、昭和13年に在郷軍人会が購入し、その一部が、昭和20年6月5日の空襲により焼け出され、その後の整地をする段階で焼夷弾などと埋められたものと思われる。

今回の調査地点は、旧住吉村役場の跡地である。在郷軍人会は村役場に置かれていたようである。その村役場は6月5日の朝に始まる空襲で焼失したことが記載されている。焼失後は現在の神戸市立住吉幼稚園の地所に場所を移して役場の業務を行ったようである。

尚、6月5日の空襲の様子はアメリカ側の資料によれば、来襲したB29は531機、投下した焼夷弾の量は3132トンで、市の東半分が焼失した。焼夷弾の投下量は、3月10日の東京大空襲の2倍にあたるという。

ちなみに神戸市の西半分は3月17日の夜間空襲で焼き尽くされている。

第6章 ま と め

今次の第17次調査にあたって、調査で判明したことなどを簡単にまとめてみる。かなり限定された部分のある調査であるため、推測に頼らざるを得ない部分もあったが、特に古代において、かなりの成果を得ることができたと思われる。

平安時代から中世においては、少なくとも3面に渡る遺構面が検出された。遺構はピットと溝であったが、その配置から、方形に区画された溝で囲まれた屋敷地に小規模ながら掘立柱建物の存在が予想できた。全体的な状況は、建物の基礎により破壊され、また調査面積が限られているため、不明な点は多い。また、度重なる洪水砂の堆積により、何度も建て替えが行われた状況が把握はできるものの、柱穴を見落とすことが多いような堆積状況であった。この遺構面で検出された方形区画の溝跡からは、へそ皿と呼ばれる土師器皿が重なった状態でまとも出土した。このことは、溝を破却する際にお祀りしたものであると思われる。また南北にのびている溝からは、へそ皿とともに朱色の草木文のある黒漆塗りの椀が出土したが、すでに木質部が失われているために復元には至らなかった。へそ皿の出土は都との関連を窺わせるものである。この遺構面は第2面としたもので、これらの遺物から14世紀から15世紀にかけての遺構面と思われる。

奈良時代の遺構に該当する1号集石遺構や4号溝跡は、今回の調査においては貴重な発見と考えられる。すなわち、1号集石遺構を石敷き道路と、4号溝跡を柵の抜き取り跡と想定できるからである。出土遺物の時期は8世紀前半代であり、その時期に道路と柵の両方が廃絶している。構築時期は、1号集石遺構の下から検出された掘立柱建物跡が7世紀前半代であるから、7世紀後半には設置されたものと考えられる。本遺構の石敷き道路跡に最も類似した例としては、広島県草戸千軒遺跡の石敷き道路がある。時期が15～16世紀とかなり後代のものであるが、幅が約2.5mの南北方向の道路跡で、路面中央に扁平な石が並べられ、その両側にやや小さい石を敷いている。道路の側面に布堀の柵跡がある点も酷似している。当該時期の例としては、大阪府高槻市の嶋上郡家付近で検出された石敷き道路がある。古代山陽道と考えられる道路である。道路は新古2面あり、奈良時代の道路面は幅約9mで、小礫を敷いたものである。

平安時代の道路面は幅約6mで大きめの川原石を敷いている。本遺跡検出のものは、平安時代の道路面に状況に近い。官道は、前述のような郡家などの重要施設付近や湿地地帯では石敷きで舗装されている例が少なくない。本調査区の場合、石敷き道路の設置された遺構面は低湿地ではないので、重要施設が存在している可能性を暗示している。遺物としても円面硯が存在しているので、識字階層がいたことは間違いないが、墨書土器などの文字資料は出土していない。存在すると推測される重要施設が何であるかは不明であるが、石敷き道路跡に併走する長い柵跡の存在から、柵で区画される施設であることが予測される。区画は西側に展開すると予想され、本調査区内ではこれ以上の推測はできない。今後、西側での調査が進めば明らかにされるだろう。

飛鳥時代の遺構については、掘立柱建物跡7棟、竪穴住居跡16基が検出することができた。遺構の新旧関係は、3号・4号掘立柱建物跡が6号・12号竪穴住居跡に切られていることから、基本的には竪穴住居跡が掘立柱建物跡に後続するものと考えられる。竪穴住居跡群は、かなりの切り合い関係と攪乱のため形状の不明確なものが多いが3号・4号に代表されるような形状を示すものと思われる。調査区内

で検出された竪穴住居跡は、おおむね調査区の東側に集中していることを見ると、西側を特に意識して、繰り返し同じ場所で建て直していることが予測される。東側は調査区外にあるため、まったく判然としないが、同じ場所に集中していることから見て、やはり東側には広がり制約するものが存在することによってこのような状況があるものと思われる。これら住居跡は、一部を除いては、どれもかまどを持つものである。住居の床面は、砂地のためか踏みしめられた痕跡は残っておらず、概して柔らかい。掘立柱建物跡は建物の軸線の違いから2時期に分かれるものと考えられる。4号建物跡・5号建物跡のグループと1号建物跡・2号建物跡・3号建物跡・7号建物跡のグループである。新旧の別は判断できる資料がないので、ここでは触れない。後者のグループの建物位置は、極めて計画的なものと言え、また柱穴の作りもしっかりとしたものであった。いずれにしても、この遺構面の時期は、出土した遺物から6世紀後葉から7世紀初頭と考えられよう。

古墳時代の遺構と遺物については、本調査区では8基の古墳が検出された。小型の不整形のものも含めてすべて方墳を意図している。これまで行われた周辺の調査においても、ほぼ同時期の方墳が近接して多数発見されている。近年発見されたもので方墳以外の形状を示す墳形は、第9次調査で発見された「住吉東古墳」がある。帆立貝形で埴輪の樹立も認められ、周辺の古墳よりも規模が突出したものである。また、本住吉神社に残された古地図によると、JR住吉駅の北側には「坊ヶ塚」と呼ばれる前方後円墳が存在したらしいが、都市化の進行のため地上の部分は消失している。このことから、おそらく古墳群の築造契機となった前方後円墳や、これに続く帆立貝式古墳を除いては、造墓集団の一般構成員の墳形には強い規制が働いていたと思われる。このあり方は、大阪市長原古墳群と近似している。長原古墳群では、全長約100mの「塚の本古墳」とそのすぐ近くにある小型の前方後円墳を中心に小型の方墳が密集して造営されている。この古墳群では、5世紀前半代に築造された「塚の本古墳」の造営が契機になって、その後の5世紀中頃に小型の方墳が築造され始めている。前方後円墳などの盟主墳の規模が、方墳群を卓越するのは自然であるが、方墳群の中にも規模の大小や葺石・貼石の有無でいくつかのグループができる。このことから、一般構成員の中も階層分化が進んでいたと考えられる。住吉宮町遺跡においてこれまで確認された方墳群のうち、規模のわかるものでは、一辺18mクラス、15mクラス、10mクラス、それ以下の小型古墳の4種類に分けられる。

18mクラス : 第1次調査3号墳

墳丘上に列石、埴輪列がある。

15mクラス : 第5次調査SX11・第9次調査2号墳・第13次調査1号墳・第17次調査6号墳

墳丘斜面に葺石がある。

10mクラス : 第1次調査1号墳・第9次調査3号墳・第17次調査1・2号墳

墳丘上に列石を巡らすか、あるいは外部施設を持たない。

以上のように、墳丘規模と外部施設の構成は対応しているといえる。今回の調査で円筒・形象埴輪片が流れ込んだ状態で多量に出土したが、埴輪を樹立するのは一辺18mクラス以上の方墳か、「住吉東古墳」のような盟主墳で、本調査区より北側にそうした古墳が存在していると予測される。古墳群の時期は、出土した須恵器からON46期～MT15期で、5世紀後半から6世紀初頭と考えられる。出土遺物が少ないために築造順序は明らかではない。

今回の調査意義の一つには、小型古墳の発見がある。これは第5遺構面が、洪水によって堆積した砂層を取り除くだけで確認できるほど土質の違いがあったことによる。中でも8号墳は、はたして古墳と

呼んでよいものか躊躇するほどの規模である。主体部に設置された竈は、口径8.85cmで、小児どころか
嬰兒さえも納めることができない。また、内部からなにも出土しなかったことから、蔵骨器とも考えに
くい。しかしながら、外観は墓を意識して作られているので、単なる祭祀行為とも考えにくい。ここで
はこれを被葬者の一部のみを納める墓ではないかという推定に留めたい。

第 2 編 住吉宮町遺跡第 18 次調査

第2編 住吉宮町遺跡第18次調査

第1章 調査経緯

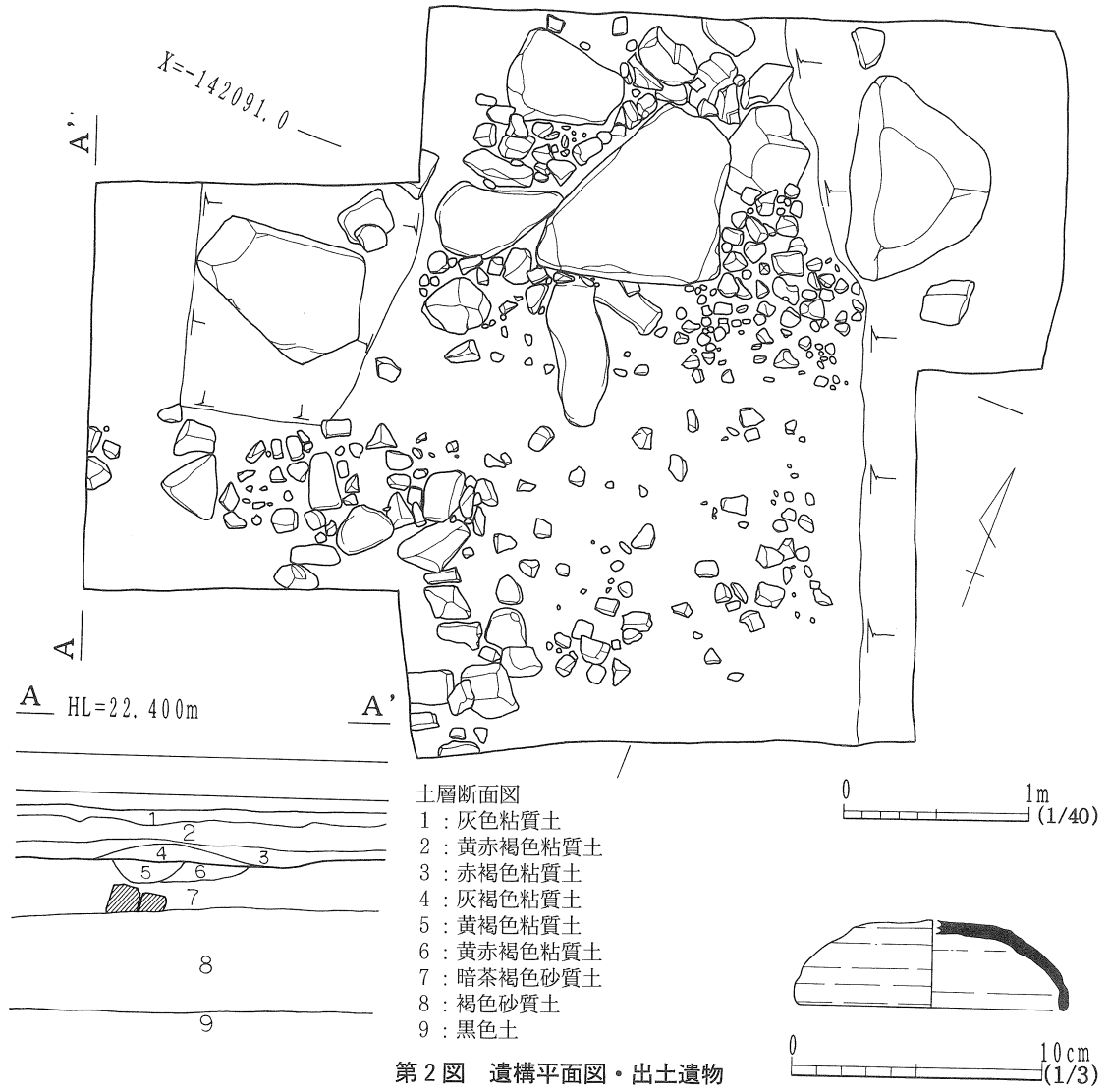
第1節 調査の経緯

本次の調査地点は、住吉宮町7丁目7-7である。道を挟んで南西に隣接する第17次調査を実施中の平成7年10月17日に発見された。現地は阪神・淡路大震災のため家屋が倒壊し、その跡地にサンケイ新聞専売所を建設しようとするところであった。表土を60~80cm程掘削し、径10cm程度の栗石を敷き詰め、そこからコンクリートの基礎を施工する工程であった。発見時には、敷き詰められた栗石の間からかなり大きな石の一部が顔を見せていた。このあたりでは土石流による転石か古墳の石室のいずれかであると考えられたため、市教委の担当者と連絡をとり、翌日精査する方針でいくこととした。発見日の翌18日には、施工業者に事情を説明し協力を求めたところ、基礎用の生コンの納入が復興関係の需要が大きく、予定した日時を逃すと何日後になるかわからないので、2日後の土曜日までに何とかならないかとのことであったが、調査協力については快諾を得た。敷地西側の道路沿いに土層面が露出していたので、観察するために削ったところ土器片が数片採集されたために、記録の措置を執ることとした。



第1図 18次調査位置図

Y=84980.0



第2節 調査方法

調査は原則通り、遺構が破壊される部分について行われた。工事の範囲が現在栗石の葺いてある深度および面積よりは拡大しないとのことなので、とりあえず直接生コンのかかる石が露出している部分を中心にして8㎡を調査し、状況に応じて拡大することとした。調査範囲をまず縄張りし、その地点の栗石をはぎ取り、下の状況を確認しながら調査を開始することとした。栗石をはぎ取っていったところ、石の隙間から生コンが漏れ、遺構に影響を与える虞があるために、結果的に16㎡の調査を実施することになった。

17次調査と平行して行ったため、ベンチマーク及び国土座標は、17次調査の地点から移設して、実測を執り行った。遺構の実測は1/20に統一して行った。

調査終了後は、遺構の保護のために砂とケミカルコンクリートを混合し、今回調査した全面に施した。

第2章 遺構と遺物

第1節 基本土層（第2図・図版1）

調査区の西端は道路脇の側溝に面していたが、本来の土層が残っており、この壁を利用することにして土層断面を観察した。

第2図の土層断面図について説明を加える。第1層より上面の2面は、震災後家屋を撤去した際の整地面である。第1層は、灰色粘質土でしまりが強い。以下の2層との層境が凹凸であるので、後世の人為的な堆積と考えられる。道路脇の側溝に隣接しているため、その影響か、コンクリート側溝敷設前の側溝に沈殿した汚泥の可能性も考えられる。第2層は粘質のある土ではあるが、酸化した鉄分を多く含む砂が多く混入している。第4・5・6層は攪乱と思われるが、近年のものではない。第7層は暗茶褐色砂質土である。酸化鉄を多く含む砂で、第17次調査の第4遺構面の上面（8世紀中頃）を覆っている砂によく似ている。遺構を直接包んでいる層であり、遺物もこの層より出土している。第8層は褐色の砂質土できめの細かい土壌である。遺構はこの面を基底面としている。第9層は、黒色土層である。隣接する第17次調査地点では古墳を掘り込んだ面である。土の色や質は同じものであるため、一連のものと思われる。

第2節 古墳

遺構（第2図・図版2）前章でも記述したように、遺構の破壊される範囲のみの調査であるため、遺構の全体像は把握できなかった。

栗石をはぎ取っていくと、1m程度の大きさの石が、上面を平坦にして据えていることが判明し、その周辺には20～40cmほどの石が並べられていた。石の間には5～10cmほどの礫が敷き詰められていた。礫の敷き方は、上面を平面にして据えた石の南側に集中して集められている状況が観察された。礫の間からは若干の須恵器や土師器片の出土が見られた。

調査区の東側と西側の一部の攪乱は、施工業者の話によると、重機による表土掘削の際に、巨石が邪魔になり、動かそうとしたが大きすぎて0.25㎡級の重機では転がすことしかできなかったとのことである。そのため東側の石は平坦な部分を横にし、鋭角の部分を上面にしていた。また西側の石は平坦な部分を斜め上方に向けて攪乱穴に落ちていた。

遺物（第2図） 本調査地において出土した遺物は須恵器・土師器であった。これらは、礫群の中からの出土であるため、この遺構に伴うものと考えている。28リットルのコンテナの1/3程度の出土である。そのうち復元及び図化出来たものは、第2図に示した須恵器の杯蓋の一点のみである。つまみは持たない。口径10.8cm、器高3.6cmを測る。6世紀末から7世紀初頭に比定されよう。

第3節 まとめ

極めて限定された調査であったために、判明したことはそう多くないが、これによって推定されるこ

とは、横穴式石室の一部であろうということである。すなわち、1 mを越えるような大きさの石を用いていることや、その石の面を上面で揃えて意識的に施設を構築していることである。かなり貧弱な根拠に基づくことであることが難点であるが、この推定が正しければ、この周辺で今まで知られている神戸女子薬科大学構内古墳（生駒古墳）や岡本梅林群集墳などの横穴式石室を持つ古墳に比べて、最も標高の低い地点で存在することが明らかになった点では意義があると考えられる。今後隣接地での調査で周溝などの存在が確認されれば明らかになることであるので、あくまでも推定に留めておきたい。

本報告書で取り扱った住吉宮町遺跡第17次調査は阪神・淡路大震災後の迅速な住宅供給を前提として行われたものであるため、より時間に追われた調査であった。第17次調査では、都市部の調査では比較的広い約400㎡の調査であったが、調査を担当した調査員にとっては、周辺を住宅で囲まれた場所での調査は不慣れなためと、狭い場所での何層にも渡る遺構面の把握、攪乱によって全体像をつかみきれないもどかしさ。派遣元とはかなり異なる調査体制にとまどいながら、市の担当者に状況や方法を教わりながら調査にあたった。調査の途中、隣接地の工事現場で、基礎工事中に発見された石の頭が、どうも古墳の一部ではないかと思われ、とりあえず影響のある部分だけでも調査をしておこうと飛び入りで実施した18次調査。わずか16㎡、2日間の調査だったが、こういうものが復興調査か、と思った次第である。いろんな面で混乱というものがあったが、少しは復旧・復興の役にたっていたかどうかと思いを巡らしている。とりあえず出来ることを何とかこなしてきたことだけが救いである。調査にあたって遺物整理のことが懸念されたが、どのような状況になるか判らない状態であったので、現地で出来るだけ整理を進めておこうというのが、担当調査員の共通理解であった。水洗い、選別を並行しておこない、実測可能な遺物を厳選し、順次実測をおこなった。一部を残してなんとか大部分を現地で終わらせることができた。報告書作成を考えたのは、現地調査終了頃に遺物の実測点数がかなり多くなり、遺構の質も考え合わせての上である。その後は、他の現場の合間を縫って、報告書作成に至る整理を継続しておこなった。版組とだいたいの構想がまとまったのは、平成8年の夏場で、順次原稿を書いていき、平成9年の夏・秋に編集・調整をおこなった。落ち着いて整理に当たらなかったことや、慣れない風土での調査、派遣元では出土しないような遺物の出現、派遣元に帰任後の相互の連絡不足で（福島ー福岡）、至らない点もかなりあると思うが、この報告書が、今後住吉宮町遺跡他の迅速な調査をする上で、多少なりとも参考になれば幸いである。

現地調査および報告書作成にあたっては、神戸市教育委員会をはじめ兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所、各都府県から兵庫県に復興支援に派遣された数多くの支援職員諸氏、また派遣元の教育委員会及び団体、その他多くの方々からは絶大なる協力を得た。ここに記して感謝したい。

最後に、阪神・淡路大震災で亡くなられた皆様のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々の一日も早い復興を願ってこの報告の締めくくりとしたい。

参考文献・資料・報告書

- 『兵庫県史 考古資料編』 兵庫県 1992
- 『新修 神戸市史 歴史編Ⅰ 自然・考古』 神戸市教育委員会 1989
- 『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1988
- 『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- 『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- 『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1993
- 『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1995
- 『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1996
- 『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1997
- 『県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』 兵庫県教育委員会 1988
- 『平成7年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1996
- 『地下に眠る神戸の歴史展Ⅳ－発掘調査速報展』 神戸市教育委員会 1986
- 『地下に眠る神戸の歴史展Ⅵ』 神戸市教育委員会 1988
- 『地下に眠る神戸の歴史展Ⅶ－発掘調査速報展』 神戸市教育委員会 1989
- 『新交通システムに伴う 住吉宮町遺跡立会調査概要』 兵庫県教育委員会 1988
- 『住吉宮町遺跡 第11次調査』 神戸市教育委員会 1990
- 『兵庫県文化財調査報告第63冊 住吉宮町遺跡群Ⅰ（坊ヶ塚遺跡）』 兵庫県教育委員会 1989
- 『兵庫県文化財調査報告第81冊 坊ヶ塚遺跡（住吉宮町遺跡群Ⅱ）』 兵庫県教育委員会 1990
- 『兵庫県文化財調査報告第83冊 住吉宮町遺跡発掘調査報告書』 兵庫県教育委員会 1991
- 『灘住吉郵便局新築工事に伴う 住吉宮町遺跡発掘調査実績報告書』 兵庫県教育委員会 1987
- 『昭和62年度 住吉宮町遺跡第5次（北野邸）埋蔵文化財発掘調査概要』 神戸市教育委員会 1987
- 『平成元年度 住吉宮町遺跡（第9次）整理事業実績報告』 神戸市教育委員会 1990
- 『住吉宮町遺跡 立会調査実績報告書』 兵庫県教育委員会 1989
- 『都市計画道路住吉南線基礎工事に伴う 住吉宮町遺跡発掘調査概要』 兵庫県教育委員会 1989
- 『平成元年度 東灘区民センター建設に伴う発掘調査概要 ー住吉宮町遺跡第13次発掘調査ー』
神戸市教育委員会（財）神戸市スポーツ教育公社 1990
- 『住吉宮町遺跡14次調査 発掘調査実績報告書』 神戸市教育委員会 1991
- 『住吉宮の前住宅建替事業に伴う 住吉宮町遺跡発掘調査 実績報告書』 兵庫県教育委員会 1993
- 『住吉宮町遺跡15次調査 発掘調査実績報告書』 神戸市教育委員会 1993
- 『住吉宮町遺跡16次調査 発掘調査実績報告書』 神戸市教育委員会 1994
- 『平成7年度 住吉宮町遺跡第17次調査実績報告書』 神戸市教育委員会 1996
- 『平成7年度 住吉宮町遺跡第18次調査実績報告書』 神戸市教育委員会 1996
- 『兵庫県文化財調査報告 第36冊 北青木遺跡』 兵庫県教育委員会 1986
- 『神戸市東灘区 岡本北遺跡』 六甲山麓遺跡調査会 1992
- 『神戸市東灘区 郡家遺跡 ー篠坪地区第10次調査ー』 六甲山麓遺跡調査会 1995
- 『兵庫県埋蔵文化財情報 ひょうごの遺跡18号』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1995

『神戸都市地図』 柏書房（株） 1995

『神戸市埋蔵文化財分布図』 神戸市教育委員会 1995

「復興と保護のはざまで揺れる 神戸の“埋蔵文化財”」 釘田寿一 『実業の日本』 VOL98 1995

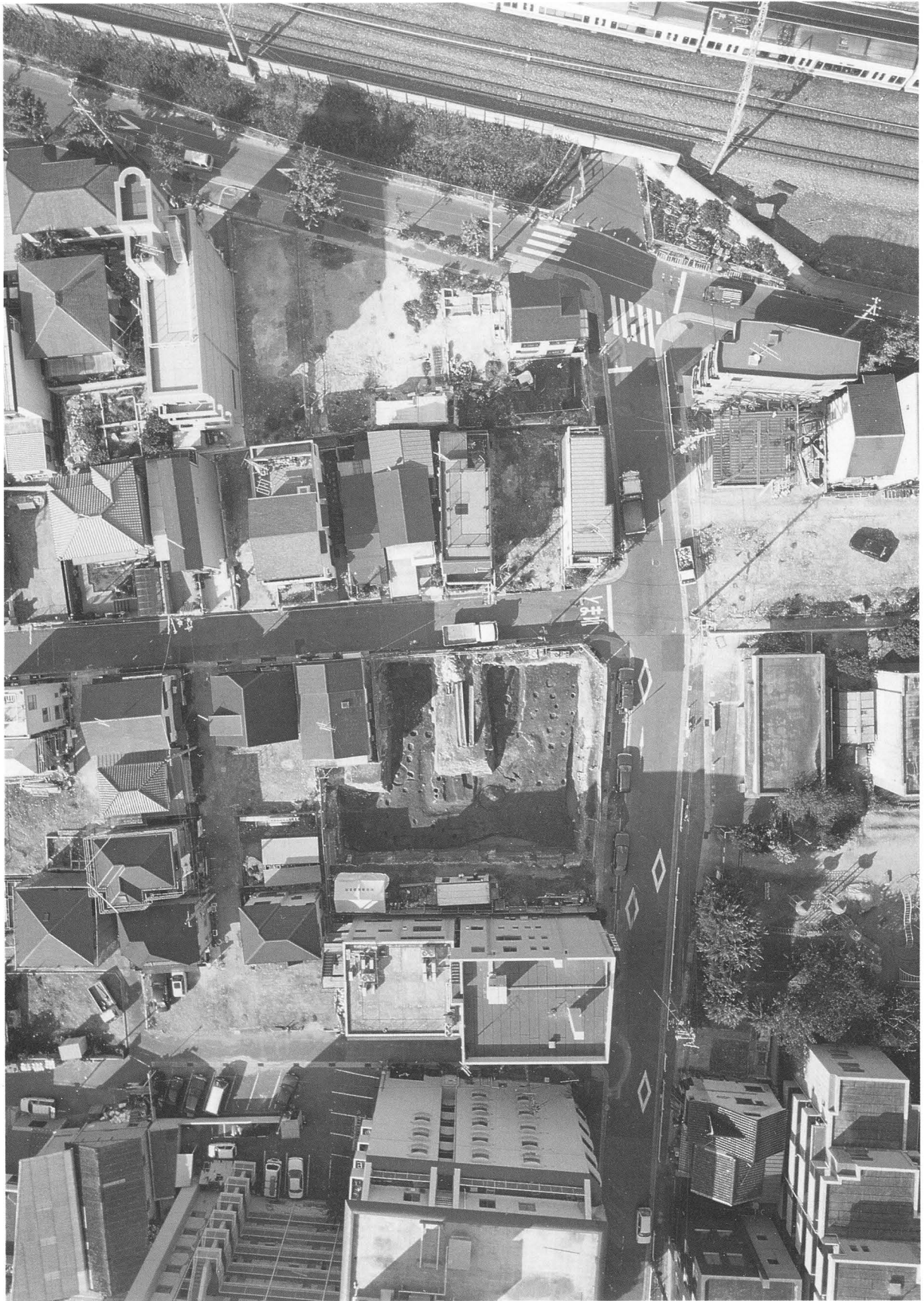
『日本の軍用銃と装具』 須川薫雄 著 国書刊行会 1995

『米軍が記録した 日本空襲』 平塚柁緒 編著 草思社 1995

『続 住吉村史』 (財)住吉学園 1982

報告書抄録

ふりがな	すみよしみやまちいせき だい17じ・18じ							
書名	住吉宮町遺跡（第17次・18次）							
副書名	阪神・淡路大震災復興に伴う調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小野田 義和 秦 憲二							
編集機関	神戸市教育委員会文化財課							
所在地	〒651 神戸市中央区加納町6丁目5番1号							
発行年月日	1998年（平成10年）1月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		経緯・経度		調査 期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
すみよしみやまちいせき 住吉宮町遺跡 （第17次）	こうべしひがしなだく 神戸市東灘区 すみよしみやまち 住吉宮町 7丁目4-13	28110	39	34度 42分 55秒	135度 15分 40秒	1995年 9月7日 ～ 11月24日	400㎡	集合住宅建設
すみよしみやまちいせき 住吉宮町遺跡 （第18次）	こうべしひがしなだく 神戸市東灘区 すみよしみやまち 住吉宮町 7丁目7-7	28110	39	34度 42分 56秒	135度 15分 40秒	1995年 10月19日 ～ 10月20日	16㎡	店舗兼住宅の 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
住吉宮町17次	集落 古墳	古墳～中世	方墳8基 竪穴住居跡16基 掘立柱建物跡7棟 石敷道路・柵跡 溝跡		弥生土器・須恵器 土師器・土錘・製 塩土器・蛸壺・布 目瓦・円面硯・青 磁皿・白磁・滑石 製紡錘車・円筒埴 輪・形象埴輪・鉄 製鋏先・鉄族・刀 子・鉄鎌・砥石 備前甕・土師器皿		奈良時代の石 敷道路と並行 する柵。	
住吉宮町18次	古墳	古墳	横穴式石室床部		須恵器・土師器			



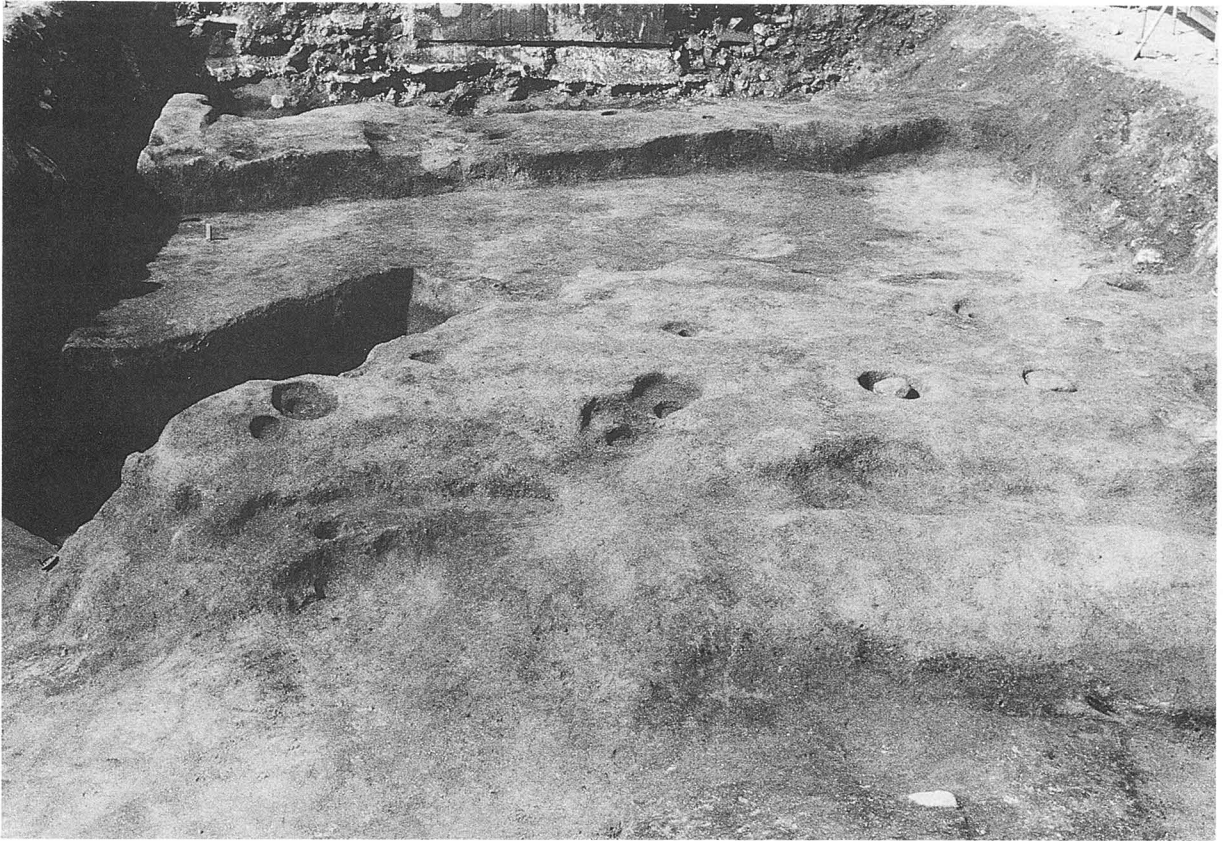
図版 1 住吉宮町遺跡17次、18次調査 航空写真



調査状況（北東から）



図版 2 調査状況（南東から）



第1 遺構面全景（南から）



図版3 第2 遺構面全景（南から）



第3遺構面全景（南から）



図版4 1号溝跡南側遺構（西から）



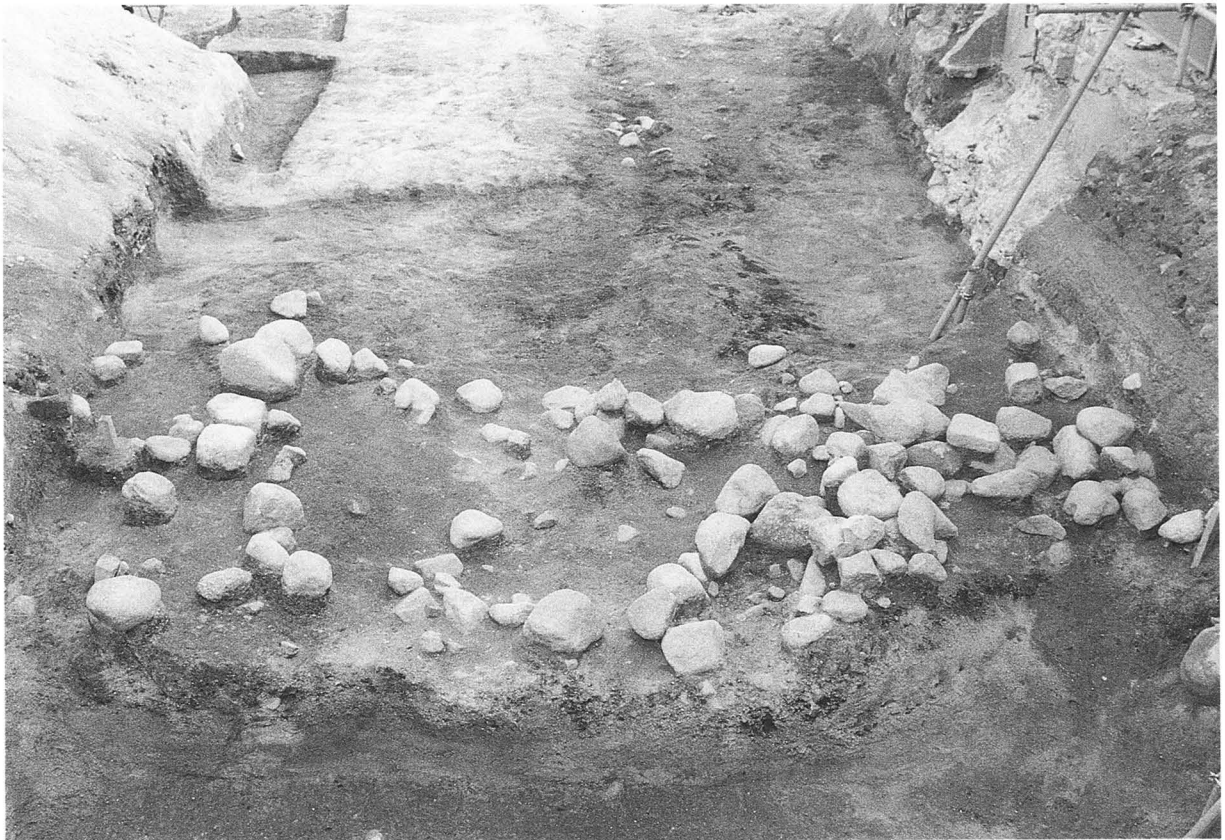
1号溝跡東側遺構土層断面（南から）



図版5 1号溝跡南側遺物出土状況（東から）



1号集石遺構全景（南から）



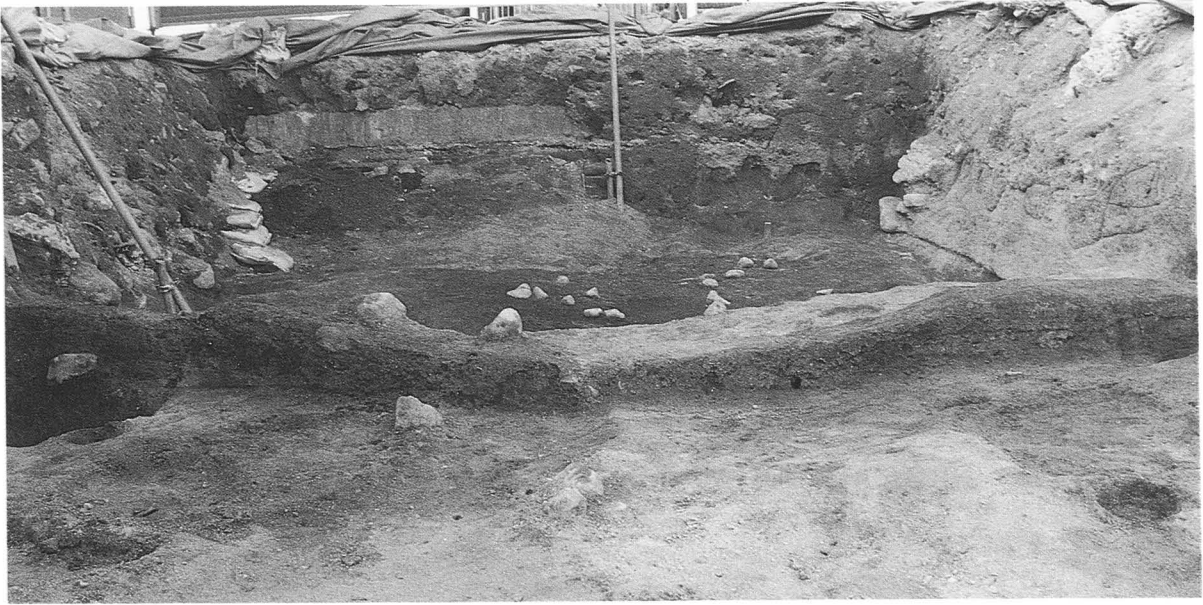
図版6 1号集石遺構北側部分と断面（北から）



1号集石遺構・4号溝跡調査区南壁断面C-C' (北から)



図版7 1号集石遺構・4号溝跡調査区南壁全掘C-C' (北から)



4号溝跡北側土層断面A-A' (南から)



4号溝跡中側土層断面B-B' (南から)



1号集石遺構遺物出土状況、円面硯(南西から) 1号集石遺構遺物出土状況、須恵器甕(南西から)

図版 8



4号溝跡全景（南から）



図版9 4号溝跡・柱列・掘立柱建物跡（南から）



図版10 第4遺構面全景（航空写真・右側が北）



1号建物跡（西から）



P226土層断面



P227土層断面



P228土層断面



P174土層断面

図版11



2号建物跡 P161断面



2号建物跡 P162断面



2号建物跡 P165断面



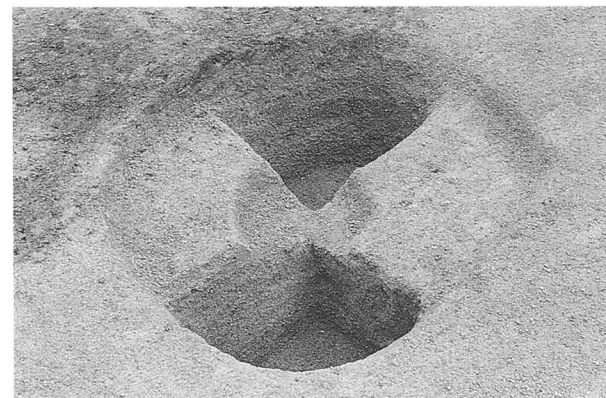
2号建物跡 P167断面



3号建物跡 P191断面



3号建物跡 P192断面

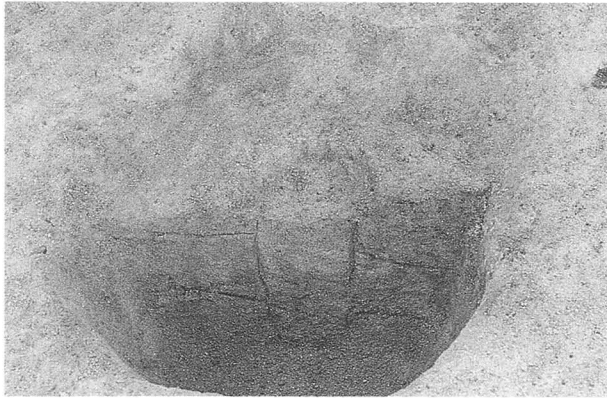


3号建物跡 P255断面

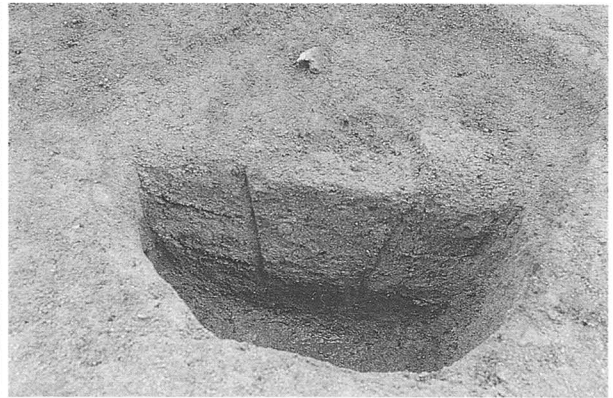


3号建物跡 P256断面

图版12



4号建物跡 P152断面



4号建物跡 P153断面



4号建物跡 P171断面



4号建物跡 P170断面



図版13 竪穴状遺構（南から）



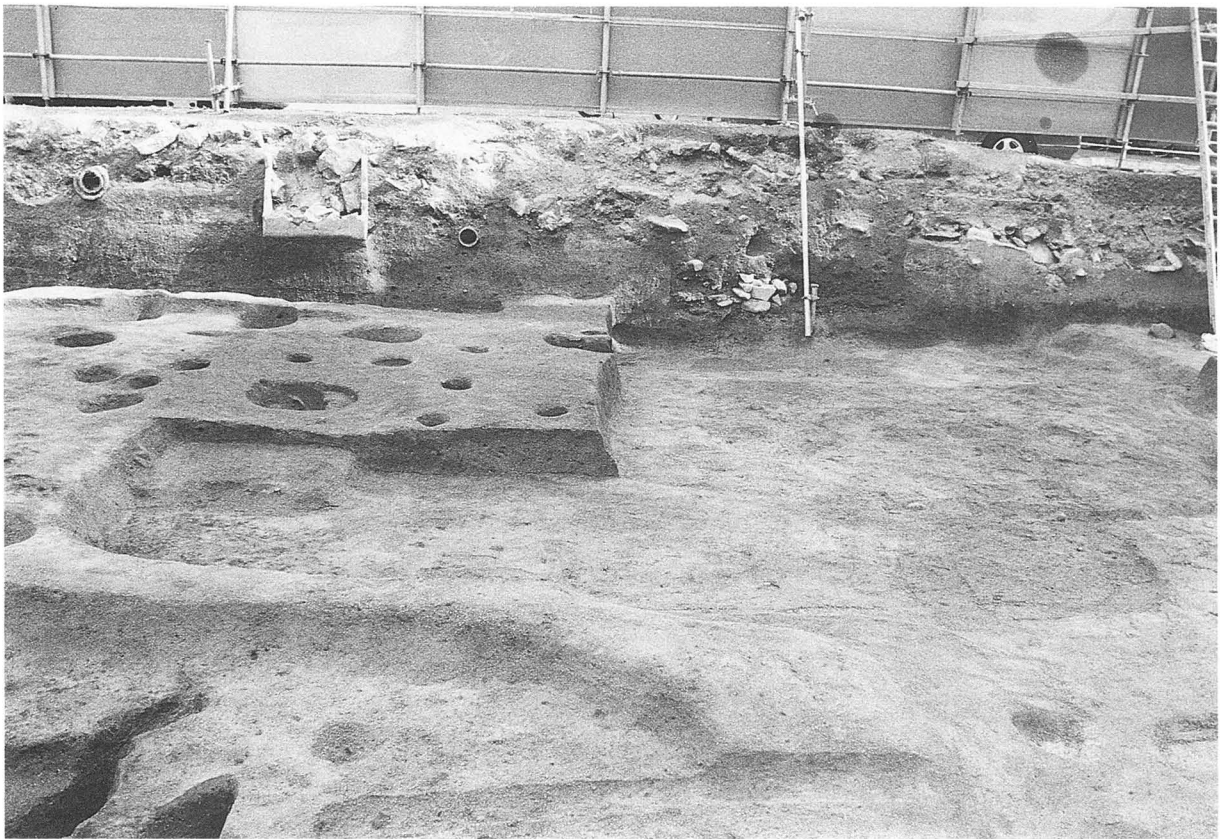
3号竪穴住居跡全景（南から）



図版14 3号竪穴住居跡かまど全景（南から）



4号竪穴住居跡全景（南から）



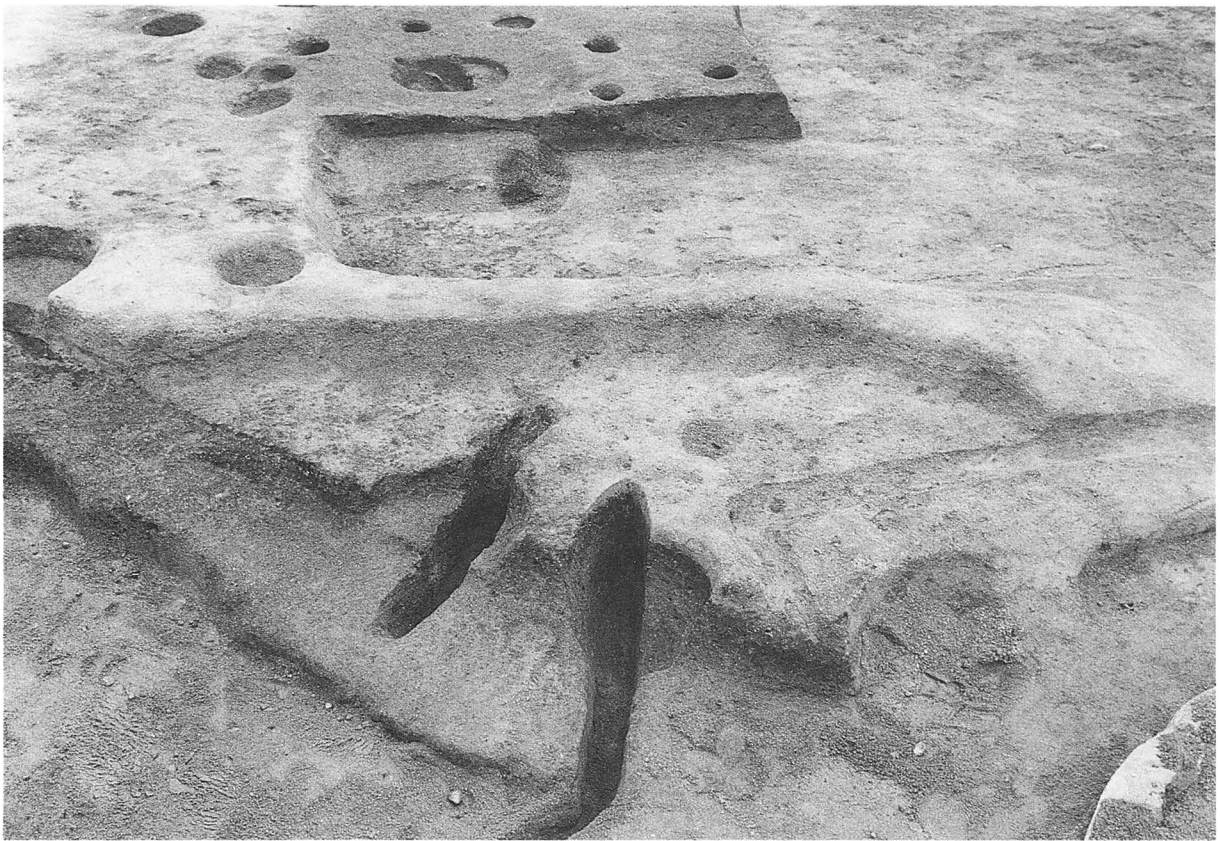
図版15 4号竪穴住居跡土層断面（西から）



4号竪穴住居跡かまど全景（南から）



図版16 4号竪穴住居跡かまど土層断面（西から）



5・13号竪穴住居跡全景（西から）



図版17 7号竪穴住居跡全景（東から）



6号竪穴住居跡全景（北から）



図版18 8・9号竪穴住居跡全景（西から）